

徳山ダム水没地区埋蔵文化財

発掘調査報告書 第5集

長吉遺跡・普賢寺跡

1994

水資源開発公団

財団法人 岐阜県文化財保護センター

徳山ダム水没地区埋蔵文化財

発掘調査報告書 第5集

ちょう きち ふ げん じ
長吉遺跡・普賢寺跡

1994

水資源開発公団

財團法人 岐阜県文化財保護センター

序

揖斐川の最上流部に位置する徳山村は、徳山ダム建設に伴って全村水没することとなり、昭和62年4月1日をもって藤橋村に合併されました。徳山地区には豊かな自然とともに、旧石器時代にまでもさかのばる数多くの遺跡が残されていますが、これら歴史的な文化遺産も多くが水没することとなりました。

このため、水資源開発公団の委託を受け、昭和61年度から岐阜県教育委員会が発掘調査に着手し、平成3年度からは財岐阜県文化財保護センターが引き続いて発掘調査を継続しております。これまで空白であった岐阜県と滋賀県、福井県の接点でもあるこの地域の、東西・南北の文化交流の様相などの解明が期待されることから、全国的にも注目を集めています。

本報告書は、徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告の第5集であり、平成3年度に実施した「長吉遺跡」と「普賢寺跡」の調査成果をまとめたものです。

この報告書の刊行にあたり、発掘調査及び出土品の整理・報告書の作成に際しましてご指導・ご協力を賜りました関係諸機関・各位に厚くお礼申し上げるとともに、本書が東海地方のあけぼのの解明に多少なりとも資する所があればと願うものです。今後とも一層のご指導・ご協力をお願い申し上げます。

平成6年12月

財団法人 岐阜県文化財保護センター

理事長 吉田 豊

例　　言

1. 本書は岐阜県揖斐郡藤橋村大字塚字ホキ尻、寺平に所在する長吉遺跡(G19T06419)、同村大字開田字高に所在する菩賢寺跡(G19F06694)の発掘調査報告書である。
2. 本調査は徳山ダム建設事業に伴うもので、水資源開発公団から岐阜県教育委員会を通じて委託を受け、財團法人岐阜県文化財保護センターが実施した。発掘調査面積は長吉遺跡が1,277m²、菩賢寺跡が408m²である。
3. 発掘調査は平成3年度に実施し、岐阜県文化財保護審議会委員・愛知学院大学教授大參義一氏の指導のもとに宇野治幸・鈴木昇が担当した。
4. 本書に記載した遺物の実測は次の者が行った(50音順)。
小坂宗和・藤田通弘・鈴木昇・千藤克彦・牧村美和子
5. 実測図等のトレースは実測者の他、次の者が行った(50音順)。
木本千春・岡晶子・竹中栄子・堀尚人
6. 遺物の写真撮影、現像、引伸しは藤田が行った。
7. 本書の執筆は次の通りで、編集は藤田が行った。

第1章第1節、第2章、第3章、第4章第1節、第5章、
第6章、第7章第1節、第8章……………藤田通弘
第4章第2節、第7章第2節……………千藤克彦
第4章第3節、第7章第3節……………鈴木昇
第1章第2節……………小坂宗和

なお、第9章は指導調査員大參義一氏より玉稿を賜った。

8. 水準測量、地形測量、空中写真撮影は、(株)イビソクに委託して行った。
9. 発掘調査および報告書作成にあたっては次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力をいたいた。記して感謝の意を表す次第である(敬称略)。
伊藤樹・稻村繁・大橋保夫・大牧富士夫・加藤賢二・重松和男・根尾弥七・増山たづ子・松田順一郎・横幕大祐・揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会)・徳山村の歴史を語る会
水資源開発公団・藤橋村・久瀬村・揖斐川町・揖斐県事務所・西濃教育事務所
10. 発掘調査作業、ならびに調査記録および出土品の整理等には次の方々の参加・協力を得た(50音順)。
発掘調査 泉武光・市田岱子・白井郷弘・小倉富恵・川口ふじゑ・小玉春子・清水おぎの・清水義太・高橋しも・高橋と志ゑ・高橋利美・高橋花子・高橋みつゑ・竹中としえ・竹中直太・丘木勝・土屋重義・中石だけ・長瀬重一・福田基二・本多博道・増元なつゑ・松原保一・山岸孝枝・山田定一
整理作業 伊藤節子・江間香代子・河本節子・駒田香絵・酒向邦子・高島桂子・竹中卓也・棚橋つや子・中村とよみ・松岡美代子・水谷八重子・山本真理・米津光枝・脇野伸子・和田恵利子
11. 本報告書で使用した土層・土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄『標準土色帖』(9版、1989)を目測にて表記した。
12. 調査記録および出土品は、財團法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

第1章 遺跡をとりまく環境

　　第1節 嵐山地区の自然環境と遺跡（東谷を中心として） 3

　　第2節 指斐郡の縄文遺跡の概要 7

第2章 調査の目的と方法

　　第1節 調査に至るまでの経過 23

　　第2節 長吉遺跡の発掘調査 23

　　第3節 普賢寺跡の発掘調査 29

第3章 長吉遺跡の遺構

　　第1節 基本層序 31

　　第2節 遺構と遺構出土の遺物 33

第4章 長吉遺跡の包含層出土の遺物

　　第1節 土器 35

　　第2節 石器 87

　　第3節 陶器 97

第5章 長吉遺跡のまとめ

　　第1節 早期後半の土器群について 98

　　第2節 晩期後半の長吉遺跡 103

　　第3節 中世の長吉遺跡 104

第6章 普賢寺跡の遺構

　　第1節 基本層序 105

　　第2節 遺構と遺構出土の遺物 107

第7章 普賢寺跡の包含層出土の遺物

　　第1節 土器 108

　　第2節 石器 111

　　第3節 陶器等 113

第8章 菩賢寺跡と中近世の漆原村	
第1節 近世の漆原村	116
第2節 15世紀の徳山地区の様相	118
第9章 結語	120
引用・参考文献	122
図版	125

挿図目次

第1図 徳山地区的道路分布図	1
第2図 徳山地区（旧徳山村）の位置と略図	3
第3図 日本海指數（左）と徳山地区の植生図（右）	4
第4図 徳山地区周辺の地質図	5
第5図 徳山地区揖斐川木流（東谷）の投影横断面図	6
第6図 指斐郡の縄文遺跡分布図	8
第7図 指斐郡の主な縄文遺跡出土遺物	14
第8図 時期別にみた指斐郡の縄文遺跡	21
第9図 長吉遺跡発掘調査区と周辺の地形	24
第10図 長吉遺跡グリッド設定図（上）、長吉遺跡完掘状況（下）	25
第11図 菩賢寺跡発掘調査区と周辺の地形	28
第12図 菩賢寺跡グリッド設定図	29
第13図 長吉遺跡土層図	32
第14図 長吉遺跡の土器埋設構造	33
第15図 18Dグリッド出土埋設土器	33
第16図 包含層出土土器の分布状況	36
第17図 包含層出土土器の接合状況	37
第18図 第I群土器の器形・文様帶の模式図	38
第19図 包含層出土の土器(1) 第I群	40
第20図 包含層出土の土器(2) 第I群	43
第21図 包含層出土の土器(3) 第I群	47
第22図 包含層出土の土器(4) 第I群	50
第23図 包含層出土の土器(5) 第I群	53
第24図 包含層出土の土器(6) 第II、III群	57

第25図	包含層出土の土器(7) 第IV群	62
第26図	包含層出土の土器(8) 第IV群	69
第27図	包含層出土の土器(9) 第IV群	74
第28図	包含層出土の土器(10) 第IV群	78
第29図	包含層出土の土器(11) 第IV、V群	81
第30図	打製石斧の折損の部位による分類	87
第31図	包含層出土の石器(1)	88
第32図	包含層出土の石器(2)	90
第33図	包含層出土の石器(3)	92
第34図	包含層出土の石器(4)	93
第35図	包含層出土石器の分布状況	94
第36図	第I群土器の類例(1)	100
第37図	第I群土器の類例(2)	101
第38図	普賢寺跡土層図	106
第39図	普賢寺跡完掘状況	107
第40図	表採、包含層出土の土器	109
第41図	包含層出土の石器	112
第42図	表採、包含層出土の陶器等	114
第43図	普賢寺跡周辺の地縦図	117

付表目次

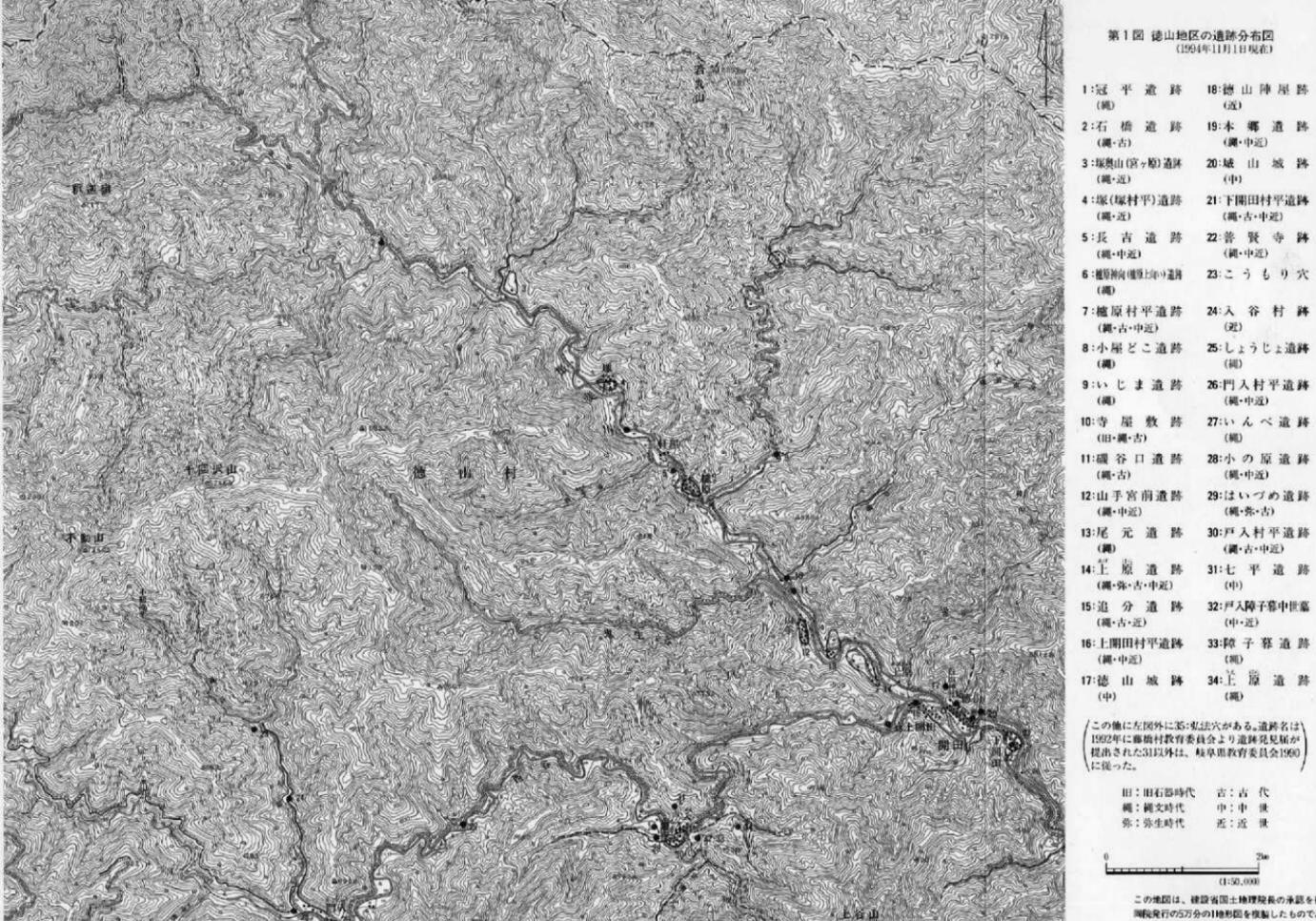
第1表	19列グリッドの層位別土器片一覧表	37
第2表	包含層出土石器計測表(1)	96
第3表	包含層出土石器計測表(2)	97
第4表	包含層出土石器計測表	111

図版目次

図版1	長吉遺跡 発掘調査前の近景 (1982年当時)
図版2	長吉遺跡 発掘調査時の近景
図版3	長吉遺跡 調査状況
図版4	長吉遺跡 18Dグリッド土器埋設遺構検出状況

- 図版 5-1 長吉遺跡 18Dグリッド埋設土器出土状況
- 2 長吉遺跡 磨製石斧出土状況
- 図版 6 長吉遺跡 完掘状況
- 図版 7 長吉遺跡 包含層出土の土器(1) 第Ⅰ群
- 図版 8 長吉遺跡 包含層出土の土器(2) 第Ⅰ群
- 図版 9 長吉遺跡 包含層出土の土器(3) 第Ⅰ群
- 図版10 長吉遺跡 包含層出土の土器(4) 第Ⅰ群
- 図版11 長吉遺跡 包含層出土の土器(5) 第Ⅰ群
- 図版12 長吉遺跡 包含層出土の土器(6) 第Ⅰ群
- 図版13 長吉遺跡 包含層出土の土器(7) 第Ⅰ群
- 図版14 長吉遺跡 包含層出土の土器(8) 第Ⅰ群
- 図版15 長吉遺跡 包含層出土の土器(9) 第Ⅰ群
- 図版16 長吉遺跡 包含層出土の土器(10) 第Ⅰ、Ⅱ群
- 図版17 長吉遺跡 包含層出土の土器(11) 第Ⅲ、Ⅳ群
- 図版18 長吉遺跡 包含層出土の土器(12) 第Ⅳ群
- 図版19 長吉遺跡 18Dグリッド埋設土器(上)と包含層出土の土器(13) 第Ⅳ群
- 図版20 長吉遺跡 包含層出土の土器(14) 第Ⅳ群
- 図版21 長吉遺跡 包含層出土の土器(15) 第Ⅳ群
- 図版22 長吉遺跡 包含層出土の土器(16) 第Ⅳ群
- 図版23-1 長吉遺跡 包含層出土の土器(17) 第Ⅳ、Ⅴ群と陶器
- 2 長吉遺跡 18Dグリッド埋設土器 細部写真
- 図版24 長吉遺跡 土器細部写真 第Ⅰ群
- 図版25 長吉遺跡 土器細部写真 第Ⅰ、Ⅱ群
- 図版26 長吉遺跡 包含層出土の石器(1)
- 図版27 長吉遺跡 包含層出土の石器(2)
- 図版28 普賢寺跡 発掘調査前の近景
- 図版29 普賢寺跡 調査状況
- 図版30 普賢寺跡 掘削状況
- 図版31 普賢寺跡 完掘状況
- 図版32 普賢寺跡 表採、包含層出土の土器(1)
- 図版33 普賢寺跡 包含層出土の土器(2)
- 図版34 普賢寺跡 包含層出土の石器
- 図版35 普賢寺跡 表採、包含層出土の陶器等(1)
- 図版36 普賢寺跡 表採、包含層出土の陶器等(2)

第1図 徳山地区の遺跡分布図
(1994年11月1日現在)



第1章 遺跡をとりまく環境

第1節 徳山地区の自然環境と遺跡（東谷を中心として）

1. 自然環境

徳山地区は旧徳山村を総称する地名で、藤橋村大字塚、櫛原、山手、門入、戸入、徳山、開田の各大字を指す。ここにはかつて揖斐川本流（東谷）に沿って塚、櫛原、山手の3集落が、揖斐川支流の西谷川（西谷）沿いには門入、戸入の2集落があり、合流地点付近には、徳山（通称本郷）、上開田（旧池田村）、下開田（旧漆原村）の3集落があった。これらの集落を有する徳山村は徳山ダム建設事業に伴って、1987年3月をもって行政的には藤橋村に吸収合併された（第2図）。



徳山地区は揖斐川の最上流部にあり、美濃の北西端に位置する。北は冠山(1257m)、若丸山(1286m)、金草岳(1227m)を隔てて福井県と接し、東は馬坂峠によって本巣郡根尾村に通じている。標高は、長吉遺跡付近で約350m、普賢寺跡付近で約295mである。

徳山地区は太平洋岸に注ぐ揖斐川流域に位置するが、日本海側と太平洋側の接点として中央日本多雪気候区の特徴を持つ。夏の日較差は大



第2図 徳山地区(旧徳山村)の位置と略図

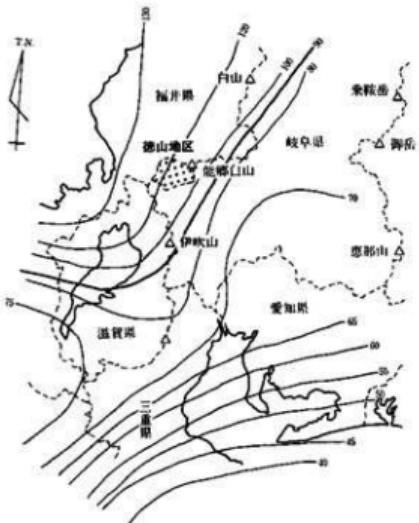
きく、冬は曇天・降雪により美濃平野部よりもその差は小さい。年間降水量は2800~3000mmに達し、岐阜県下有数の降水量となっている。

鈴木時夫・鈴木和子1971は雨温図の1月と8月を結ぶ線とX軸との角度を右回りに計り、この角度を日本海指数と呼んだ。典型的な太平洋岸式気候ではこの角度は鋭角となり、日本海岸式気候では鈍角となる。その境界は90°であり、これを結んだ線が、日本海側のブナ＝チシマザサ群集と太平洋側のブナ＝スズタケ群集との領域を分割していることを明らかにした(第3図)。この境界線が徳山地区の南を通ることから、太平洋側にありながらも日本海型好雪植物群の大多数が分布するという、特色ある自然条件を有する地域でもある(井波1984)。徳山地区の基本的な植生はブナ・ミズナラ林であり、チシマザサの群集が見られ、これは日本海指数から見た徳山村の特色に一致する⁽¹⁾(第3図)。動物相はブナ原生林にコルリ、コノハズク、ミズナラ林にはアカショウビン、コノハズク等が見られるが、近年の伐採に伴ってその様相は変わってきている(沢島1984)。その他、ウサギ、タヌキ、クマ、カモシカ、イノシシ等が生息するが、現在ではその様相も変わってきている。

なお揖斐川上流域の地質図を第4図に掲載した。

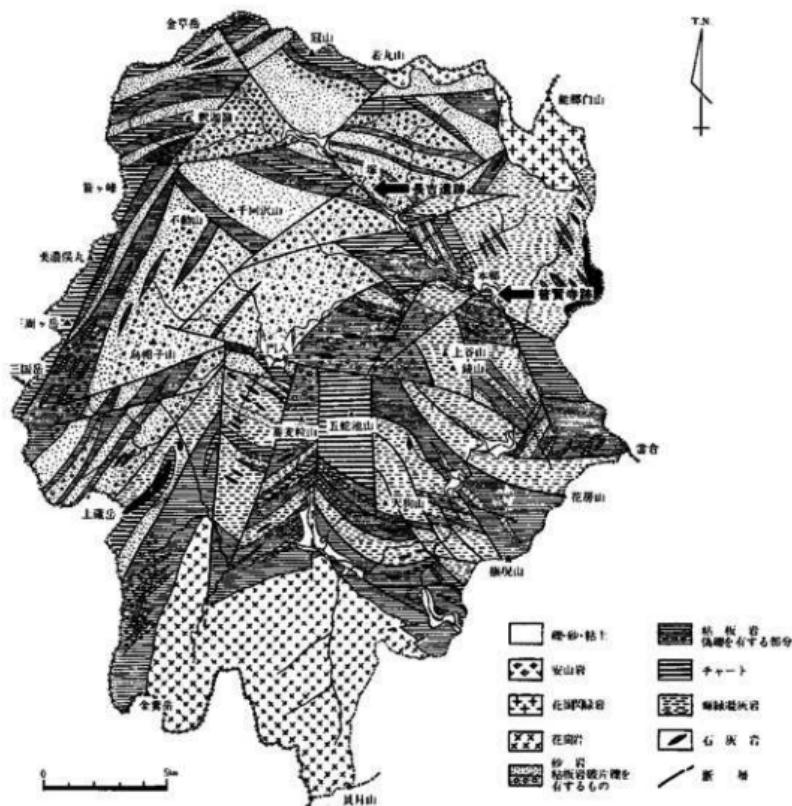
2. 遺跡の立地

第5図は揖斐川本流（東谷）の投影横断面図に、主として東谷沿いに分布する遺跡の位置を落としたものである。揖斐川は恵那嶺に源を発して、道谷と



第3図 日本海指数(左)と徳山地区の植生図(右)
(左図は鈴木1971をもとに作成。右図は徳山村史編纂委員会1973を一部改変。)

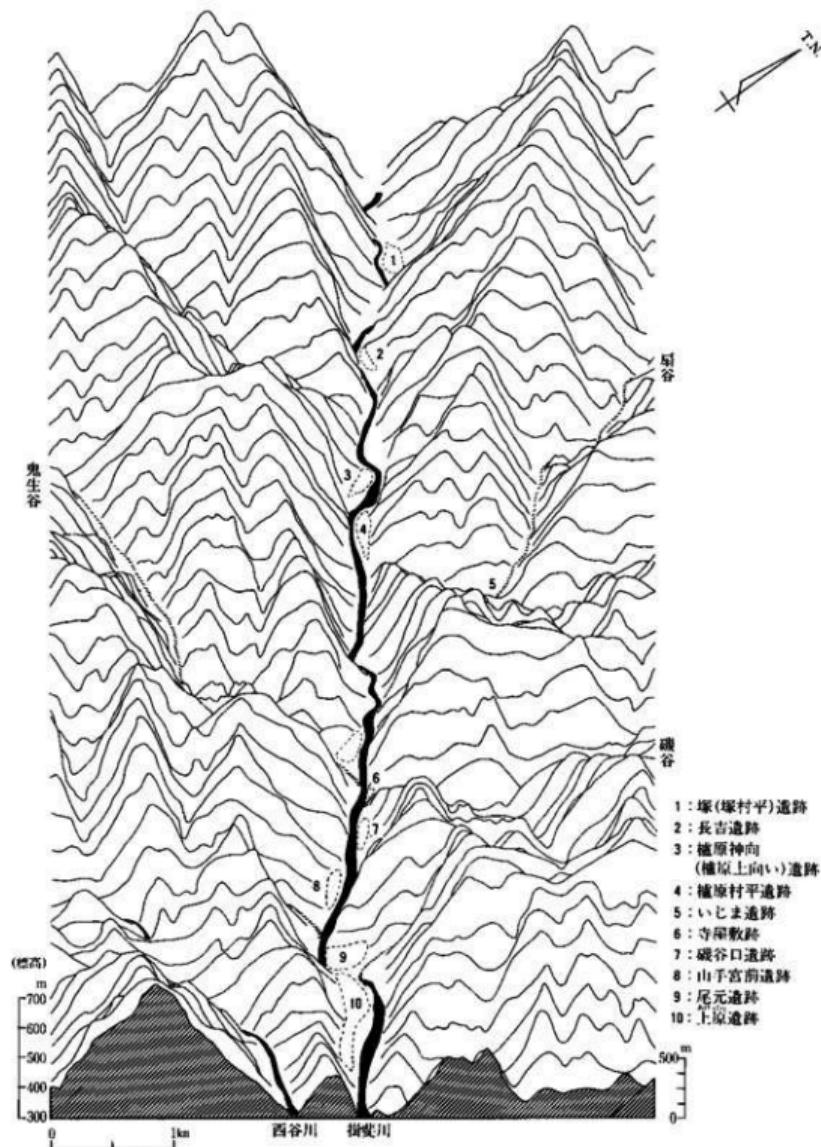




第4図 徳山地区周辺の地質図(牛丸・梶田1963を一部改変。)

赤谷の合流地点より南東方向に向って、揖斐川断層に沿ってほぼ一直線に流下する。この揖斐川の両岸にある河岸段丘上に、東谷のはとんどの遺跡は立地する。1993年から1994年にかけての寺屋敷跡の調査では、徳山地区で初めてナイフ形石器が検出され、旧石器時代から徳山地区の歴史が始まることが明らかとなった。また、旧石器の包含層が尾根に埋没していた河岸段丘上の段丘堆積層より確認されたことより、徳山地区で始良Tn火山灰(AT)降灰前後の地形は現状と大きく異なることが明らかとなり、この時期の地形を復元する作業が必要となっている。

さて縄文時代に下ると、東谷沿いの河岸段丘には多数の遺跡が形成される。いずれの段丘も



第5図 徳山地区掛斐川本流(東谷)の投影横断面図
(破線は主な河岸段丘をあらわす。)

小規模で、両岸に山が陥しく迫る谷底の段丘面に立地することが多い。また、扇谷と揖斐川との合流地点など、河川の合流地点に形成された河岸段丘に多くの遺跡が確認されている。これらの遺跡は山の尾根の先端部に位置する遺跡でもある。また、曲流部に突き出した段丘にも遺跡が知られている。古代以降の遺跡についても、これらの段丘面を中心として知られているが、その概観については本報告と同時刊行となる『戸入村平遺跡』に譲りたい。

第5図に掲げた遺跡の中でも大規模な縄文遺跡が形成され、比較的継続して営まれるのが、上原遺跡、権原村平遺跡である。これに対して山手宮前遺跡（1992～1993年調査）や塚（塚村平）遺跡（1990～1991年調査）では、前者が縄文時代早期・中期・晚期、後者が縄文時代中期・後期という、限られた時期に形成されていることは、どのような条件の下で選地しているかを考える上で重要であろう。

第2節 揖斐郡の縄文遺跡の概要

1. 遺跡のあらまし

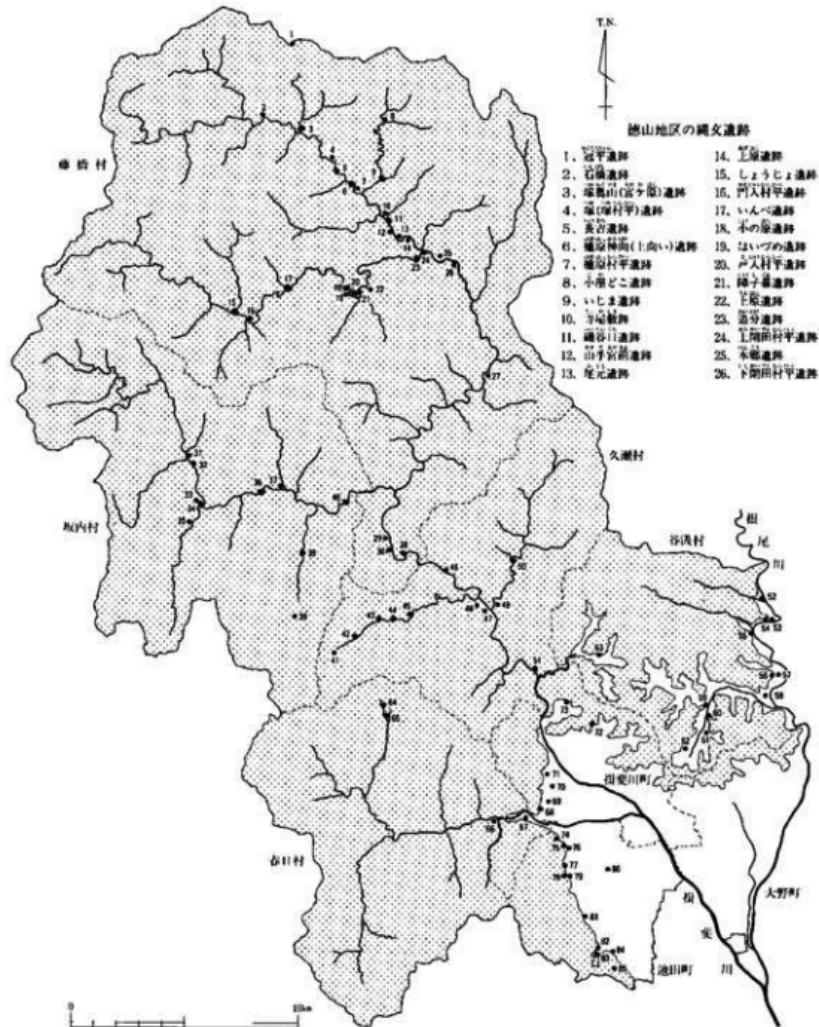
揖斐郡のはば中央部を揖斐川が南に貫流する。おおよそ藤橋村（徳山地区を含む）、坂内村、久瀬村、谷汲村、春日村までを上流域、それを除いた揖斐川町、池田町、大野町を中流域と、大きく2つに分けることができる。前者は揖斐谷とも呼ばれ、越美山系に属する標高1000mを越える山々に囲まれ、集落は小規模な河岸段丘や扇状地などに立地し、冬期は県下有数の豪雪地帯となる。一方、中流域に属する地域は濃尾平野の北西端にあたり、肥沃な沖積平野が広がる。池田山山麓などには大規模な扇状地が見られる。

揖斐郡の歴史は現在のところ旧石器時代にまで遡る。谷汲村の数か所より表探でナイフ形石器が、また、1993年には徳山地区の寺原敷跡の発掘調査において、層位的にナイフ形石器などが検出されている。⁽²⁾その後、谷汲村瓦屋遺跡において細石核なども見られるが、全部に遺跡が広がるのは、やはり縄文時代となってからである。

揖斐郡の考古学研究は1910年代より続けられた小川栄一氏の活動に始まるが、縄文時代に関しては他の地域と比較して発見された遺跡数も少なく、研究も低調であった。しかし、近年「徳山村の歴史を語る会」、「揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い」（揖斐谷ミニ学会）による踏査回数の増加や開発工事などに伴い、新たに確認される遺跡が急激に増加しつつある。

2. 各町村別縄文遺跡の概要

今回は1994年11月1日までに主に揖斐谷ミニ学会などの踏査によって確認された、揖斐郡の



第6図 捩斐郡の縄文遺跡分布図

縄文遺跡の概要を述べる。特に断りがない限り遺物などはすべて表面採集による。また、岐阜県教育委員会1990に記載のない遺跡は仮称とし、遺跡名の後に（仮）と表示する。また、遺跡番号は第6図と対応する。なお、1~26の藤橋村徳山地区の縄文遺跡については、「戸入村平遺跡」の報告書に各遺跡の概要の報告がなされるため、本報告では省略する。

藤橋村

27 小曾根遺跡 (大字東杉原字小曾根)

東杉原の集落跡から1.5kmほど上流の、揖斐川左岸の河岸段丘上に立地する。標高190~240m前後で、ほぼ段丘全面に遺物の散布が認められる。1978年に遺跡が確認され、1985年にはこの地の一部が地山まで掘削され、多くの遺物が出土した。中期後半と思われる土器が見られ、石鏃、磨製石斧、打製石斧、石錐、切目石錐、打欠石錐、凹石、サヌカイト製の異形石器などが採集されている。この遺跡一帯は杉原ダム建設により水没することとなる。

文献 篠田1987、1988a、藤橋村史編集委員会1982。

28 下平遺跡 (大字東横山字下平)

東横山の集落から揖斐川の下流、約1.5kmの左岸段丘上が遺跡となる。1919年に東横山第二発電所工事で磨製石斧が出土した。磨製石斧は長さ30cm以上もある大型のもので、大参・安達1972に誤って徳山村塚出土として写真が掲載されている。その他の遺物は知られていない。

文献 大参・安達1972、篠田1987、藤橋村史編集委員会1982。

29 北中遺跡 (大字西横山字北中)

西横山集落のある揖斐川右岸の河岸段丘上に遺跡はある。1989年に遺跡と確認された。遺物は段丘の北端部の比較的傾斜の緩い狭い範囲で見られる。出土している遺物は土器、フレイクで、土器は小片で時期などを明確にすることはできない。

文献 篠田1989。

30 坂尻遺跡 (大字西横山字坂尻)

北中遺跡と同じ段丘の下位面が遺跡となり、同段丘の南端でもある。1989年に近世陶器に混じってフレイクなどが採集された。

文献 篠田1989。

坂内村

31 地蔵平遺跡 (大字川上字地蔵平)

1989年に発見された。坂内川と八草川の合流点に発達した段丘上に遺跡は立地する。現在、遺物は段丘の南側の狭い範囲でしか見ることができないが、遺跡の範囲は段丘上に更に広がる可能性が高い。採集された遺物は切目石錐、打製石斧で土器は確認されていない。

文献 なし。

32 川上村ノ内遺跡 (大字川上字村ノ内)

川上集落のある河岸段丘上に立地する。南西に向かう段丘末端付近を中心に遺物の散布が見られるが、家屋の密集などによるため詳細は不明。小片ながら中期後半の土器が見られる。石器は石鎌、切目石錐、磨製石斧、打製石斧などがある。

文献 篠田1987。

33 大草履遺跡第1地点 (大字広瀬字大草履)

大草履遺跡第2地点の北西約200mの、尾根の崩土と谷の侵食によって形成された尾根斜面に立地する。1983年の水田区画整理の際、斜面末端の狭い範囲にて少量の遺物が採集された。遺物は早期押型文土器、石鎌、スクレイバー、磨石などである。押型文土器は第2地点とは異なり、山形文となる。

文献 篠田1987。

34 大草履遺跡第2地点 (大字広瀬字南大草履、大草履下ノ平)

坂内川と浅又川の合流点に伸びる段丘の上位面全面が遺跡となると思われる。標高340~350m前後。1982年に区画整理によって遺物が出土した。早期、前期、中期、後期の土器があり、最も多いのは中期後半の西日本系の土器で、早期のネガティブな押型文土器の一群も比較的まとまって見られる。石器は切目石錐と打欠石錐が目立ち、石鎌、磨製石斧、打製石斧などがある。遺構などは確認されていないが、坂内川流域の中核的遺跡の一つであると思われる。

文献 徳山村の歴史を語る会1984、篠田1987。

35 バイオ遺跡 (仮) (大字広瀬字バイオ)

大草履遺跡第2地点より浅又川の約1km上流に位置する。バイオ谷沿いの尾根の緩斜面の末端付近において、1993年に土地の造成工事により遺物が出土した。中期と思われる土器が1点ある。石器は石鎌、磨製石斧、打製石斧、スクレイバーなどが見られる。

文献 なし。

36 中虎遺跡 (大字広瀬字中虎)

広瀬の集落から上流に約2km、坂内川左岸の河岸段丘上に位置する。打製石斧が数点採集されている。土器は晩期後半以降の突帯文系が1点見られる。採集された遺物の量は少ないが、段丘の広い範囲が遺跡となる可能性もある。

文献 篠田1987。

37 堂前遺跡 (大字広瀬字堂前)

坂内川と大谷川の合流点付近に発達する、浸食された河岸段丘の中位面に遺跡は立地する。1975年、道路の設置工事に際して石鎌、磨製石斧が出土した。1987年には土器片(磨消繩文)が採集されている。

文献 篠田1987。

38 土堂遺跡（大字坂本字土堂）

坂内川の支流、白川の右岸段丘上にあり、1989年に打製石斧が採集され、遺跡と確認された。遺物は打製石斧1点のみである。

文献 なし。

39 諸家遺跡（大字坂本字上諸家）

白川の支流ドン谷の形成した小扇状地の中央付近に立地する。1948年に遺跡であることが知られた(小川1952)。1985年に林道建設に伴い発掘調査が行われ、多くの資料が得られた。集石造構、土坑が検出され、それに伴い早期前葉～中期中葉までの土器、石鎌、石錐、石匙、磨石、敲石などが出土した。発掘地点は遺跡の西端付近で、遺跡は更に東に広がると思われる。集石造構から検出された炭化物の¹⁴C年代測定の結果は、9,180～9,560年B.P.。

文献 小川1952、篠田1987、中村・岩花1990。

40 長瀬遺跡（大字広瀬字川尻）

坂本集落より1.5kmほど下流の、坂内川左岸の比較的小規模な河岸段丘上に立地する。1987年、この地の掘削された壁面より少量の遺物が発見された。土器はすべて早期の精円押型文土器であり、他に磨石、スクレイバーが見られる。

文献 篠田1987。

久瀬村

41 ぶくりや遺跡（大字日坂字南平、平岩）

現在、揖斐高原スキー場となる崩積性の緩斜面上に位置し、貝月谷を挟んで両岸より遺物が出土している。1950年頃に烟を水出化した際に中期末と思われる土器、磨製石斧、切目石錐などが採集されている。1965年にスキー場整地により、土器が多数出土したといわれている。

文献 揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い1993、久瀬村1973、篠田1987。

42 柄江遺跡（大字日坂字下柄江）

日坂集落から日坂川の上流2kmほどの左岸段丘上が遺跡である。1919、1975年にそれぞれ磨製石斧が採集されている。

文献 揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い1993、小川1952、篠田1987。

43 中村遺跡（大字日坂字中村、南尾佐）

日坂川左岸の段丘が遺跡で、現在の上村集落と重複する。現在は家屋が密集し、少量の遺物が段丘東端部分の狭い範囲でのみ見られる。土器も採集されているが、細片で時期などを明確にすることはできない。

文献 揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い1993、篠田1987。

44 日坂遺跡 (大字日坂字下村)

日坂川左岸の段丘上に立地し、現在の下村集落と重複する。1910年、道路改修工事中に石錐、磨製石斧、石棒が発見された。現在では家屋の密集などにより、遺物の散布などを確認することは困難となっている。

文献 指斐谷の自然と歴史と文化を語る集い1993、小川1952、久瀬村1973、篠田1987。

45 小坂遺跡 (大字日坂字小坂)

日坂川左岸の小坂の集落がある段丘が遺跡となる。1989年に段丘のやや西側の地点より石錐、打製石斧、フレイクが採集された。土器など時期を示す遺物は現在知られていない。遺跡の範囲なども不明。

文献 指斐谷の自然と歴史と文化を語る集い1993。

46 中洞遺跡 (大字樺原字中洞、西ノ郷)

樺原集落のある小扇状地状の段丘が遺跡である。家屋の密集、土砂の堆積によるためか、採集された遺物は土器細片、フレイクのみである。

文献 指斐谷の自然と歴史と文化を語る集い1993。

47 西津汲遺跡 (大字西津汲字東武良)

指斐川右岸の西津汲の下位段丘面に遺跡は立地する。広い段丘のやや南よりの広い範囲が遺跡となる。1969年、工事中に土器、磨製石斧が出土したのを始め、幾つかの地点より遺物が採集されている。中期、晩期の土器が見られ、他にも打製石斧、楔形石器などがある。

文献 指斐谷の自然と歴史と文化を語る集い1993、久瀬村1973、篠田1987。

48 上武良遺跡 (大字西津汲字上武良)

西津汲集落のある河岸段丘は上位、中位、下位の各段丘が発達し、下位面には西津汲遺跡が、上位面にはこの上武良遺跡がある。かなり高所にあるにもかかわらず、比較的広い平坦面となる。その標高は140~150mほどである。1989年に段丘中央付近で遺物が採集され、遺跡と確認された。中期後半の土器、石錐、磨製石斧などが見られ、ややまとった資料である。小川1952に「磨製石斧、土錐 飯盛山山麓」とあるのは本遺跡のことかと思われる。

文献 指斐谷の自然と歴史と文化を語る集い1993、小川1952。

49 大河原遺跡 (飯) (大字東津汲字大河原)

指斐川左岸の標高200m前後の尾根の緩斜面上に位置する。1993年、大河原経塚の範囲確認調査中に縄文期の遺物が出土している。無文土器の小片、フレイクがあり、経塚造営に伴って包含層から混入したものと思われる。

文献 久瀬村教育委員会1993。

50 上ヶ野遺跡 (大字小津字上ヶ野)

指斐川の支流、小津川左岸の小規模な河岸段丘上に立地する。標高180~190m前後で、段丘

全面が遺跡となる可能性がある。石錐が数点採集されているが、土器などは不明。

文献 指斐谷の自然と歴史と文化を語る集い1993。

51 乙原遺跡 (大字乙原字河坂、北坂)

揖斐川左岸の河岸段丘上に立地する。標高100~110m前後で、主に段丘中央付近に遺物の散布が見られる。縄文~中世の遺物が採集されており、縄文期のものとしてはスクレイバーがある。土器などは確認されておらず、遺跡の詳細は今後の調査に委ねられる。

文献 指斐谷の自然と歴史と文化を語る集い1993。

谷汲村

56 竹巣山遺跡 (大字長瀬字竹巣山)

根尾川右岸の河岸段丘上、現在の長瀬集落のある上位面に遺跡は立地する。遺跡は古くより知られ、小川1952などにも報告がある。従来は弥生時代の遺跡とされてきたが、近年、縄文期の遺物が採集されつつある。遺物は石器を中心とし有舌尖頭器も見られ、他には石錐、石錐、打製石斧、スクレイバーなどがある。土器は無文の小片が少量見られる。広い範囲に遺物の散布が見られ、遺跡は宇竹巣山一帯に広がると思われる。

文献 小川1952、谷汲村1977。

59 末福遺跡 (大字深坂字末福)

谷汲村深坂~大洞付近は低い丘陵状の山に囲まれ、小盆地状地形を成す。一帯の低湿地帯には厚い泥炭層の堆積が見られ、湖沼もしくは湿原化した時期があったと考えられている。1955年から翌年にかけて、河川の改修工事中に数か所の地点で地表下1.7mほどの泥炭層中より遺物が出土した。遺物は土器と木製品があり、土器は中期中葉、後期中葉~後葉、晚期後半以降と豊富な内容を持つ。一方、木製品は丸木舟2隻と棒2本とカイが出土した。丸木舟は土器に伴って発見されたといわれており、縄文期のものと考えられている。

文献 大参・安達1972、紅村1957、谷汲村1977。

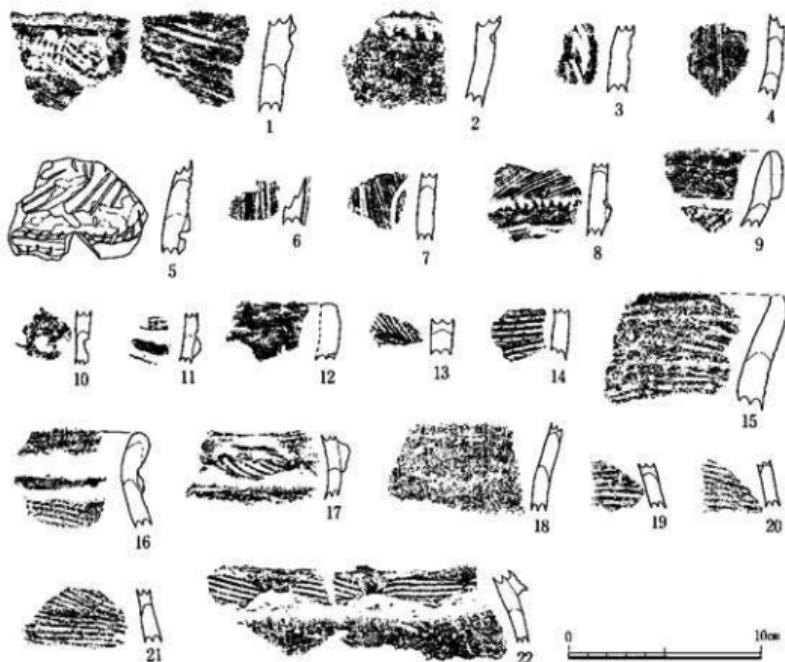
53 伊野遺跡第1地点(仮) (大字岐礼字川ノ上、尾坂、東沖)

揖斐川の支流、根尾川右岸に舌状に発達した河岸段丘の上位面の広い範囲が遺跡となる。遺物の多くは石器で石錐、石匙、切目石錐、石錐、スクレイバーなどがある。土器は少量ながら早期後半、中期後半、晚期後半以降のものが見られる(第7図1~15)。遺跡の遺存状態も良好と思われ、両流域を考える上で重要な遺跡になると思われる。

文献 なし。

54 伊野遺跡第2地点(仮) (大字岐礼字新宮)

伊野遺跡第1地点より100mほど南に位置する。第1地点と同一の根尾川の河岸段丘中央付近に立地する。1989年、少量の土器が採集された。土器は無文で時期などを明確にすることはで



第7図 指斐郡の主な縄文遺跡出土遺物
(1~15谷汲村伊野遺跡第1地点(板)、16~21指斐川町瑞岩寺遺跡、22池田町塙之越遺跡)

きない。第1地点の範囲に含まれる可能性もあるが、ここでは第2地点として区別する。

文献 なし。

57 畿屋敷遺跡(仮) (大字長瀬字畿屋敷)

根尾川右岸の河岸段丘の上位面に位置し、府内川を挟んで竹森山遺跡の対岸となる。現在のところ段丘南端付近の狭い範囲でのみ、遺物の散布が見られる。採集された遺物は石錐、フレイクのみで時期などを比定しうるものはない。

文献 なし。

58 村東遺跡(仮) (大字長瀬字村東)

根尾川と管瀬川の合流点に突き出す河岸段丘の上位面の末端付近に立地する。50×30mほどの狭い範囲で少量の遺物が採集された。土器は中期後半のもので、石器は打製石斧、切目石錐、磨石などが見られる。

文献 なし。

60 瓦屋遺跡（仮）（大字大洞字瓦屋）

木橋遺跡に隣接し、低湿地帯に伸びる崩積性斜面末端付近に位置する。1989年、この地に掘削された貯水池の堆土中に多数の遺物が含まれているのが確認された。旧石器時代のナイフ形石器、細石核なども見られるが、縄文期の遺物はほぼ単純に草創期のみと思われ、尖頭器、有舌尖頭器、スクレイバー、多量のフレイク・チップ類などがある。土器は無文の小片が少量あるが、石錐はない。草創期の遺物は地表下2m以上の中炭層最下層付近より出土しており、¹⁴C年代測定の結果、11,910±180年B.P.の数字が与えられている。

文献 小坂1989、松田1991、1992。

61 大洞遺跡（仮）（大字大洞字出口、番場屋敷）

大洞集落付近の扇状地の扇端部付近に立地し、標高80m前後で現在の集落面でもある。縄文後期の土器が見られ、石錐、切目石錐、磨製石斧、凹石などが採集されている。

文献 松田1991、1992。

63 寺ヶ洞遺跡（仮）（大字木曾屋字寺ヶ洞）

木曾屋集落の500mほど西方の崩積性斜面に立地する。1988年、一帯の水田区画整理により少量の遺物が出土した。土器は無文の小片、石器はスクレイバー、フレイクなどがある。横蔵地区では現在、唯一の縄文遺跡である。

文献 なし。

その他

スクレイバーなどが採集された高科地区(52)、半円月形尖頭器が採集された名札地区、土器が出土した大字岐札字淀口(55)、遺物が出土したとされる大字名札字宮之大門、大字深坂字寺田にも遺跡の存在が予想される。また、小川1952に石器採集地として大字深坂字志麻毛、字矢内田、字輪之内、字東野田(62)の報告がある。

春日村**64 長者平遺跡（大字美東字長者平）**

表川沿いの崩積性の緩斜面に立地する。1933年の開墾の際に遺物が出土し、遺跡と確認された(小川1952)。1949~1950年頃には試掘が行われた。早期末も少量含まれるが、遺跡の中心は晩期後半以降の条痕文系の土器になる。それに伴う石器は確実なものは磨石のみであるが、旧美東小学校保管の磨製石斧、敲石、石刀は、本遺跡から出土した可能性が高い。

文献 春日村1983、森川1981a、1987。

65 長者（長国寺跡）遺跡（仮）（大字美東字長者平）

表川と大原谷の合流点に突き出す河岸段丘上に遺跡は立地する。1979年に石器が少量採集されている。石器は打製石斧、フレイクである。土器などは知られていない。

文献 春日村1983、森田1981a、1987。

66 池戸遺跡（仮）（大字六合字池戸平）

柏川右岸の河岸段丘の上位面に立地し、現在の河床からはかなり高い。長者遺跡と同じく、1979年に石斧が採集され遺跡と確認される。下位段丘面にも遺跡が存在する可能性がある。

文献 春日村1983、森田1981a、1987。

その他

大字六合字下平より打製石斧が出土している。

揖斐川町

67 瑞岩寺遺跡（大字瑞岩寺字沼、藪後、上越ほか）

柏川右岸の河岸段丘上にあり、中位～上位面の広い範囲に遺物の散布が見られる。各文献に記述が見られるのは中位面の瑞岩寺付近の地点で、後期前葉～中葉、やや離れた地点で晚期後半以降の土器が出土している（第7図16～21）。近年、上位面においても遺物が採集されつつある。上位面では中期後半の資料を中心で、早期、後期、晚期の土器が見られる。両地点とも石器はやや少なく石鏃、石錐、磨製石斧、打製石斧などが採集されている。

文献 揖斐川町1971、大參・安達1972、小川1952、紅村1957。

68 上ノ山遺跡（仮）（大字市場字上ノ山）

柏川左岸の河岸段丘上にあり、瑞岩寺遺跡の対岸となる。小川1952に遺物採集地として石斧、鉈形石が出土と記載がある市場遺跡は、本遺跡であると思われる。遺物は土器細片、石鏃、磨製石斧、打製石斧などが採集されているが、時期を明確に比定しうるものはない。

文献 小川1952。

69 白樺遺跡（大字白樺字村前出口、林屋敷）

大谷右岸の扇状地末端～沖積平野にかけて立地する。1978年、水田の区画整理の際に内田茂雄氏により縄文～中世にかけての多数の遺物が採集された。縄文期に該当する土器は北陸系の後期後葉が若干、そして土器棺1個体分を含む晚期後半以降のものがまとまって見られる。石器は打製石斧が目立ち、他には磨製石斧、磨石、一部に赤色顔料が残る石刀などがある。

文献 馬場1980。

70 清水遺跡（仮）（大字上野字清水、宮前、瀬口ほか）

大谷の左岸に位置し、沖積平野を望む扇状地末端付近に遺物の散布が見られる。標高70～90m前後、遺跡の範囲は100×100mほどと推定される。後期に比定される土器があり、石鏃、切口石錐、磨製石斧、打製石斧などが出土している。

文献 なし。

71 中村遺跡（仮）（大字上野字中村）

浅鳥谷の形成した扇状地上にあり、標高80~90m前後の地点に位置する。1985年、一帯の山林整理の際に遺物が比較的狭い範囲で採集された。土器は無文の小片で、石器には石鏃、切目石鏃などがある。遺物から見て、中期、後期のいずれかの遺跡と思われる。

文献 なし。

72 科洞遺跡（仮）（大字若松字科洞）

若松の集落から100mほど西にある、南東向きの崖錐緩斜面の中央から末端付近にかけて立地する。標高60~70m前後で遺跡の推定範囲は100×50mほど。採集された遺物は無文土器、石鏃、打欠石鏃などがある。有茎石鏃が見られ、晩期の遺跡となる可能性が高い。

文献 なし。

73 若宮遺跡（仮）（大字北方字新畑）

若宮谷沿いの南向きの山麓～段丘の緩斜面上に立地する。標高180~190m前後、遺跡の推定範囲は100×100mほど。小片ながら早期、前期、中期の土器が見られる。石器は石鏃がやや多く、石匙、切目石鏃、スクレイバーなどが見られる。また産出地が近いためか、水晶が石器に使用されている。なお、様之実谷を挟んだ対岸の段丘にもフレイクの散布が見られる。

文献 なし。

その他

大字房島字小曲より石鏃、磨製石斧、打製石斧が採集されている。小川1952にもその記述がある。

池田町

74 舟子遺跡（大字舟子字村之内）

小豆谷の形成した小扇状地上に立地する。遺跡は谷を挟んで両岸に広がり、その推定範囲は100×50mほど。1971年、池田山山麓を南北に縦断する道路の取付工事により発見、発掘され、隅丸方形の住居跡半軒分が検出された。中期後葉～末、後期前葉の土器が多量に出土しており、この時期の揖斐川中流域の良好な資料。石器は磨製石斧、石鏃などが少量見られる。

文献 池田町1976、池田町教育委員会1991、篠田1988b。

75 段遺跡（大字段字北山川、村之上）

深歩谷の左岸、扇状地の中央付近に位置し、標高97~100m前後。1971年、山麓道路取付工事に際し発掘され、西江石墓が検出された。遺物は中期後葉～末、後期前葉のもので舟子遺跡と共に通する。また、200mほど北の段1号墳の封土より木葉形尖頭器が単独で出土している。

文献 池田町1976、池田町教育委員会1991、真田1985c。

76 野林遺跡（大字般若畠字野林）

深歩谷の右岸、扇状地上にあり、晩期の土器片が採集されている。遺物は現在の県営茶試験

場付近より出土したとされており、遺跡は更に西の山麓にかけて広がる可能性がある。

文献 池田町1976、池田町教育委員会1991。

77 段原遺跡（谷際J地点）（大字宮地字段原）

大津谷の形成した扇状地の扇頂部付近に立地し、標高110～125m前後、遺跡の範囲は100×80mほどと推定される。1967年8月山砂利採取中に遺物が出土し、古墳と合わせて一部が調査された。土器は後期、晚期前葉、後半以降のもので、合わせて土器棺3個体分を含む。石器は石鎌、磨製石斧、磨石、石劍などがある。なお、大参・安達1972などに見られる「谷際J地点」は本遺跡の別称である。

文献 池川町1976、池田町教育委員会1991、大参・安達1972。

78 西塙之越遺跡（大字願成寺字西塙之越）

大津谷の右岸、扇状地上の字西塙之越一帯が遺跡となる。県史跡願成寺古墳群とも一部重なり、古墳の発掘に際しても縄文期の遺物が出土している。早期の押型文土器、後期の磨消繩文、四線文系の土器がある。石器は石鎌、石匙、石錐、打斧石錘、石皿などがある。

文献 池田町1976、池田町教育委員会1991、真田1985a。

79 墳之越遺跡（大字願成寺字塙之越）

大津谷扇状地の、標高90～100m前後の扇央部付近に立地する。西塙之越遺跡と隣接する。1969年に塙之越2号墳調査中にその封土などから遺物が出土し、遺跡と確認された。遺物は繩文～中世と広範にわたり、縄文期のものとしては、早期、中期、後期、晚期（第7図22）の土器、有舌尖頭器、石鎌、石錐、磨製石斧、磨石、石棒などが見られる。

文献 池田町1976、池田町教育委員会1991、真田1985b。

80 市頭遺跡（大字本郷字北瀬古、大字小牛字東頭）

1972年、西瀬用水工事中に地下2m付近より、縄文～中世の遺物が出土した。縄文期のものとして少量ではあるが、後期の縁帶文系土器が見られる。出土状況は不明ながら、現在池田町で唯一の沖積平野における縄文遺跡である。

文献 池田町1976、池田町教育委員会1991。

81 霞間ヶ溪遺跡（大字藤代）

小川1952に1934年、磨製石斧、石棒採集地として記載があるが、現在ではその正確な採集地点は不明となっている。霞間ヶ溪の扇状地上のいずれかと思われる。

文献 池田町1976、池田町教育委員会1991、小川1952。

82 大畑遺跡（大字片山字大畑）

1951年に石鎌、1970年には涼雲寺墓地付近で石匙が採集されている。尾根先端の緩斜面付近である。

文献 池田町1976、池田町教育委員会1991、小川1952。

83 市場遺跡（仮）（大字片山字市場）

金地谷の刷状地の扇頂部付近に立地し、大畠遺跡と隣接する。1990年、水田区画整理工事により遺物が出土した。後期と思われる土器片、石錐、打製石斧などが採集されている。

文献 なし。

84 堀西遺跡（大字片山字堀西）

1970年、養魚用貯水池掘削時の排水中より弥生土器、山茶碗などに混じり有舌尖頭器が1点出土した。チャート製ではほぼ完形。長身、細身で器厚は薄く、側縁が鋸歯状となり逆刺が比較的顕著に認められる。その他の縄文期の遺物は知られていない。

文献 池田町1976、池田町教育委員会1991。

85 遠見塚遺跡（大字市橋字広場）

赤坂山～金生山の山頂の平坦部などに点在し、一部が大垣市に広がる遺跡群の一つで、その標高は150～200m前後となり、郡内でも特異な立地を見せる。木内石亭の『雲根志』には、この付近一帯で多量の石錐が採集されたとの記述がある。1990年の遠見塚1号墳の発掘においても石錐、円石、土器が出土している。土器は後期に比定されるものである。

文献 池田町1976、池田町教育委員会1991、横幕ほか1991。

その他

小川1952によれば、大字片山字二ノ井で磨製石斧が出土している。また大字般若字山畠で石錐が採集されている。

大野町

大野町1985によれば、大字野～寺内にかけての丘陵などで石錐、打製石斧などが採集されている。現在のところ縄文遺跡としての報告はないが、今後、山麓、丘陵、低位段丘、崩積性斜面などから遺跡が確認されていくことと思われる。

文献 大野町1985。

3. 指斐郡の縄文時代

指斐郡下の縄文遺跡の発掘調査例は少なく、まとまった遺物が出土している遺跡は徳山地区を除いては非常に少ない。そのために現段階では指斐郡の縄文時代像は想像の域を脱しない。また、指斐川上流域の縄文遺跡については、徳山村の歴史を語る会1984に徳山地区を中心として、総合的な考察が試みられており、本稿も大枠ではこれに従っている。しかし、その後の資料の増加と中流域の縄文遺跡との関連を踏まえて、ここで概観しておきたい。

草創期の遺跡は、郡内で6か所確認されている。⁽³⁾すべて有舌尖頭器が出土した遺跡であるが、

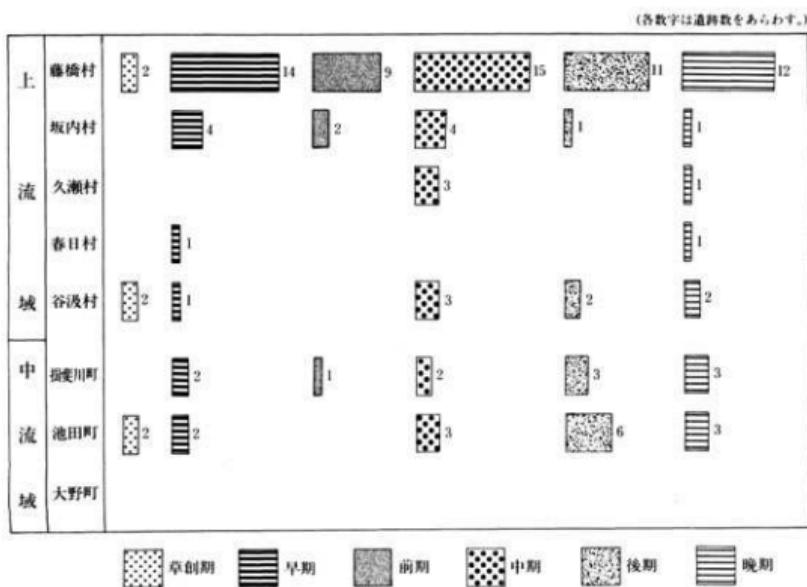
有舌尖頭器以外の遺物が確認された遺跡は2か所のみである。徳山地区小の原遺跡からは、草創期と思われる表裏繩文系土器などが出土しているが、それらの石器との共伴関係などは把握されていない。一方、谷汲村瓦屋遺跡はすべて表採資料であるが⁴⁾、草創期以降は遺跡一帯の湖沼、湿原化が進行する（松田1991、1992、1993、1994）ために、旧石器時代の資料を除いては、草創期のみの資料であると思われる。有舌尖頭器に伴う尖頭器（粗製尖頭器、未製品などを含む）、スクレイバーなどが出土している。

早期前葉では大川・神宮寺式系押型文土器に類似するネガティイブな押型文土器が知られ、徳山地区で下開田村平遺跡の他、坂内村で2か所の遺跡が確認されている。坂内村諸家遺跡からはややまとまった遺物が発掘されており、それに伴う集石遺構も確認されている。また、諸家遺跡、坂内村大草履遺跡第1地点などには細久保式系に類似する山形押型文土器などを見られ、押型文土器終末段階の高山寺式系に至るまでの間に上流域に12か所、中流域に4か所の遺跡から各種の押型文土器が確認されている。多くを占める高山寺式系土器の段階には上流域、中流域の各遺跡において、ややまとまった遺物が見られる。一方、上流域には早期後半には関東系、続いて早期末には、東海系の条痕文土器群の進出が活発となる。これらの土器が出土した遺跡は上流域で12か所を数えるが、中流域にはこれらの条痕文系の土器は知られていない。

前期には小の原遺跡などには比較的安定した集落が形成されるものの、早期のキャンプサイト的な性格の遺跡は淘汰され、上流域の遺跡は早期の20遺跡から11遺跡と、遺跡数は全般的に減少する傾向となる。中流域には前期の遺跡は、現在のところ指斐川町の若宮遺跡⁽⁴⁾を除いては確認されていない。基本的には関西系土器群が卓越するが、関東、東海系の土器も進出する。なお、小の原遺跡は中期まで継続することなく、前期末をもって廃絶される。

中期前葉は北陸系、西日本系の土器が出土した徳山地区小屋どこ遺跡の他、上流域には若干の遺跡があるものの、遺跡数は減少する。中葉になると、船元・里木式系の土器の東進・定着により急激に拡大・増加する。久瀬村上武良遺跡、指斐川町瑞岩寺遺跡など長く空白の続いた地域にも遺跡が営まれる。この船元・里木式系の遺跡は、少なくとも郡内に20か所が確認され、ほぼ全遺跡が河川沿いの河岸段丘上などに立地し、既存の打欠石錐に加え、切目石錐を多量に伴う。この小河川網漁撈を確立した集団は上流域を中心にかつてない安定した拡がりを見せた。船元・里木式系土器に並行、もしくはやや遅れ、吸煙式系土器の進出を契機として瀧尾平野を中心とした東海系土器群が流入し、上流域の各遺跡は前段階のピークを持続する。その後、中期末には郡内全域で葉脈状文を施した土器が広く流布する。その代表的な遺跡として徳山地区塚奥山（宮ヶ原）遺跡、池田町舟子遺跡などをあげることができる。

後期には遺跡数は上流域に14か所と、中期後半と比較してやや減少する傾向にあるのに対し、中流域では9か所と増加する。上流域は中期末から継続して営まれる遺跡が多いのに対し、中流域の遺跡はその連続性は認めにくく、新たに遺跡が成立する場合が多い。ただし、徳山地区



第8図 時期別にみた揖斐郡の縄文遺跡

櫛原村平遺跡のように後期全般を通して継続する遺跡は、上流域、中流域のいずれにも現在のところ確認されていない。中流域についてはやや不明ながら、概ね上流域と同様の変遷を辿ると思われる。前半は西日本系土器群を主体にしつつ、それに関東系などの土器が混在し、後半は更に西日本色を濃くしていく。また、後期後葉には北陸系の土器が南下する。櫛原村平遺跡では比較的まとまった資料が見られるものの、塚奥山（宮ヶ原）遺跡、揖斐川町白樺遺跡などのいずれの遺跡も量的には少量にとどまる。

晩期の前半については徳山地区はいづれ遺跡で大洞式並行、池田町段原遺跡（谷際J地点）では北陸系の土器が見られるが、遺跡数も少なく不明な点が多い。晩期後半以降の主に東海系の突帯文・条痕文系土器が出土する遺跡は郡下にも上流域に17か所、中流域に6か所と広範囲に遺跡が見られ、中期後半に匹敵する影響を見せる。いづれ遺跡、段原遺跡など從来さほど選択されることのなかった地点に突如として遺跡が成立することは、注意すべきであろう。

揖斐郡の縄文時代を揖斐川の上流域、中流域という区分により大きな変化を中心に概観した。揖斐郡には現在、85か所の縄文遺跡が確認されており、更に増加するものと思われる。

揖斐川上流域の徳山地区を含む藤橋村、坂内村、久瀬村、谷汲村、春日村には66か所と、郡

下の縄文遺跡の総数の約78%が集中する。遺跡の分布調査の密度、特に縄文遺跡の確認されにくい沖積平野が中流域の大部分を占めること考慮しても、指斐郡の縄文時代は揖斐川上流域、つまり、越美山系下の狭隘な小平地を中心に展開していくように思われる。中流域の遺跡のあり方は現段階では不鮮明であるが、遺跡の成立が活発になる中期後半以降は、土器などを見る限り上流域と共通する要素が多く見られる。また、それらの遺跡は小島山山麓・池田山山麓では比較的密に認められ、これは巨視的に見れば越美山系の南端の一角とも捉えられる。この指斐郡を含む越美山系一帯に発展した縄文遺跡群の具体的な性格、消長などはまだ明かになっておらず、その究明は今後の課題である。

註

- (1) 井波一雄氏のご教示による。
- (2) 犬阜農文化財保護センター1993。
- (3) 1993年度の山手宮前遺跡の発掘調査において有舌尖頭器が出土している。
- (4) 行政区域としては揖斐川町に属するため中流域と分類したが、揖斐川もこの付近では河岸段丘を形成しており、気候や標高からみても上流域的な立地ということができる。瑞岩寺遺跡、上ノ山遺跡についても同様なことが言える。

第2章 調査の目的と方法

第1節 調査に至るまでの経過

長吉遺跡は1982年に徳山村の歴史を語る会（代表根尾弥七）によって石器が表面採集され、初めて遺跡であることが知られた。この間の経緯については、篠田1982によって紹介され、徳山村の歴史を語る会1984において報告されている。また、篠田1987においても改めて詳述されている。

一方岐阜県教育委員会では、これら徳山村の歴史を語る会の分布調査を踏まえ、1984年に分布調査を実施した。これは1983年10月12日の水資源開発公団徳山ダム建設所長よりの徳山ダム水没地区内の遺跡分布調査の依頼を受けて実施したものである。この結果については、岐阜県教育委員会1985において公刊された通りである。徳山ダム水没地区内における調査の詳細な経緯については、「戸入村平遺跡」に詳述されている通りであり、重複を避けるためここでは割愛する。以上の結果を受けて、徳山ダム水没予定地内に所在する長吉遺跡の調査を1991年度に実施することとなった。

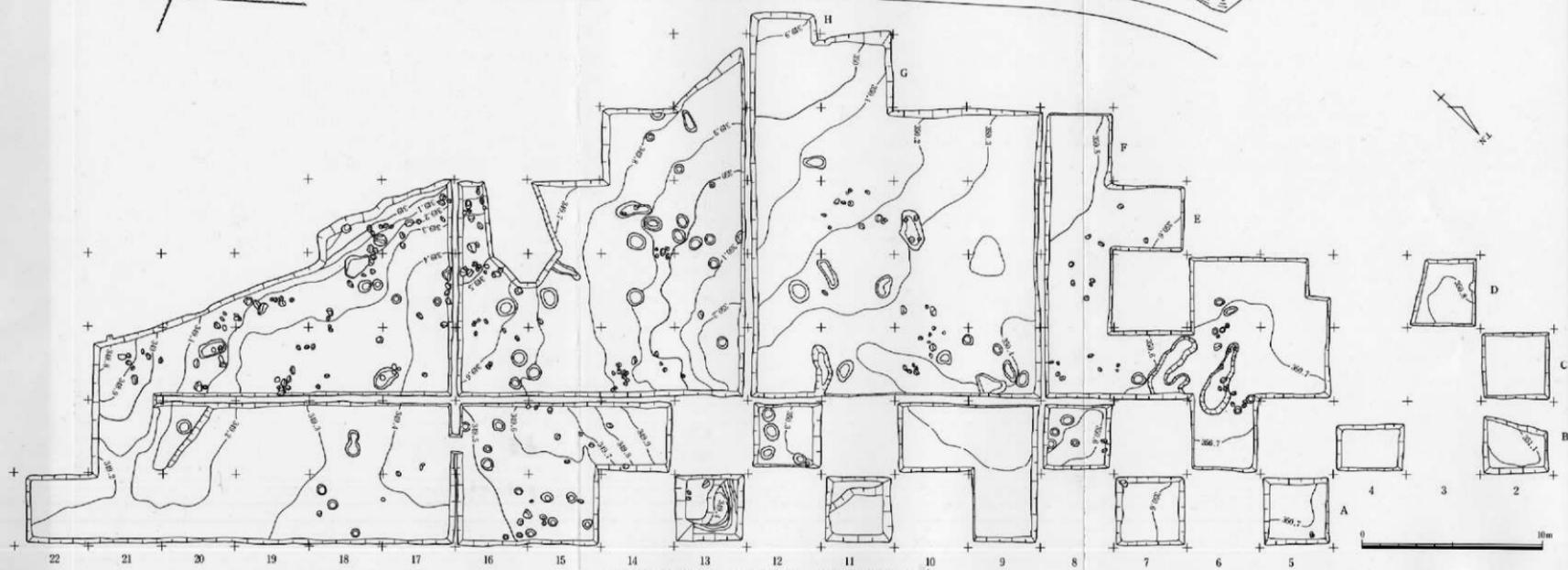
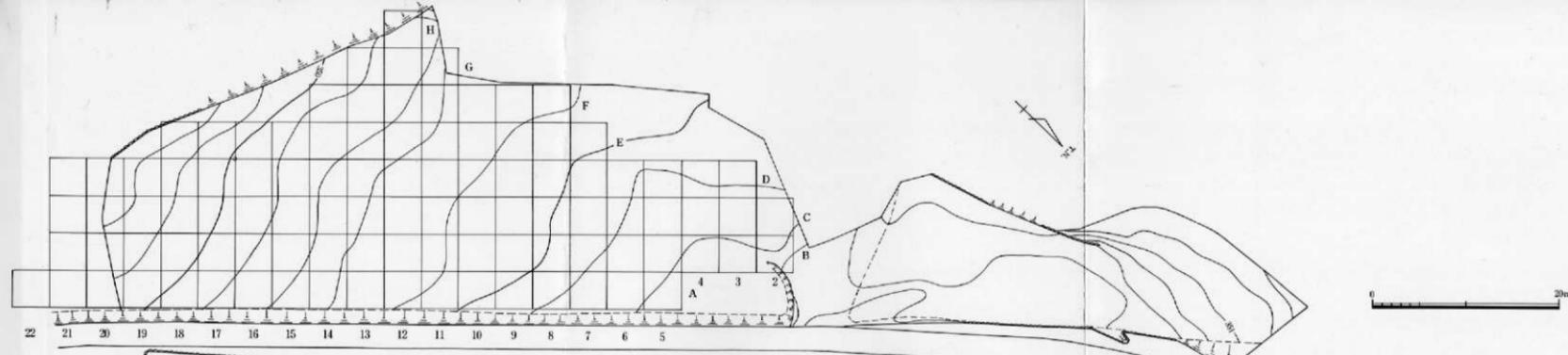
普賢寺跡は徳山村史編集委員会1973においてその伝承地が紹介され、伝承地に置かれていた五輪塔の写真が掲載されているが、その詳細については触れられておらず、岐阜県教育委員会1985においても遺跡としてはあげられていなかった。その後、徳山村の歴史を語る会を母体とする揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い（揖斐谷ミニ学会）の分布調査に基づき、藤橋村教育委員会より1990年に遺跡の発見届が提出された。同遺跡は徳山ダム水没地区内に存することにより、1991年度に調査を実施することとなった。

第2節 長吉遺跡の発掘調査

発掘調査前の状況 長吉遺跡は揖斐川左岸の小規模な河岸段丘上に立地している（第9図、図版1）。段丘の山側を国道417号が走り、一部は山を削り、庭石置場として利用されていた。そこから斜面を登ると「寺平」と地元で通称されてきた、山腹の平坦地がある。ここは真言密教の寺院がかつて存在したと伝承されてきた所であり、平坦地は人為的削平地である可能性が指摘されている（徳山村の歴史を語る会1984）。

遺跡は少なくとも1986年までは畠地であり、塚集落の村民によって耕作が行われてきたが、補償完了後は荒蕪地として茅などが一面に繁茂している状況であった。図版1に徳山村の歴史





第10図 長吉遺跡グリッド設定図(上)、長吉遺跡完構状況(下)

を語る会の提供による1982年当時の本遺跡の近景写真を掲載した。

調査区の設定 本遺跡では、地形に合わせて基準線を設定した。グリッドの一辺は4mで、長軸方向に北西から南東に向って1~23と順次番号を付し、北東から南西方向にA~Iの記号を与えた。これによって、9A、18Dのように各グリッドを呼称することとした。なお、長軸方向は真北に対して44°西偏している。なお当初、遺跡の範囲は段丘の北側が中心であると考えられたため、これに即して地形測量を委託し、19列まで杭打ちを実施した。しかし、調査の進展によって南側にも伸びていることが確認されたため、20~23列まで発掘調査地区を延長したが、延長分については調査前の地形測量は実施することができなかった。このため、発掘調査区と調査前の地形測量図については一致していない部分がある（第10図）。

発掘調査の経過 長吉遺跡の発掘調査は、1991年9月10日に開始し、11月7日をもって終了した。

第1週（9.10） 塚（塚村平）遺跡と並行して、本日より調査を開始した。9A~9Fの9列グリッドから掘削に入る。第Ⅰ層、第Ⅱ層の掘削により縄文土器片とフレイク、チップが出土した。

第2週（9.20） 塚（塚村平）遺跡の残務処理も重なったため、この日まで長吉遺跡の掘削は十分に行えず。9列に加えて11Cグリッドの掘削を開始した。縄文土器片に加えて、打製石斧が出土する。

第3週（9.23~9.27） 11Cから16CグリッドにかけてのC列グリッドの掘削を行うと同時に、周辺グリッドの掘削にも着手した。18Bグリッドなどでは第Ⅲ層まで掘削が進む。縄文土器片に加えて石器も出土するが、量的には少量にとどまる。打製石斧が比較的多いのが注目された。

第4週（9.30~10.4） 11Aから18AグリッドにかけてのA列を中心とする掘削を進める。この週に入り、打製石斧に加えて磨製石斧の出土を見た。

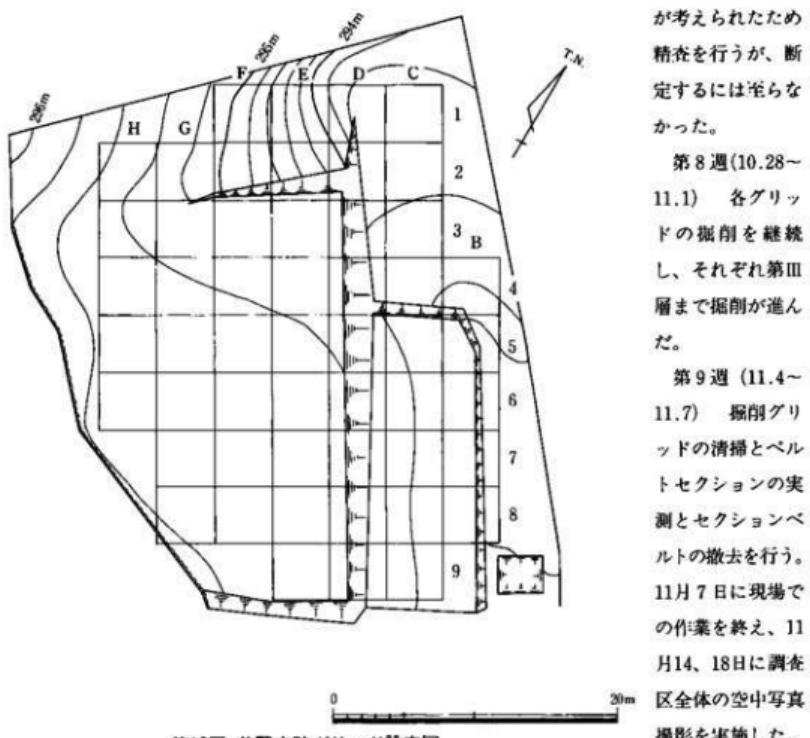
第5週（10.7~10.11） A列の掘削を継続し、第Ⅲ層から第Ⅳ層に掘削が進む。縄文土器片や石器類の出土が依然として続くが、明確な遺構は検出できない。

第6週（10.14~10.18） 10月16日、18Dグリッドより土器棺の可能性が考えられた土器埋設遺構を検出、実測に入る。また10Dグリッドからは早期後半の縄文土器片がややまとまって出土した。20列グリッドより縄文時代晚期の土器がややまとめて出土したため、グリッドを南東方向に延長して調査区を拡張することとした。

第7週（10.21~10.26） 21列を中心に縄文時代晚期の土器片が出土。この週よりセクションベルトの撤去を始める。なお、17Eグリッドの第Ⅱ層中より硬化面を検出し、床面の可能性



第11図 普賢寺跡発掘調査区と周辺の地形



第12図 善賢寺跡グリッド設定図

第3節 善賢寺跡の発掘調査

発掘調査前の状況 善賢寺跡は西谷川と東谷(指斐川本流)の合流地点より約1.5km下流の指斐川右岸段丘上に立地する。段丘面は200×300m程の、指斐川の曲流部に半円形に突き出ている(第11図、図版28)。善賢寺跡伝承地はこの段丘の中央やや北よりに位置し、段丘の上にのる扇状地形の扇尖部にあたる。下開田集落移転前の状況は水田であり、下開田道場(淨土真宗誠照寺派、岡野1985)のすぐ西にあたる。旧来より真言宗の寺院、善賢寺跡との伝承を残し、五輪塔が置かれていた(大牧治子1985)。また、「善賢寺桜」と呼ばれる桜の古木もかつては存在した。⁽¹⁾ 調査地の北西にあたる通称「トボトケ(塔仏)」には宝體印塔の存在が知られていた(徳山村史編集委員会1973)他、各所に五輪塔が見られた。調査地は背後のミヤノタニから押し出してきた土砂が厚く覆っていると推定された。なお、国道417号より東の指斐川よりの部分に下

開田村平遺跡（宇野・佐野ほか1993）があるが、同一段丘面ではなく、もう一枚上の上位段丘面に普賢寺跡は立地する。調査にあたっては、普賢寺跡とは別にこの遺跡に関連する遺構が存在するかどうかも注意された。

調査区の設定 本遺跡の調査にあたってはこの伝承地を中心に、地形に合わせて基準線を設定した。グリッドの一辺は4mで、北西から南東に向って1～9と番号を付し、北東から南西にA～Hの記号を付した。これによって、4C、5Dグリッドのように各グリッドを呼称することとした。なお、長軸方向は真北に対して31°西偏している。

調査予定地は下開田集落移転の後、廃土置場となっていたため、重機を導入して廃土の除去を行った後、調査に着手した。調査区の地形測量は廃土の除去後に実施したものであり、集落移転前は水田掘削時の石垣などが積まれていた（第12図）。

発掘調査の経過 普賢寺跡の発掘調査は、1991年11月8日に開始し、12月17日をもって終了した。

第1週（11.8） 長吉遺跡の調査終了後、普賢寺跡へ移動しこの日より調査を開始した。

第2週（11.11～11.15） 4G、5G、6G、7G、8Gと、G列の各グリッドから掘削に入る。第I層の掘削を終え、第II層にかかる。第II層中より縄文土器片が少量出土する。雨天が多く、思うように調査が進まない。

第3週（11.18～11.22） E、F列へと掘削グリッドを拡大する。第II層からの縄文土器の出土は、少數ではあるが依然として見られる。また、5Eグリッドより石錐、3Gグリッドより打製石斧が出土する。

第4週（11.25～11.29） 3Eグリッドより陶器片がやまとまって出土したが、遺構に伴うものとは考えられなかった。また、5Cグリッドから打製石斧が出土する。

第5週（12.2～12.6） C列、E列の各グリッドの第II層より縄文土器片、陶器片が引き続いて出土するが、普賢寺伝承地に関わると思われる遺構は検出するに至らず。6Bグリッドよりかわらけ片が出土する。

第6週（12.9～12.13） 各グリッドとも第II層を掘削し、さらに下層の包含層と遺構の有無を確認するための深掘りを行う。遺物の出土状態は散漫である。この週の後半には降雪を見、作業は困難を極めた。

第7週（12.16～12.17） ベルトセクションの実測後、12月17日に空中写真撮影を実施して現地における調査を終了した。

註

- (1) 大牧富士夫氏のご教示による。

第3章 長吉遺跡の遺構

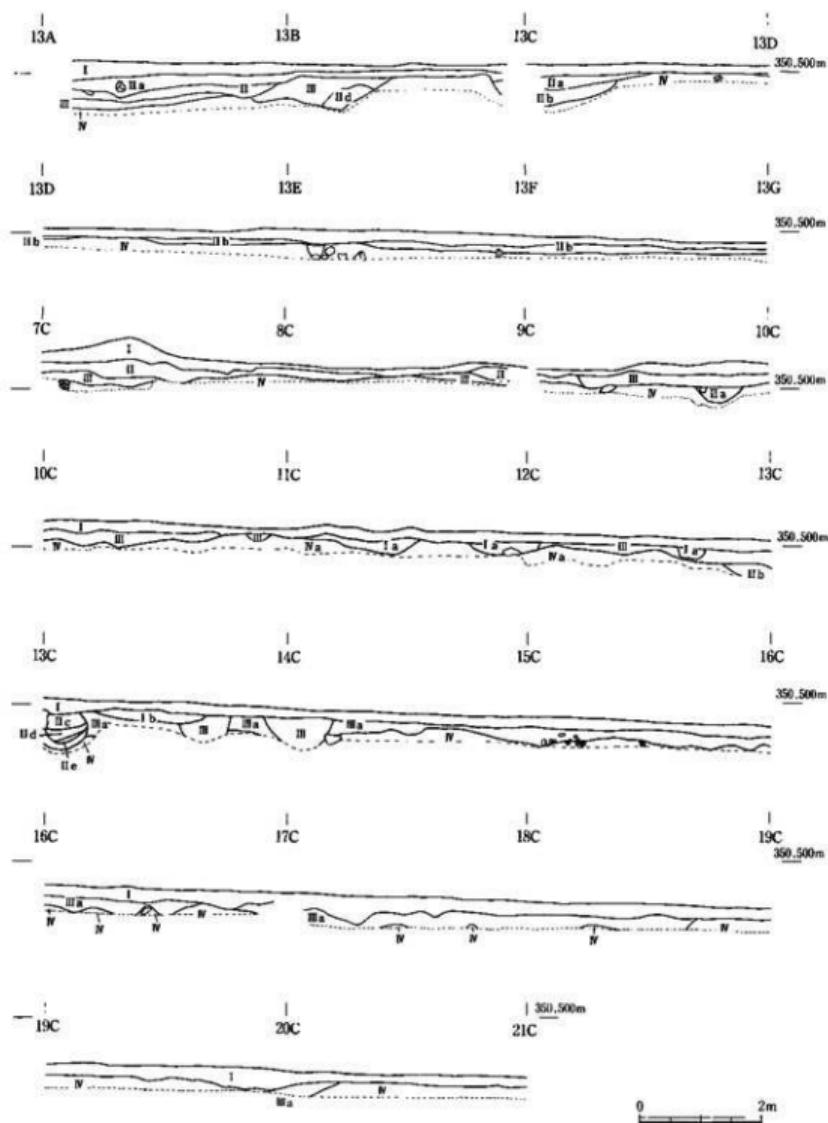
第1節 基本層序

長吉遺跡は揖斐川左岸の小規模な河岸段丘上に立地している。標高は350～352mで、揖斐川本流の現河川との比高は約5mしかない。長吉遺跡が立地する地形は揖斐川本流の下位の河岸段丘に相当するものと考えられる。長吉遺跡の上流、北北西約500mに位置する塚（塚村平）遺跡も揖斐川からの比高は5m程しかなく、同様に非常に低い。

調査によって確認された層序は、基本的には4枚である。

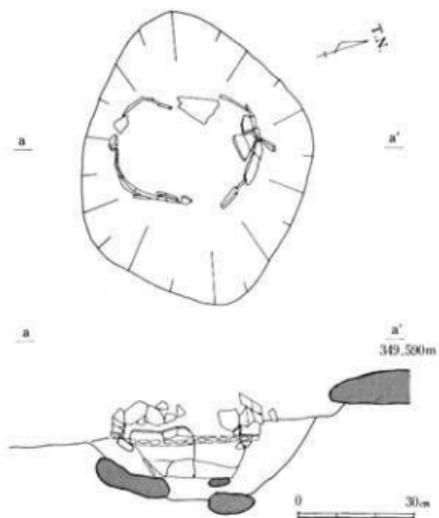
第I層 黒褐色土 (10YR2/3)	表土、耕作土である。現状では荒地となっているが、1986年までは畑としての耕作が行われており、その際の耕作土に相当する。小礫混じりであるが、比較的し まりがある。
I a層 黒褐色土 (10YR2/3)	第I層に比べて、やや礫の含有が多い。
I b層 暗褐色砂礫土 (10YR3/4)	暗褐色で、径5cm前後の川原石を多く含む。
第II層 暗褐色土 (10YR3/4)	砂を含み、小礫を混入する。やや粘質の土壤。
II a層 黒褐色土 (10YR2/3)	第II層に比べて、砂の含有がやや多く、粘性もある土壤。
II b層 黒褐色砂礫土 (10YR3/2)	黒褐色土であるが、砂礫を多く含む。
II c層 黒褐色土 (10YR2/2)	径3～4cmの礫を若干含む。
II d層 黒色土 (10YR2/1)	II c層に比べて、ややしまりがある。径1～2cmの小 礫を若干含む。
II e層 黒褐色土 (10YR2/2)	径5cmの礫を若干含む。
第III層 暗褐色土 (10YR3/3)	砂を含み、小礫を混入する。やや粘質の土壤。
III a層 褐色砂質土 (10YR4/4)	若干の粘性に富み、砂を多く含む。
第IV層 黄褐色砂質土 (10YR5/6)	無遺物層と考えられる、所謂地山である。非常に砂質 である。
IV a層 黄褐色砂礫土 (10YR5/6)	第IV層に比べて、川原石の混入率が高い。しまりに乏 しい。

なお、調査段階では段丘礫層は確認していない。また、第IV層は無遺物層で、砂礫を多く含むため所謂「地山」と考えられたが、深掘りによって確認はしていない。



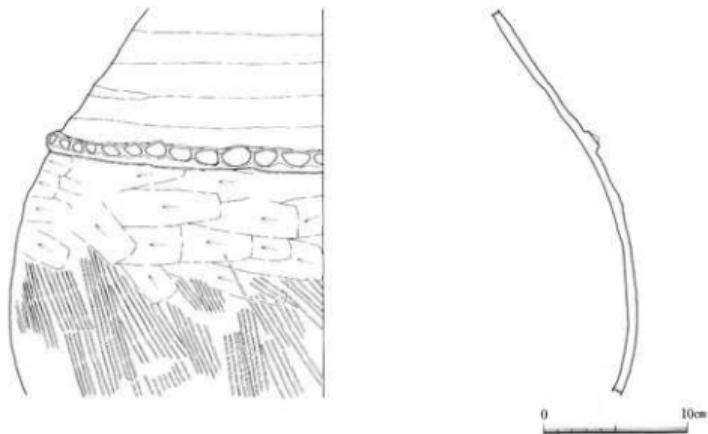
第13図 長吉遺跡土層図

第2節 遺構と遺構出土の遺物



第14図 長吉遺跡の土器埋設遺構

長吉遺跡から検出された遺構は土器埋設遺構1基であり、出土状態から土器櫛の可能性が高いと考えられる(第14図、図版4~5)。18Dグリッドの掘削により、第Ⅰ層に相当する表土の掘削を完了し、第Ⅲ層に相当する暗褐色土の掘削中に土器の上端を検出した。絶対高は349.450mで、倒立した状態で据えられたことが明らかとなった。土器を据え付けた土坑の上端は暗褐色土中の為、検出できなかったが、土器の頸部付近で地山と考えられる第Ⅳ層(黄褐色砂質土)を掘り込んでいる状態が確認された。そこで土坑を半割し、土坑の埋土を除去して埋設土器の全容を探った。土器は口縁部を打ち欠いた上で土坑に倒立して据えられ



第15図 18Dグリッド出土埋設土器

た様子が観察できた。検出された土坑の長軸方位はN-84°-Wで、長径78cm、短径64cmの菱形に近い橢円形で、残存部分の深さは約20cmである。この土坑のはば中央に逆位の状態で土器が置かれていた。胴部以下は底部まで欠損しており、後世の擾乱によって失われたとも考えられるが、胴部や底部の破片が周辺に見られることから、口縁部と同様に意図的に底部を欠損させた上で埋設したと考えられる。なお、第IV層に含まれる礫が土坑の底に見られるため、この礫混じりの第IV層を掘り込んで土器を据え付けている状況が確認できた。土坑内と土器内には茶褐色土が充填していた。なお、土坑の横にやや大きな川原石が見られたが、本遺構との関係は不明である。

周辺には土坑状の凹みやピット群が検出されたが、明確に土壙群と認識される遺構は認められず、それらの性格は不明である(図版6)。なお完掘状況は第10図の通りであるが、多数のピット・土坑状の凹みが認められる。しかし、調査段階でこれらの実測図の作成を行うことはできず、また、これらに伴う遺物を識別して取り上げることもできなかった。

使用された土器は壺形土器で、胴部径43.8cm、残存口縁径24.4cmをはかる。肩部に突帯を貼り付け、押圧を加える押圧突帯を設ける。口縁部は素文突帯を有するものと考えられるが、欠損しているため不明。肩部より4段の粘土紐の積み上げが見られ、その上を打ち欠いて欠損させている。頸部はナデを施すが、粘土紐の積み上げ痕を消さずにそのままとしている。肩部の突帯は粘土紐の貼り付けによる。粘土紐の幅は15mmで、高さは約7mmと高く貼り付ける。その上から明瞭な押圧を加える。押圧工具は不明だが、指・貝殻または棒状工具とは考えられず、ヘラ状工具に近いものかと思われる。また、部分的に広く押圧を加えた後に、さらに狭く深い押圧を加えている部分も見られる。突帯の下は右から左へのヘラケズリ。その下の胴部は斜位の貝殻条痕文を施す。突帯下の遺存状態は粘土紐の6段分までにとどまっているため、あらかじめ底部と胴部の一部を欠損させた上で据え付けていることがうかがえる。外表面は突帯より下の部分にスス状の炭化物の付着が見られ、内面には口縁部近くにとくにスス状炭化物が顕著である。器壁は6mm前後。胎土には径1~2mm程の砂粒を含むが、ナデによって胎土に埋もれている様子がわかる。焼成は良好で、表裏面ともに明赤褐色(5YR5/6)~褐色(7.5YR4/3)を呈する(第15図、図版19、23)。

第4章 長吉遺跡の包含層出土の遺物

第1節 土 器

1. 包含層出土土器の分布状況

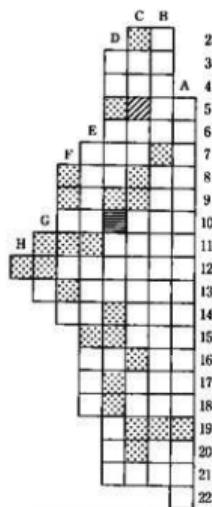
長吉遺跡からは総計1050点余りの土器片が出土している。そのうち遺構に伴って出土したと確認される遺物は前述の埋設土器のみであり、その他はすべて包含層出土である。土器群の概要を述べる前に、包含層出土の土器の分布状況についてみておきたい。

土器の取り上げは個体識別を行わず、グリッド及び層位ごとに取り上げ、それぞれ注記されている。これを基に各土器群ごとに出土分布を図示したのが、第16図である。なお、層位については遺物取り上げ時の層位認識、つまり注記された層位とセクション図作成時の層位のどちら方にずれが生じた。このためにベルトのセクション図と土器取り上げの際の層位認識とは異なっており、照合しない。第1表に19列グリッドの層位別土器片一覧表を例示した。

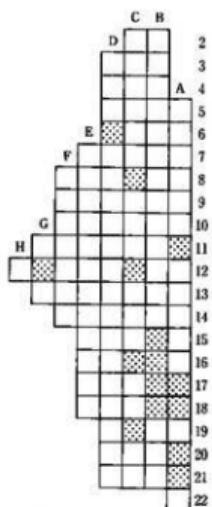
第I群土器（縄文早期後半）は段丘の周辺から弧状に分布して出土している。特に集中して出土したのは、5Cグリッド、10Dグリッドで、前者からは14点が、後者からは36点がややまとまって出土した。接合関係、ならびに同一個体と考えられる土器片の分布状況を第17図に示した。接合関係では5Cと5D、16Bと17Bの隣り合ったグリッドから2個体分が出土している。直接の接合関係ではないが、8Fと10Dと11Eにまたがって同一個体と考えられる土器片が出土している。

第II群土器（縄文早期末～前期初頭）および第III群土器（縄文中期）は少數のため、接合関係、同一個体の関係の検討はできなかった。

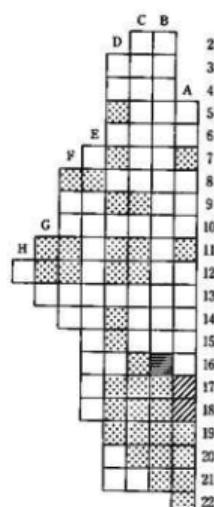
第IV群土器（縄文晚期後半以降）は、ほぼ発掘区全域から土器の出土を見るが、その中心は第I群土器の分布とは異なって、段丘東南側の半分に集中している。特に16Bグリッドから78点が、18Aグリッドからは70点が、それぞれまとまって出土した。遺構として確認されたのは18Dグリッドの埋設土器のみで、その他に遺構と認識できるものは確認されなかった。18Dグリッドでは埋設土器の他に検出された土器片は少なく、わずか4点にとどまっているが、これはこの地点があまり擾乱を受けなかったことを物語っているとも考えられる。複数グリッドにまたがる埋設土器の接合関係は認められなかったが、1点だけ16Bと18Aにまたがって同一個体と考えられる土器片が出土している。後述のようにII群部から判別すると個体数は60個体を超すと思われるが、これらがほとんど接合しなかったことから、晚期後半以降の擾乱の激しさ



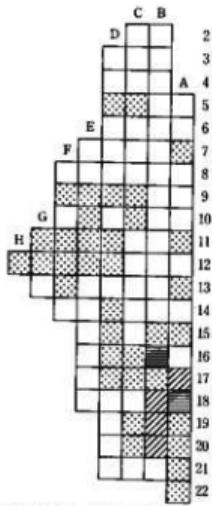
第I群土器の分布状況



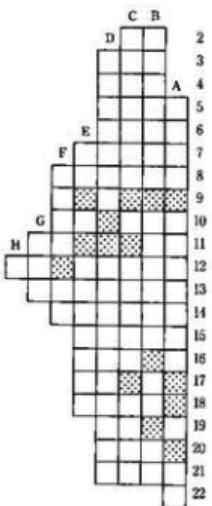
第IV群土器の分布状況



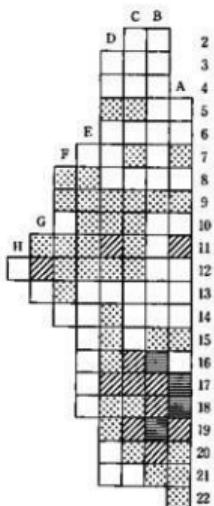
第IV群突蒂文・条痕文系土器の分布状況



第IV群無文土器の分布状況



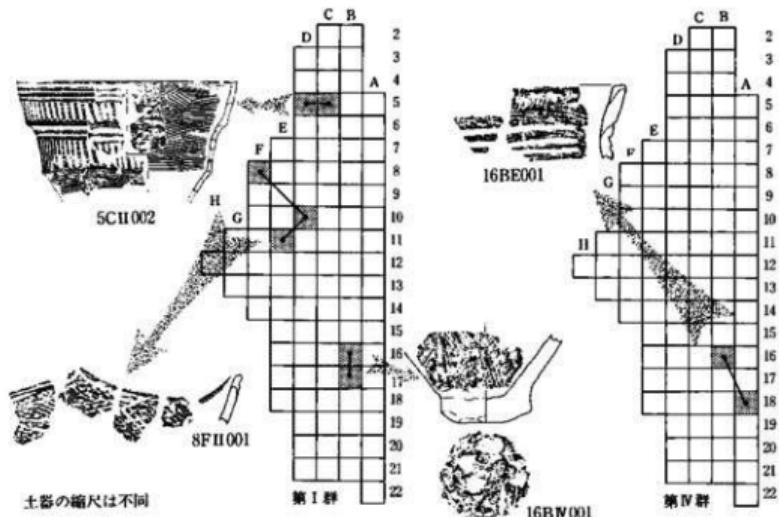
第IV群土器底部の分布状況



第IV群土器(総計)の分布状況

■ 1~9 ■ 10~19 ■ 20~

第16図 包含層出土土器の分布状況



第17図 包含層出土土器の接合状況

をうかがうことができる。

しかし、早期後半の土器の集中箇所と晩期後半以降の土器の集中箇所が地点を異にしていることは明確であり、それぞれの集中箇所で検出された土坑状の凹み、ピットがこれらの時期に相当する遺構である可能性は否定できない。

次に包含層の層位的検討を加えておく。19列の19A、19B、19Cからは第I群土器と第IV群土器が出土している。この出土層位の関係は、第1表の通りである。第II層からは第IV群土器が、第III層からは第I群土器がそれぞれやや多い傾向は認められるが、明確に分層されてそれぞれの土器群が検出されたとはいえない。なお、注記の層位とセクション図とは異なることは先に述べた。

2. 包含層出土土器の概要

長吉遺跡の調査においては明確な遺構が伴わないので、包含層出土として把握された縄文土器が多く検出されている。

その内容は、早期後半の条痕文系土器

	19A	19B	19C
I層			
II層	IV群 19A II 001 IV群 19A II 002	IV群 19B II 027 I群 19B II 001	IV群 19C II 002 I群 19C II 013
III層	V群 19A III 001 V群 19A III 002 I群 19A III 021 I群 19A III 024 I群 19A III 025		

第1表 19列グリッドの層位別土器片一覧表

から晩期後半以降の突帯文・条痕文系土器にまで及ぶ。そのうち、ある程度の復元が可能な個体は埋設土器1個体のみであり、その他はすべて破片である。

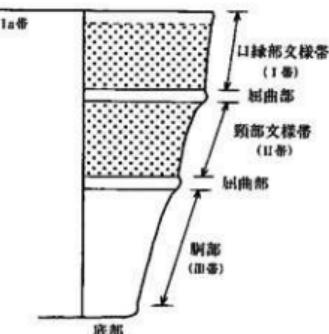
本報告では、土器については図上復元を多用している。それは、破片から推定しうる器形を大切にしたいと考えるからであるが、調査時に十分な検討を加えながら取り上げることができなかつたためでもある。また、本遺跡からは比較的まとまって縄文早期後半の土器が出土しているが、出土状態を写真や実測図で十分に記録することができなかつた。本遺跡の遺物の出土状況を示す写真として埋設土器1点と磨製石斧1点を図版4~5に掲載した。

土器は時期により下記のようにⅣ群に分け、それにその他の土器を加えてⅤ群に分類した。

- | | |
|-----|----------------------|
| 第Ⅰ群 | 縄文時代早期後半の土器 |
| 第Ⅱ群 | 縄文時代早期末から前期初頭にかけての土器 |
| 第Ⅲ群 | 縄文時代中期の土器 |
| 第Ⅳ群 | 縄文時代晚期後半以降の土器 |
| 第Ⅴ群 | その他の土器 |

第Ⅰ群土器 縄文時代早期後半の土器

縄文時代早期後半に属すと考えられる土器で、胎土に纖維を含む土器をこの群に一括した。多量に胎土に纖維を含むことが特徴であるが、その多くは貝殻条痕文を施文する。晩期後半以降の条痕文を施文する突帯文・条痕文系土器とは纖維の有無によって、明確に分離することができる。器形ならびに文様構成と調整手法によって、次の6類に分類する。なお第Ⅰ群土器の説明に際しては、関野1980に掲りつつ第18図の呼称を用いる。口縁から1段目の屈曲部までを口縁部、1段目の屈曲から2段目の屈曲までを頸部、2段目の屈曲から底部までを胴部とし、口縁部に施した文様帯を口縁部文様帯(I带)、頸部に施した文様帯を頸部文様帯(II带)と呼称する。I带のうち口縁に沿って横に施文する文様帯をIa带とする。



第18図 第Ⅰ群土器の器形・文様帯の模式図

1種（第19図、図版7～8）

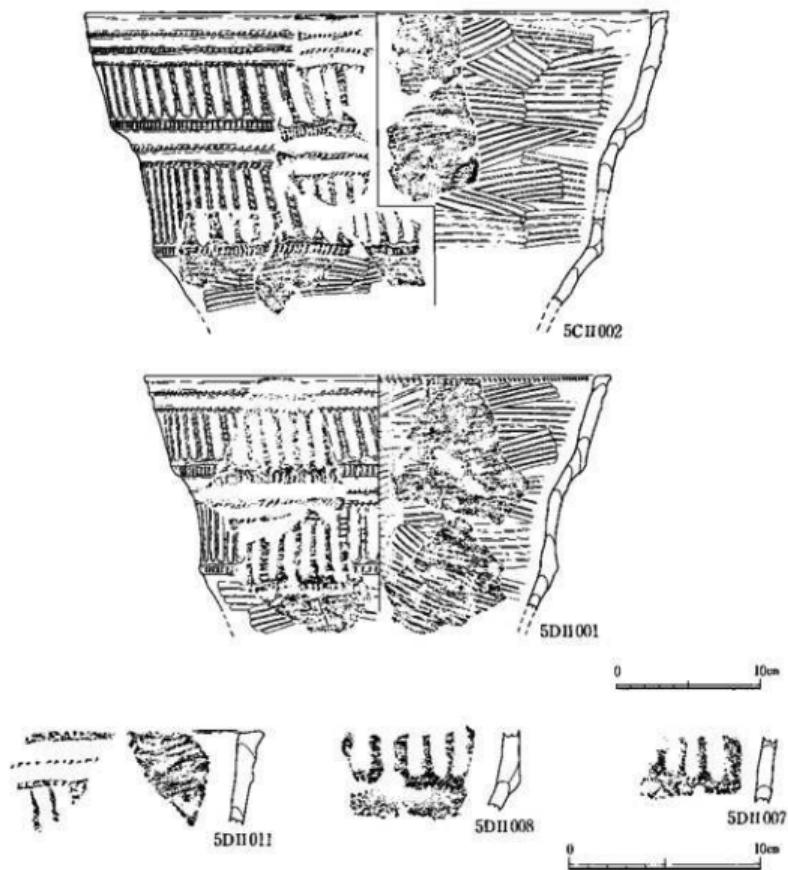
2段に屈曲した器形を有し、屈曲部に貼り付け隆帯をおくものを基本とする。地文として貝殻条痕文を施した後、指による凹線文と刺突文により装飾的な文様を配する一群。この群は規則性が高くほぼ同一の内容を有するといってよいが、細部の施文手法の若干の相違により次の4種に分類する。

a種) 横位、縦位の凹線間に刺突文を充填するもの。

1点のみである。5CII002は5片の接合片であるが、図上復元してある。2段に屈曲した器形を有し、屈曲部に貼り付け隆帯をおく。推定口縁径は約40.6cm。口縁部端面は約13mmに肥厚させ、口唇部は指により凹線風になぞる。やや内削ぎとなる器形を持つ。文様帶は口縁部文様帶、頸部文様帶ともにはほぼ同一の文様構成をとる。幅約10mmの指による横位の平行凹線文を口縁部文様帶は3条、頸部文様帶は2条おく。施文方向は左から右。その下に縦位の指による凹線文をおく。施文方向は上から下。横位、縦位共に凹線間にヘラ状工具による浅い刺突を小刻みに充填する（図版24-1）。貼り付け隆帯の上には縦位の刻目を施す（図版24-2）。胸部には横位の貝殻条痕文を地文として施す。裏面には全面に貝殻による条痕調整を右から左に施す。器號は8～11mmで、纖維を多量に含む（図版24-6）。胎土に長石粒を多く含むが、雲母は少なく、よく精選された胎土を用いている。焼成は極めて良好で精緻で固く、表面は黒褐色（5YR2/2）～赤褐色（5YR4/6）、裏面は黒褐色（5YR2/1）～褐色（10YR4/4）を呈する。

b種) 横位の凹線間にのみ刺突を施すもの。

5DII001は3片の接合片で、図上復元してある。2段に屈曲した器形を有し、屈曲部には隆帯をおく。口縁径約32.6cm。口縁端面は約12mmに肥厚させ、やや内削ぎ気味となる。口唇部内側にヘラ状工具による刻目を施す。口縁部文様帶も頸部文様帶も基本的に同一のモチーフを有する。口縁部文様帶は上より幅約10mmの指による横位の平行凹線文を左から右へ2条施す。凹線間にヘラ状工具による刺突を斜めに連続的に施し、刺突痕はD字状を呈する。その下に縦位の指による凹線文を上から下へ施す。a種のように凹線間に刺突を施さず、地文の条痕文がそのまま残る。屈曲部の隆帯には縦位の刻目を連続に施文する。胸部は横位の貝殻条痕文を全面に施し、裏面にも全面に貝殻条痕文を施す。胎土には纖維を多量に含み、長石粒を若干含むが、雲母はほとんど含まず、よく精選された胎土を用いている。焼成は極めて良好で、表面は黒褐色（5YR2/1）～にほい黄褐色（10YR5/4）、裏面は黒褐色（10YR3/2）～にほい黄褐



第19図 包含層出土の土器(I) 第I群

色(10YR5/4)を呈する。

c種) 横位、縦位に凹線を施し、かつ口縁部端に刻日を施すもの。

5DII011は外反する口縁部片。やや内削ぎの口縁部端面には横位の条痕を残している。口唇部と平行四線文の間に刻日を連続して施す手法はa種、b種に見られない。工具はヘラ状工具

を用いている。凹線は指により幅約10mmで横位に2条施文する。凹線間には先の尖った、断面三角形を呈する刺突文を連続的に施す。裏面には横位の貝殻条痕文を施している。胎土には纖維を多量に含み、径1mm以下の砂粒を若干含むが、長石が多く雲母は含まない。焼成は良好で、表面は黒褐色(5YR3/1)から灰黄褐色(10YR4/2)、裏面は灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。

d種) 基本的な文様構成を踏襲しながら、隆帯の貼り付けや隆帯上の刻目が省略されるなど、粗略化が見られるもの。

5DII008は屈曲した器形を有し、屈曲部には隆帯をおく。文様構成から判断して頸部文様帶と胴部との間の屈曲部となる可能性が高い。頸部文様帶は指による縱位の凹線文を施す。凹線幅は8~9mmと比較的狭い。深さは浅く、凹線間の刺突は省略され、地文の条痕を残している。隆帯は貼り付けを保っているが、刻目は見られず、省略が行われている。裏面には斜方向の条痕調整を残している。器壁は8mm前後である。胎土には纖維を多く含み、細砂粒を若干含むが、よく精選されている。焼成は良好で、表面は黒褐色(5YR3/1)~にぶい黄褐色(10YR5/4)、裏面はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。

5DII007は頸部文様帶と胴部とにまたがる小片である。屈曲部は退化し、明瞭な屈曲をなしていない。浅く、なぞるだけの縱位の凹線文を施し、その下に円点状の刺突列をおく。円点は径2mm程の細い工具で、浅く連続的に刺突する。凹線間に施文はせず、全体的に省略が著しい印象を受ける。器壁は8mmと比較的薄い。胎土には纖維を多量に含み、径1mm前後の砂粒を若干含むが、比較的良好。焼成は良好で、表面は黒褐色(5YR3/1)~にぶい黄褐色(10YR5/4)、裏面はにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。

2種(第20図、図版9~11)

2段に屈曲した器形を有し、屈曲部に貼り付け隆帯をおくものを基本とする。地文として条痕文を施した後、半截竹管状工具による凹線文とD字状刺突文によって区画状文や装飾的な文様を配する一群。文様構成と手法により次の3種に分類する。

a種) 半截竹管状工具を用いて、波状の凹線文とD字状刺突文によって区画状文や装飾的な文様を配するもの。手法により次の2種に細分する。

a 1種) 直線を主として用いて区画状文を設けるもの。

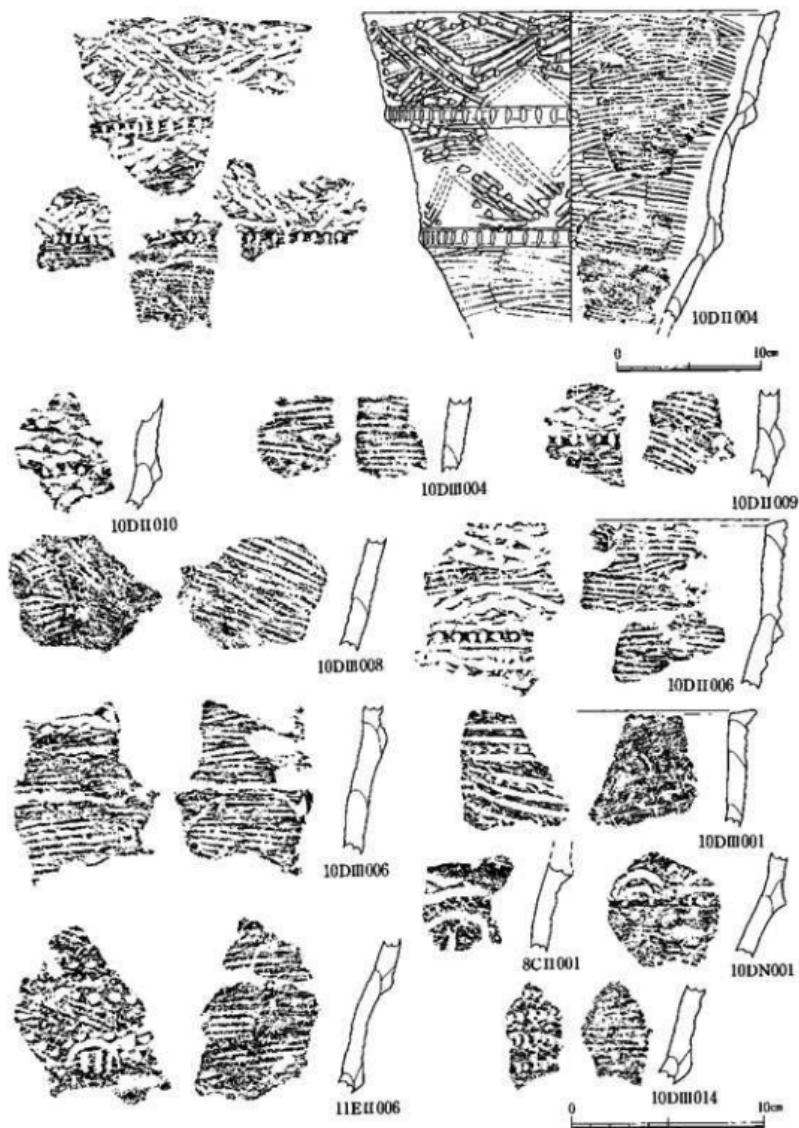
10DII004は8片の接合片であるが、完全に接合しなかったので図上復元してある。推定口縁径29cmで、2段に屈曲した器形を有し、屈曲部に貼り付けによる隆帯をおく。口縁部端面は幅約11mmの内削ぎとなる。地文として貝殻条痕文を横位に施した後、口縁部、頸部ともにはば近似した褶曲状の文様を施す。文様構成は半截竹管状工具による幅約6mmの凹線を菱形に組み合わせ、簡略化した区画状文を設ける。次に、押し引き状にD字状刺突文が凹線に沿って描かれる(図版24・4)。区画状文内には地文の条痕文が見られるのみで、光壇文は見られない。隆帯は貼り付けによって高く設け、縱位の刻目を施す(図版24・5)。刻目は幅5mmの細い竹管状工具で上から下へ押し引くように施文されている。胴部及び内面は横位の貝殻条痕文が全面に施される。胎土には多量の纖維を含有し、若干の砂粒を含むのみでよく精選されている。焼成は良好で、表面は黒褐色(5YR3/1)～褐色(10YR4/4)、裏面は灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。

10DIII004は屈曲部の下の胴部片である。表裏ともに明瞭な貝殻条痕文を残す。厚さ11mmで比較的厚く、底部近くと考えられる。胎土には纖維を多量に含むが、砂粒の混入は少なく、よく精選されている。焼成も良好。色調は表面は黄褐色(2.5Y5/3)で、内面は灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。条痕調整の様子、胎土からみて10DII004の胴部となる可能性が高いため、これに含めた。

10DIII008は表裏ともに斜位の貝殻条痕文を明瞭に施文する胴部片。器厚は約10～11mmと比較的厚い。条痕の条肋の幅は約3mmと比較的発達した二枚貝を用いている。条痕調整の方向は表裏とも左から右。胎土に纖維を多量に含み、径5mm前後の小礫を少し混入するが、量は少ない。焼成は良好で、表面は灰黄褐色(10YR6/2)～黒褐色(10YR3/2)を、裏面は黒褐色(10YR3/1)を呈する。10DIII004と同様に10DII004の胴部となる可能性があるため、これに含めた。

10DII010は口縁部と頸部の間の屈曲部片。屈曲部には貼り付け隆帯をおく。隆帯には竹管状工具による刻目を施す。口縁部は不明だが、ほぼ直立ないし若干外反すると考えられる。竹管状工具により幅6mmの凹線文を描き、それに沿って同工具によりD字状刺突を左から右へ入れる。地文は条痕文であるが、裏面の条痕は弱い。多量の纖維を含み、やや砂目の胎土を用いるが、砂粒の混入は少ない。焼成は良好で、表裏とも暗褐色(10YR3/3)を呈する。

10DII009は屈曲を有する器形のうち、頸部文様帶から胴部にかけての破片。屈曲部には刻口を有する貼り付け隆帯をおく。刻目は細い円棒状工具かと思われるもので、縱位に押し引く。頸部文様帶は幅6mmの竹管状工具による凹線文と、D字状刺突文を押し引き状に施文する。胴部の地文は条痕文であるが、条痕を施した後に隆帯に沿って指によるナデも施される。胎土には纖維を多量に混入するが、砂粒は少ない。焼成は良好で、表面は黒褐色(10YR3/



第20図 包含層出土の土器(2) 第I群

1)、裏面は灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。隆帯の幅や調整の具合から見て、10DII004とは別個体と考えられる。

a 2種) 曲線を用いて波状文を施すもの。

10DII006は屈曲した器形を有し、屈曲部に貼り付け隆帯をおく。口縁部端面は幅約11mmで、内削ぎとなる。口縁端部に径5mm程の細い竹管状工具による刻目を施す。地文としての貝殻条痕文を施した後、半截竹管状工具により凹線文を施文する。凹線は波状に施文し、凹線に沿って押し引きしながらD字状刺突文を描く(図版24-3)。上部凹線文と下部凹線文は対弧文状であるが、両凹線文間の区画状文内は文様の充填が見られず、地文の条痕文のみとなる。凹線の幅は約6mmで凹線施工工具と刺突文施工工具は同一と考えられる。裏面にも全面にわたって横位の貝殻条痕文が施文される。胎土には多量の繊維を含むが、砂粒の混入は少なく、よく精選されている。焼成は良好で、精緻で固い。表面が黒褐色(5YR2/1)、裏面は灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。

10DIII001は外反気味にはば直立する口縁部で、端面をフラットに整形してやや内削ぎとする。文様は径4mm程の細い竹管状工具により凹線文を曲線状に配し、それに沿ってD字状刺突文を施文する。拓影にはあらわれていないが、表面左端に縱位の凹線が引かれ、区画状文を表現する。外表面、内面ともに地文は条痕文であるが、貝殻条痕ではなく、おそらく繊維束と思われる所謂繊維条痕を施している。胎土には多量の繊維を含む。径2~3mmの小礫をやや多く含み、焼成はやや甘い。表面は暗褐色(10YR3/4)~褐色(10YR4/4)、裏面は褐色(10YR4/6)を呈する。

10DIII006は屈曲する頸部文様帶から胴部にかけての破片。隆帯上には刻目は施さず、地文の条痕文のままとする。頸部文様帶には、半截竹管状工具による幅7mmの凹線とD字状刺突文を施文する。胴部には条肋の発達した二枚貝による貝殻条痕文を横位に施文する(図版24-7)。裏面も同様に明確に貝殻条痕文を横位に施す(図版24-8)。胎土には多量の繊維を含み、砂粒を若干含むが、胎土はよい。焼成は良好で、表面は黒褐色(10YR3/2)~にふい黄褐色(10YR5/3)で、裏面は暗褐色(10YR3/3)を呈する。小片のため全体の文様構成については不明であるが、隆帯の刻目が省略されていることより、第I群2類a 1種より若干後出の要素とも見られる。

b種) 半截竹管状工具を用いて、凹線文による幾何学的文様を施すもの。

11EII006は2段に強く屈曲する器形を有し、屈曲部には貼り付け隆帯をおく。隆帯は貼り

付けのままで、刻目は施さない。地文として斜位の貝殻条痕文を施した後に、竹管状工具で幾何学的文様を施文する。凹線文は幅5mm程で、頸部文様帯の下方、隆帶と接する位置に半円状文様を施文し、中に縦位の短線を3本おく。半円状文様からさらに円弧を右上にも伸ばしている（図版25-1）。凹線文は浅く、凹線文に沿ってD字状刺突文が押し引き気味に配されている。裏面の貝殻条痕文は横位に明瞭に施文される。胎土には径5mmの小礫を少し含むが、全体として砂粒の混入は少なく、よく精選されている。焼成は極めて良好で、精緻で固い。色調は表面が黒褐色（10YR3/1）、裏面が黒色（10YR2/1）を呈する。隆帶が貼り付けであることと、2段に強く屈曲する器形を有することは茅山下層式の範疇でとらえられることを示しているが、浅い凹線文と刻目の省略は、やや新しくなる要素も合わせ持っていると考えられる。

8CII001は屈曲部に断面三角形の貼り付け隆帶をおく破片である。隆帶には刻目は施さない。頸部文様帯は幅6mm程の竹管状工具を用いた凹線で、幾何学的文様を施す。文様は円弧を描くものが認められるが、詳細は不明。地文は痕跡から見ておそらく横位の貝殻条痕文と思われる。裏面には横位の弱い条痕調整の痕跡を残す。胎土には多量の纖維を混入し、極小の砂粒を若干含む、やや砂目の胎土を用いている。小礫は含まない。焼成は比較的良好で、表面は暗褐色（10YR3/3）、裏面はにぶい黄褐色（10YR5/4）を呈する。

10DN001は強く屈曲する器形を有し、屈曲部に貼り付け隆帶をおく、頸部から胴部にかけての小片。貼り付け隆帶上には浅い刺突文を施す。工具は不明であるが、おそらく竹管状工具と思われる。頸部文様帯の地文は不明であるが、竹管状工具で幾何学的文様を施す。凹線文は幅5mm程で、頸部文様帯の下方の隆帶に接する位置におく。半円形状に2本の凹線で円弧を描き、それに沿って浅い刺突文を施文する。隆帶下の胴部には地文として条痕文を残す。すべて横位に施文し、裏面には横位の弱い貝殻による条痕調整を残している。多量の纖維を含む、やや砂目の胎土であるが、小礫は混じらない。焼成は比較的良好で、表面はにぶい黄褐色（10YR5/3）、裏面は黒褐色（10YR3/2）を呈する。

c種) 半截竹管状工具を連続的に押し引きするもの。

10DIII014は地文に条痕文を施し、屈曲部に刻目を有する隆帶をおく。おそらくは、頸部文様帯から胴部にかけての破片と思われる。文様帯は刻目を施した工具と同様の半截竹管状工具を連続的に押し引きし、凹線文化する手法によるものと思われる（図版25-2）。表面には地文として弱い条痕文が認められるが、裏面は明瞭な横位の条痕文が施文される。胎土は極小さい砂粒を含むが、小礫をほとんど含有しない。纖維を多量に混入するが、比較的良好な胎土を用いている。焼成は良好で、表面は暗褐色（10YR3/3）、裏面は灰黄色（2.5Y6/2）を呈する。

3類（第21図、図版11～12）

屈曲した器形を有し、屈曲部に貼り付け隆帯を有するものが基本。地文として縄文を施した後、凹線文とD字状刺突文によって装飾的な文様を配する一群。文様構成と手法により、次の3種に分類する。

a種) 半裁竹管状工具を用いて、凹線文により装飾的な文様を配する一群。手法により次の2種に細分する。

a 1種) 隆帯に沿って凹線文を施すもの。

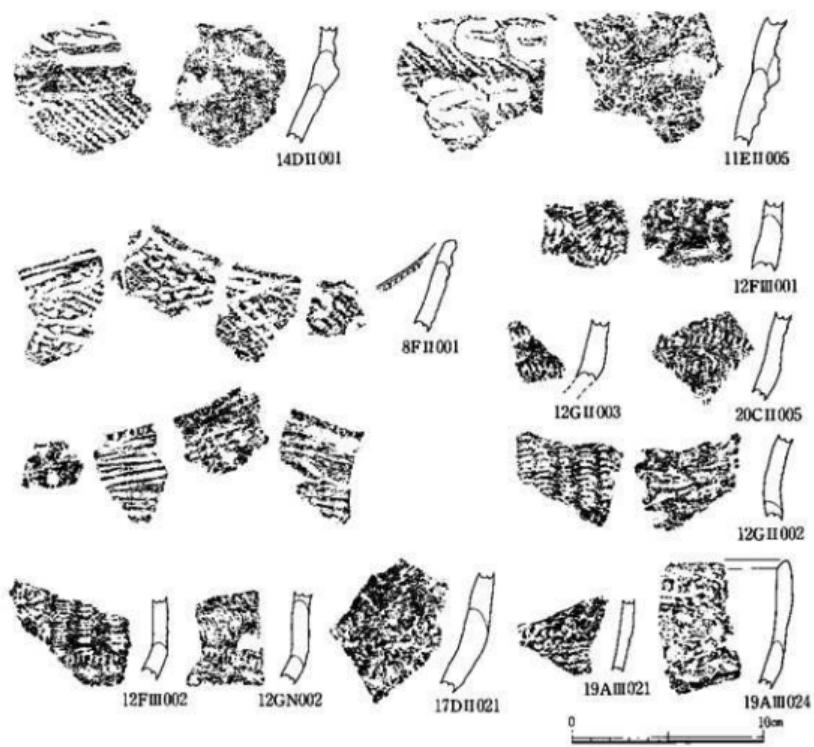
14DII001は屈曲を有する器形で、地文として単節斜縄文を施す（図版25-4）。屈曲は明瞭であるが、刻目は省略されている。頸部文様帶には地文として縄文を施した後、幅7mmの半裁竹管状工具で凹線文、及び同工具の押し引き状連続刺突文で装飾的な文様を施す。胴部には地文の単節斜縄文を施す。裏面は指による圧痕が残り、スヌ状の炭化物が全面に付着する。胎土には多量の纖維を混入し、ほとんど砂粒を含まず精選された胎土を用いている。焼成は良好で精緻で固い。表面は褐色（10YR4/6）、裏面は黒褐色（10YR3/1）を呈する。

a 2種) 隆帯に向って蛇行凹線文（流水文）を施すもの。

11EII005は屈曲部に貼り付け隆帯を持つが、隆帯には刻目は施さず無文のままでする。地文として縄文を器面全体に施し、さらにその上で幅7～9mmの凹線文を施す。凹線文は半裁竹管状工具ではなく、円棒状工具を用いていると考えられる。屈曲部をはさんで、口縁部文様帶、頸部文様帶ともに凹線文で強く蛇行する流水文が描かれる（図版25-3）。器表面には地文として単節斜縄文を施す。裏面には横位の弱い条痕が残る。器厚12mmで比較的厚い。胎土は多量の纖維を含み、径3mm前後の小礫を若干含む。焼成は良好で、精緻な印象を受ける。表面は黒褐色（10YR3/1）、裏面はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。

b種) 半裁竹管状工具を用いて、凹線文とD字状刺突文によって装飾的な文様を施すもの。

8FII001は5片からなる口縁部片である。それぞれ胎土、焼成、色調、文様構成より同一個体の可能性が高いと判断した。図示した拓影の配列は図上推定によるものである。器厚10～11mmと比較的薄い。波状口縁をなし、外に聞く器形を有する。外表面は地文に単節斜縄文を施し



第21図 包含層出土の土器(3) 第I群

た上で、幅5mm程の半截竹管状工具を用いて凹線文と刺突文を施す。凹線文は口縁に沿って1～2条引き、さらに下にも区画状文風に施文する。その上で凹線に沿うのを基本としてD字状の刺突文を、おそらく同工具を用いて刺突する。裏面は口縫部端をやや内削ぎ気味とし、刻目を配し、内面には横位の貝殻条痕文を施す。胎土には多量の纖維を含むが、小礫はほとんど含有しない。焼成は良好で、表面は黒褐色(10YR2/1～3/1)、裏面は黒褐色(10YR3/1)を呈する。

4類(第21図、図版12～13)

比較的薄手で、屈曲部の稜があまり発達していない器形が多い。地文としての条痕はあまり

明瞭ではなく、器面に連続爪形風の文様や列点状刺突文を施文する一群。2種に分類する。

a種) 爪形風の刺突を連続押捺するもの。

12FIII001は器厚14mmのやや厚い器壁を持つ。左側に幅8mmの爪形文を押し引き状に施し、その右に幅8mmの爪形風刺突文を円形に配するが、全体の文様構成は不明。下方ほど器壁が厚いため、この下に屈曲部を設けるものと思われるが、隆帯は持たないものと思われる。裏面に指による押圧痕を残す。裏面の地文は横位の弱い条痕文。胎土は纖維を多く含み、径6mmのやや大きな小礫を若干含む。焼成は良好で、色調は表面が褐色(7.5YR4/4)、裏面も同色(7.5YR4/6)である。

12GII003は屈曲部の小片である。屈曲部は若干肥厚させるだけで、隆帯は省略されている。屈曲部には爪形風連続刺突列を配し、上部にも同様の刺突列を設ける。裏面に弱い条痕を残している。胎土は纖維を多く含み、細砂粒と共に結晶片岩と思われる小礫を含む。焼成はやや甘く、色調は表面が褐色(7.5YR4/4)、裏面が褐色(7.5YR4/6)を呈する。

20CII005はゆるく屈曲する器形を有するが、屈曲は退化した印象を与える。屈曲部とその上に施された刺突列で文様を構成する。地文の条痕文は表裏ともほとんど見られない。刺突文は器面をナデによって調整した後に施文しているが、あるいは刺突列間を指により凹線文風になでた後に、刺突文を施文しているかもしれない(図版25-5)。胎土には纖維を多量に含み、径2mm前後の砂粒を比較的多く含む。焼成はやや甘いが比較的良好で、色調は表面が褐色(7.5YR4/6)、裏面は褐色(7.5YR4/4)である。

12GII002は8~9mmと比較的薄い器壁を有し、屈曲部の稜のあまり発達しない器形をとる。地文は条痕文かと思われるが、明瞭ではない。器面に幅7mmの連続爪形風の文様を縦位に施す。爪形風の連続刺突の間隔は狭いが、押し引きとはならず、小刻みに刺突を繰り返す(図版25-6)。胎土には纖維を多量に含み、雲母の細片を若干含む。やや砂目の胎土。焼成はやや甘いが、比較的良好で、表面は暗褐色(7.5YR3/4)、裏面は褐色(7.5YR4/4)を呈する。

12FIII002は約8mmと比較的薄い器厚で、屈曲する器形を有する。屈曲部の隆帯は消滅し、稜は発達しない。文様帶には縦位に爪形風の刺突列を連続させる。3条の爪形風連続刺突文の横には刺突列を回転させながら円形に施文する。屈曲部には刻口列を入れる。表裏とも調整痕は不明瞭である。胎土には纖維を多く含有し、雲母の細片を含む。やや砂目の胎土。焼成はやや甘いが、比較的良好で、表裏とも褐色(7.5YR4/6)を呈する。

12GN002は屈曲する器形を有するが、稜は発達しない。屈曲部とその上部に幅約7mmの爪形風の刺突列を連続させる。屈曲部下の胴部の地文は横位の条痕文であるが、ごく弱い。裏面の調整は不明。胎土には纖維を混入し、径4mmの小礫と細砂粒を含む。やや砂目の胎土。焼成

はやや甘いが、比較的良好で、表面は褐色（7.5YR4/4）、裏面は明褐色（7.5YR5/6）を呈する。

b種) 列点状刺突文を不規則に施すもの。

17DII021は屈曲する器形を有するが、屈曲部はゆるやかで、隆帯や明瞭な稜は持たない。屈曲部の施文もない。器表面には地文は見られず、纖維束の圧痕状の痕跡が認められるが、明瞭ではない。表面に径3mm程の、ヘラ状工具で列点状刺突文をランダムに浅く施した跡が見られる。胎土に多量の纖維を含むが、割れ口に小穴が多くあき、纖維の多量混入をうかがわせる。裏面も纖維束の痕跡が見られるが、地文はない。器壁は約14mmと厚い。色調は表面が褐色（10YR4/4）、裏面は黄褐色（10YR5/6）である。

19AIII021は、無文帶と貝殻条痕文との間に列点状刺突文をおく小片である。列点は先の尖った幅3mm程の工具で施文する。器面が荒れているため、詳細は不明。器壁は約7mmと薄い。胎土には多量の纖維と径2mm前後の砂粒を含む。焼成はやや甘く、色調は表面が褐色（7.5YR4/6）、裏面が明褐色（7.5YR5/6）である。

19AIII024はやや内湾気味に立ち上がる口縁部片。器壁は約7~8mmと薄く、多量の纖維を含む。器表面にはヘラ状工具による径3mm程の列点状刺突文が、口縁より胴部に向って2条縦位に下がる。器面の地文、調整は不明。胎土はやや砂目で、焼成はやや甘く、表面が褐色（7.5YR4/6）、裏面は明褐色（7.5YR5/6）を呈する。

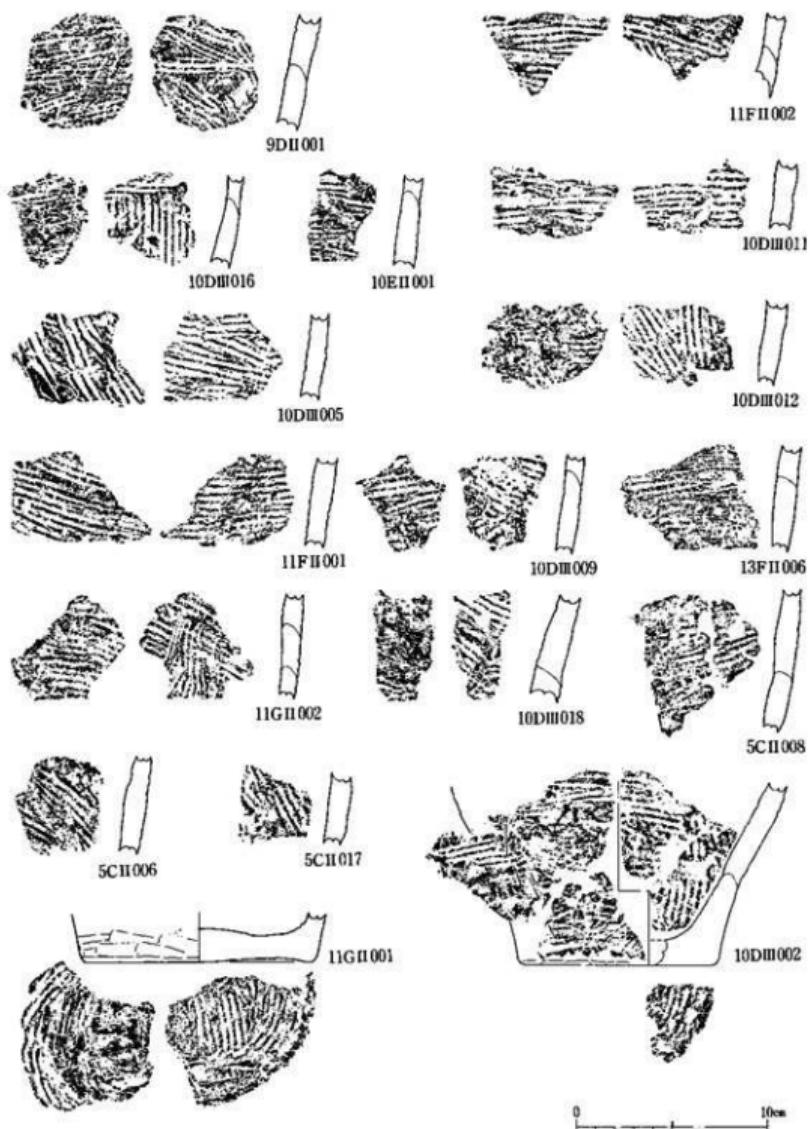
5類（第22~23図、図版13~16）

胎土に纖維を含む土器で、条痕文を器面に施す一群。条痕文の施文面と条痕施文工具の相違により3種に分類する。なお、本類は当然のことながら胴部片が多く、1~4類の胴部に相当する資料も含まれているが、その区別は困難であるのでここに一括した。

a種) 外表面に貝殻条痕文を施すもの。その多くは内面にも貝殻による条痕調整を認めることができる。

(胴部片)

9DII001は器表面、内面ともに貝殻条痕文を施す胴部片。表面には横位の条痕文を施文し、裏面には粘土紐の接合部分を横方向に貝殻でナデ。その後に斜位の条痕を入れる。器壁は約12mmと比較的厚い。胎土には纖維を多量に含み、細砂粒を若干含むが、小礫は比較的少ない。焼



第22図 包含層出土の土器(4) 第I群

成はやや甘いが比較的良好で、表面は黄褐色（10YR5/8）、裏面は黒褐色（10YR2/2）を呈する。

11FII002は器表面、内面ともに貝殻条痕文を施す胴部片である。表面は横位の条痕文を明瞭に残し、裏面は斜位の条痕文を弱く残す。器壁は約10mmで、胎土には纖維の他に小礫を若干含む。色調は表面が褐色（10YR4/4）、裏面は暗褐色（10YR3/3）である。

10DIII016は外表面に横位の貝殻条痕文を施すが、器面の荒れのため遺存状態は悪い。裏面には粘土紐の接合部を境として、上部は横位、下部は縦位の貝殻条痕文を施す。いずれも筋肋の発達した二枚貝を用いており、明瞭に施文する。胎土には纖維を多量に含み、纖維が炭化した様子がうかがえる。焼成は比較的良好だが、やや甘い。表面が黄褐色（10YR5/6）、裏面が暗褐色（10YR3/3）を呈する。

10DIII018は深鉢形土器の胴部片で、器厚約15mmと厚く、底部近くの小片。器壁から見ると平底となることは間違いない。器表面にはナデによる調整が見られるが、底部近くは横位の貝殻条痕文を施す。裏面は斜位の貝殻条痕文を全面に施文する。胎土には多量の纖維と径2mm前後の砂粒を多く含む。表面は明黄褐色（10YR6/6）、裏面は暗灰黄色（2.5Y5/2）を呈する。

10DIII011は器厚約11mmの胴部片。器表面、裏面ともに貝殻条痕文を全面に施文するが、裏面の方がより明瞭。胎土には多量の纖維と細砂粒を含むが、小礫は少ない。焼成はやや甘く、表面は黄褐色（10YR5/6）、裏面は暗褐色（10YR3/3）を呈する。

10DIII005は器厚10mmの胴部片。器表面、裏面ともに斜位の貝殻条痕文を施文する。表面は左上から右下方向に斜方向に施文し、裏面は3条の筋肋を1単位として左から右へ施文する。

11FII001と同一個体となる可能性もある。胎土には纖維を多量に含み、焼成は良好で遺存状態も良い。表面は灰黄褐色（10YR5/2）、裏面は黒褐色（10YR3.5/1）を呈する。

10DIII012は表裏とも条痕文を施文するが、表面は条痕文を施文した後に、指による押圧を加えているため、筋肋が一部消されている。裏面の条痕は縦位に明瞭に施され、筋肋は5条が1単位となる。胎土には纖維の他、金雲母、石英粒を多量に含み、他の土器片と異なる様相を有する。色調は表面はにぶい黄褐色（10YR5/4）、裏面は黒褐色（10YR3/2）である。

11FII001は表裏とも条痕文を施す。器面は横位の条痕を左から右へ施文し、筋肋は5条が1単位。10DIII005と同一個体となる可能性がある。胎土には纖維を多量に含むが、砂粒は少ない。焼成は良好で、表面はにぶい黄褐色（10YR5/3）、裏面は黒褐色（10YR3/2）を呈する。

10DIII009は表裏とも貝殻条痕文を施文する。胎土には少量の細砂粒と多量の纖維を混入する。焼成はやや甘いが、比較的良好。表面はにぶい黄褐色（10YR5/3）、裏面にもにぶい黄褐色（10YR4/3）を呈する。

13FII006は表面に弱い貝殻条痕文を施文する。条痕の筋肋はあまり明瞭ではなく、裏面は

無文。胎土はやや砂目で、多量の纖維を含む。焼成はやや甘く、表面は灰黄褐色（10YR5/2）で裏面は黒褐色（10YR3/2）を呈する。

11GII002は表裏とも貝殻条痕文を施す。表面は5条の条肋を1単位とし、裏面は斜位、縦位の条痕を明瞭に残す。焼成はやや甘いが比較的良好。色調は表面がにぶい黄褐色（10YR5/4）、裏面は暗褐色（10YR3/3）である。

10EII001は表裏とも条痕文を施すが、裏面は弱く拓影に示していない。表面は横位の貝殻条痕文を施し、裏面は縦位施文と思われる。胎土には纖維を多量に含有するが、小礫は少ない。焼成はやや甘く、表面はにぶい黄褐色（10YR5/4）、裏面は黒褐色（10YR3/2）を呈する。

5CII008は3片の接合片である。器壁9~10mmと比較的薄い胴部片で、表面には横位の条痕文を施す。裏面は無文のままとしている。胎土は径2~3mmの砂粒を多く含む。焼成はやや甘く、表面は褐色（7.5YR4/6）、裏面は黄褐色（10YR5/6）を呈する。

5CII006は器表面にのみ貝殻条痕文を施す。条痕の条肋の1単位は3条。裏面は不明瞭。纖維を多量に混入するため、裏面には纖維の炭化による凹みが生じている。胎土には砂粒を比較的多く含有し、焼成はやや甘く、表面は明褐色（7.5YR5/6）、裏面は黒褐色（7.5YR3/1）を呈する。

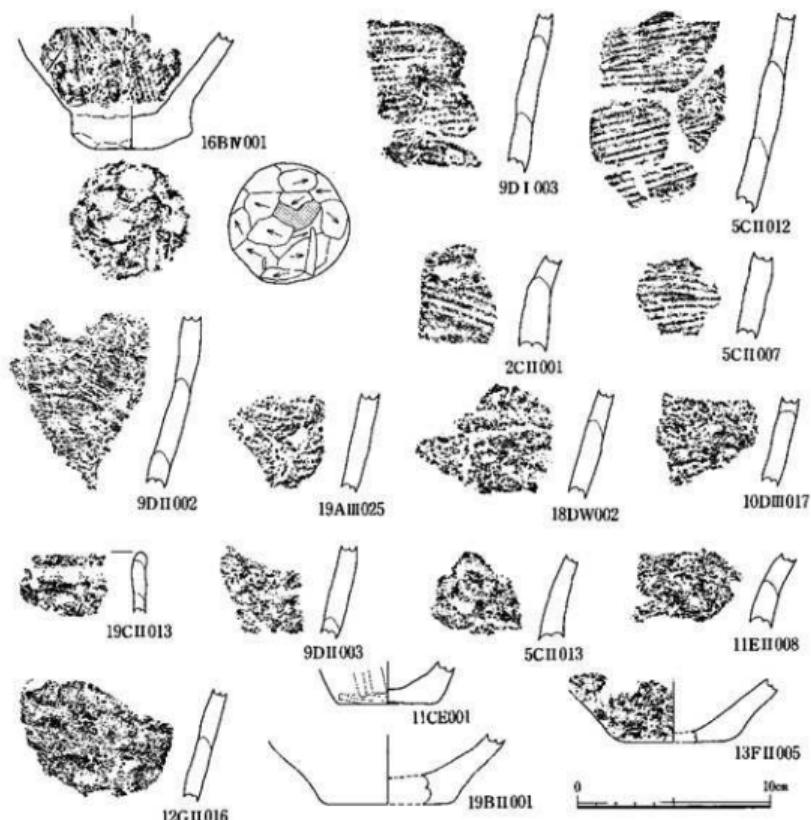
5CII017は器表面には条肋の発達した二枚貝を用いた条痕文を施すが、裏面は無文のままで条痕調整が行われた形跡は認められない。胎土には纖維を混入し、径2mm程の小礫を多く含む。焼成はやや甘いが比較的良好で、表面は明褐色（7.5YR5/6）、裏面は黒褐色（7.5YR3/2）を呈する。

（底部片）

器表面に条痕文を施す土器の底部としては、3点が検出されている。2点が平底で、1点は乳頭状に近い底部である。

11GII001は底径12.26cmの底部で、平底となる。底部中央を約18mmに肥厚させ、周辺をやや上げ底とし、上げ底部の器厚も約12mmと薄くなる。条痕文を外表面、内面ともに施す。外表面は横位の条痕文を施した後、ナデによって消している。底は横に条痕調整を行った後、外周に沿って円形に条痕文を施す。内面は周に沿って条痕文を施すが、中心に向っては条痕ではなく指によってなであげている。胎土には纖維を多量に含み、径3mm程の砂粒を若干含む。焼成は比較的良好で、表面はにぶい黄褐色（10YR5/3）、内面もにぶい黄褐色（10YR5/4）を呈する。

10DIII002は底径10.26cmの平底。底はほぼフラットで、11GII001と違い部分上げ底とはならない。底には貝殻を用いた条痕調整を施す。外表面は横位の貝殻条痕文を器面全体に施す。内



第23図 包含層出土の土器(5) 第I群

面は横位、斜位の条痕文を明瞭に残している。繊維を多量に含むが、小砾の混入は少ない。底器厚は約14mm。焼成はやや甘いが比較的良好で、表面はにぶい黄橙色(10YR6/4)、内面は黒褐色(10YR3/2)を呈する。

16BN001は深鉢形土器の底部。底部に接する胴部片の器厚は9~10mmで、底径6.4cm、厚さ18mm、内面径1.7cmを計る。胴部には左上から右下の貝殻条痕文を地文として施す。条肋は6条で1単位となる。条痕文を底付近まで施文した後、幅7mm程のヘラによって上から下へナデを施し、条痕を消す。ヘラナデは繰り返しにより、丹念に行われている。底は一度平底として整形された後、中央部(図のトーンの部分)を残してヘラでケズリを入れ、フラットな底から

丸みを帯びた底へと整形のし直しを行っている。ケズリの方向は時計回りが多い。なお、植物の茎状の圧痕が一部に認められるが、判然としない。内面は条痕調整が行われた形跡はほとんど認められない。胎土には若干の纖維を含むが多くはない。小礫、砂粒を非常に多く含み、金雲母も混入するなど、他とは異なる様相を呈している。胴部以上の構成は不明だが、若干の纖維を混入することより、ここに含めた。焼成はやや甘く、表面は黄褐色(10YR5/8)、内面はぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

16BW001は胴部、口縁部が不明であるが、平底から乳頭状底部へ移行期にあたる資料であると考えられる。また纖維の混入量が減少していることと合わせて、他の2点の底部資料に比べて後出の要素となると考えられる。

b種) 外表面は無文で、内面のみに貝殻による条痕調整が認められるもの。

9D I 003は器厚9~10mmの胴部片。内面に条痕文が認められるが、外表面は調整痕は認められず無文。裏面の条痕文は横位で、左から右へ施される。胎土には多量の纖維を含み、細砂粒をやや多く含む砂目の胎土である。焼成はやや甘く、色調は表面が褐色(10YR4/4)~明黄褐色(10YR6/6)、裏面は褐色(10YR4/4)を呈する。

5CII012は4片からなる接合片である。器厚9~11mmで、内面に明瞭な条痕文が施されるが、外表面は無文。内面の条痕は、条肋の7条以上が1単位となる広いものである。条肋のよく発達した二枚貝を用いている。胎土には纖維を多量に混入し、径8mm程の小礫も含む、やや砂目の胎土である。色調は表面が黄褐色(10YR5/8)、裏面は黒褐色(10YR3/2)である。

2CII001は器壁15mmの胴部片。器厚からみて底部に近い。表面は無文であるが、粘土紐の接合部には指による押さえの痕跡がある。内面は条肋の4条を1単位とする。胎土には纖維を含み、砂粒を混入する。焼成は比較的良好で、表面は褐色(10YR4/6)~黄褐色(10YR5/8)、裏面は褐色(10YR4/4)を呈する。

5CII007は外表面は無文であるが、指腹による調整痕を残し、裏面には横位の貝殻条痕文を施す。条肋の1単位は4条以上で、よく条肋の発達した二枚貝を用いている。胎土には径1mmほどの砂粒の他に径5mm程の小礫を少量含む。焼成はやや甘く、表面は黄褐色(10YR5/8)、裏面は黒褐色(10YR3/1)を呈する。

c種) 繊維束などを用いた、所謂纖維条痕文を施すもの。

早期後半の纖維土器の胴部はほとんどが貝殻条痕文を有するが、若干ではあるが貝殻以外の工具を用いて条痕施文した土器が認められる。

9DII002は器厚9~11mmのやや薄い器壁を持つ胴部片。器表面に纖維束によると思われる纖維条痕を施す。横位を基調としながら斜位の条痕も入れる。胎土に多くの纖維を含むが他と比較してやや少なめである。また、径4mmの比較的大きい小礫を混入する。焼成はやや甘く、表面は明褐色(7.5YR5/6)、裏面は黒褐色(10YR3/2)を呈する。

19AIII025は8~9mmのやや薄い器壁を持つ胴部片。器表面は荒れているが、纖維束によると思われる斜位の条痕文を施す。胎土への砂粒の混入は比較的少ない。焼成はやや甘く、表面が赤褐色(5YR4/8)、裏面は黄褐色(10YR5/6)を呈する。

6類 (第23図、図版16)

無文系土器を一括してこれに含める。胎土に纖維を含むが、混入の多少により次の2種に分けられる。

a種) 胎土中に纖維を多量に含むもの。

(胴部片)

18DW002は器厚10~11mmの胴部片。表裏共に無文。胎土に多量の纖維を混入し、砂粒を若干含む。焼成はやや甘く、表面は明褐色(7.5YR5/8)、裏面は黒褐色(7.5YR3/1)である。

10DIII017は器厚約10mmの胴部片。表裏ともに無文で、胎土に多量の纖維を混入する。他の纖維を含む無文土器が明褐色系の色調に対して、表裏面ともににふい黄橙色(10YR6/4)を呈する。焼成はやや甘いが、比較的良好。

5CII013は器厚7~13mmの胴部片。器厚から判断して底部近い。表裏ともに無文で、ヨコナデ状の調整が認められる。胎土は纖維と細砂粒を多く含む。焼成はやや甘いが、比較的良好である。色調は表面が明褐色(7.5YR5/6)、裏面が黒褐色(7.5YR3/1)を呈する。

11EII008は器壁9~12mmの胴部片。器厚から見て、底部は近い。表裏面とも無文である。胎土に纖維を多く含むが、他の纖維土器と異なり砂粒が多く、鉄分を含む赤褐色粒が見られる。表面が明黄褐色(10YR6/6)、裏面は灰黄褐色(10YR6/2)~褐灰色(10YR5/1)を呈する。

9DII003は器壁10mmの胴部片。表裏ともに無文で、胎土に多量の纖維を混入する。細砂粒を若干含み、焼成はかなり甘い。表面は明褐色(7.5YR5/8)、裏面は暗褐色(10YR3/3)である。

(底部片)

19BII001は底径約7cmの平底。外表面に若干横位の条痕文が施文された形跡が見られるが、

遺存状態が悪く、詳細は不明。内面には調整痕は見られない。胎土に纖維を比較的多く含む他、径3mm程の小礫と径2mm以下の砂粒を非常に多く含有する。表面は明褐色(7.5YR5/8)、内面は黒褐色(7.5YR3/1)を呈する。

11CE001は底径約5cmの平底で、底部の稜を設げずにそのまま立ち上がる。中央部は器厚約5mmと非常に薄くなっている。これは底部中央の外側から内側に向って押圧を加え、若干の上げ底としたためと考えられる。外面はヘラによって縦位のナデを施し、底面近くはヨコナデ。内面は無文である。胎土に纖維を多く含有し、砂粒も多量に含む。焼成は普通で、表面は明褐色(7.5YR5/8)、内面は褐色(10YR4/1)である。

b種) 胎土中に纖維を少量含む、砂目の胎土のもの。

19CHI013はほぼ直立する口縁部を有する器形。外表面に口縁直下に凹線状の凹部を設けるが、意図的に凹線文を配したとは見えない。外表面は強く右から左へナデ。無文系土器であるが、胎土に若干の纖維を含むため、これに含めた。胎土には若干の纖維を含む、砂目の胎土を有する。色調は表面がぶい黄褐色(10YR4/3)～黒色(10YR2/1)、裏面は黒褐色(10YR3/2)を呈する。

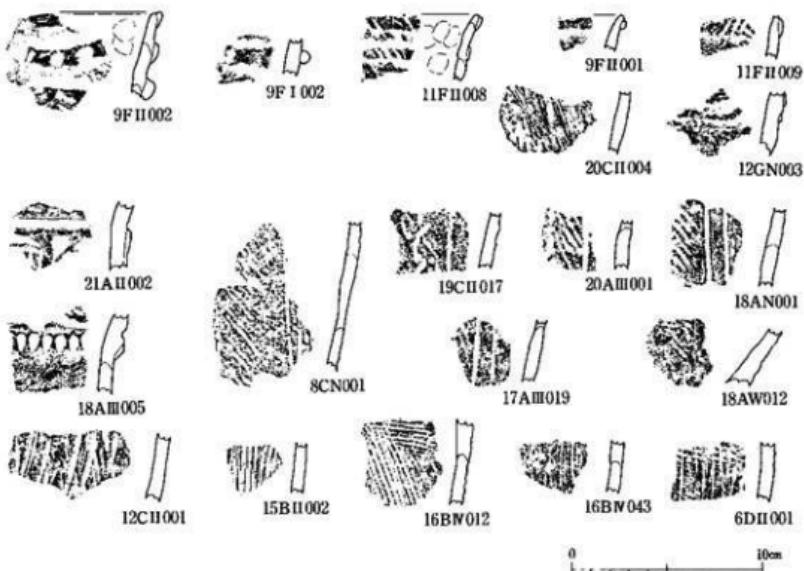
12GII016は器厚8～9mmの比較的薄い器壁を有する胴部片。表裏とも無文であるが、内面には横位の調整痕らしき跡が残る。胎土に纖維を混入するが、その割合は他の纖維土器と比べて少なく、小礫、砂粒を多く含む砂目の胎土である。また、金雲母の小片を多量に含むのが特徴である。焼成はやや甘く、表面は褐色(7.5YR4/4)、裏面も褐色(7.5YR4/6)を呈する。

13FII005は底径約6cmの平底となる。器表面、内面ともに無文である。胎土への纖維の混入量は少なく、小礫と砂粒の含有が非常に多い。また、金雲母を少量含む。焼成はやや甘く、表面は黄褐色(10YR5/6)～黒褐色(10YR3/1)、内面は黄褐色(10YR5/8)を呈する。

第Ⅰ群土器は縄文時代早期後半から早期末にかけての条痕文土器である。本群のうち1類～3類は基本的には茅山下層式(赤星・岡本1957)の範疇でとらえうるものである。4類の中で12GII002は茅山下層式から柏畠式への移行期に位置付けられる、八ツ崎Ⅰ式(増子1983)に類似する。第Ⅰ群土器の詳細については第5章で検討したい。

第Ⅱ群土器 縄文時代早期末から前期初頭にかけての土器

縄文時代早期末から前期初頭にかけてと考えられる、器壁の薄い土器の口縁部に粘土紐を貼りつけた土器をこれに含める。粘土紐の貼り付けの種類によって2類に分類する。



第24図 包含層出土の土器(6) 第II、III群

1類 (第24図、図版16)

やや高く貼り付けた粘土紐の上から、指頭による押圧を施す一群。

9FII002は外反する深鉢形土器の口縁部。器厚5~8mmの非常に薄い器壁を持ち、端部を丸くおさめる。器面は表面、裏面とも指による押圧を加え、表裏面ともにボコボコした感じを残す。口唇部に接して、ほぼ等間隔に3条の粘土紐を貼り付ける。最上段と3段目は平行に貼り付け、2段目は曲線状に貼り付ける。最上段の粘土紐は幅9mm、高さ4mmで、指によるナデを施し、低く貼り付ける。2段目は1段目とほぼ同じ粘土紐を貼り付けた後、指頭により等間隔に押圧を加え、指頭圧痕とする(図版25-7)。1段目との違いは、同時に裏面からも押圧を加えていることで、これによって降帯の高さは1段目よりもはるかに高くなっている。粘土紐間にあたる部分にナデを施した後、粘土紐を貼り付けている。胎土には繊維の混入はほとんど見ら

れず、径2mmの砂粒を多く含む。金雲母の小片も若干含有する。焼成は良好で、色調は表裏とも黄褐色(10YR5/8)を呈する。

9F1002は口縁部近くの小片。器厚6~7mmの薄い器壁を持ち、粘土紐の貼り付けを有する。小片で磨耗が著しく、調整痕は不明。粘土紐は幅7mm、高さ6mmで比較的高く貼り付け、その上から指による押圧を加える。胎土には径4mmの小砾を若干混入し、砂粒の含有も比較的多い。金雲母も若干含むが、纖維はほとんど認められない。焼成はやや甘く、色調は表面は黄褐色(10YR5/8)、裏面は明褐色(7.5YR5/8)である。

2類(第24図、図版16)

低い粘土紐を貼り付けた後に、その上から斜行する条痕を施文する一群。

11FII008は外反する深鉢形土器の口縁部。器厚4~5mmと、極めて薄い器壁を有し、表裏面とも指で押圧を加え、ボコボコとした感じを与える。口唇部に接して1条、さらにその下に1条の粘土紐を貼り付ける。粘土紐の幅は約8mm、高さは約2mmと低く、押しつぶしたように貼り付けられている。その上から左上より右下へ条痕文を押し引く。条痕の1条の幅は約2mm。2段目の粘土紐を貼り付けた後に、上から押さえられるため、内面にやや突き出た跡が残る(図版25-8)。胎土には金雲母の小片を多く含むが、砂粒は多くはない。また、纖維は含まない。焼成は比較的良好で、表裏面ともににぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

11FII009は器厚5mmの薄い器壁に低い粘土紐を貼り付ける。粘土紐の幅は9~11mmで、高さは約2mmと低い。その上に右上から左下方向へ条痕文を押し引く。裏面はボコボコした手焼きせんべいに似る。胎土は細砂粒を含むが、雲母は見られない。焼成はやや甘く、表面は明褐色(7.5YR5/6)、裏面は明褐色(7.5YR5/8)を呈する。

9FII001は外反する深鉢形土器の口縁部の小片。器壁は5~6mmと薄く、口唇部に接して低い粘土紐を貼り付ける。粘土紐の幅は5~7mm、高さは約2mmと低い。残存片には見られないが、おそらく条痕が押し引きされるものと思われる。胎土は細砂粒を多く含み、纖維の混入は見られない。焼成はやや甘く、表面は褐色(10YR4/4)、裏面は明褐色(7.5YR5/6)を呈する。

20CH004は器厚5~7mmの薄い器壁を有する胴部片。表裏面ともに指による押圧が見られ、ボコボコした印象を受ける。表面には条痕文が縦位に施されているが、工具については不明である。表裏ともにスス状炭化物が付着している。胎土は径2mm程の砂粒を若干含むが、よく精選されている。纖維の含有が若干見られる。焼成は比較的良好で、色調は表面が褐色(10YR4/4)、裏面は黒褐色(10YR3/1)を呈する。

12GN003は器厚6~8mmの器壁に細い粘土紐を貼り付けて文様を表現する。器壁は裏からの指の押圧によってボコボコした感じとなる。貼り付けに用いられた粘土紐は、幅4mm、高さ2mmで2条めぐらせる。貼り付けた後、表面から指で押さえるため、器壁がくぼみ、その凹みに粘土紐が埋もれるように低く貼り付けられている。細砂粒を多く含む砂目の胎土で、若干の繊維を含む。焼成はやや甘く、表面は明褐色(7.5YR5/8)~黒褐色(7.5YR3/1)、裏面は明褐色(7.5YR5/8)を呈する。

2類は早期末から前期初頭の薄い器壁を有する東海系土器で、所謂オセンベ土器と呼ばれる、塙屋式、木島式系列の土器である。1類も同時期の所産であると考えられる。

第三群土器 繩文時代中期の土器

縩文時代中期に属すると考えられる土器をこれに一括する。量的には極少量であり、時期もさまざまであるが、文様と施文方法によって4類に分類する。

1類（第24図、図版17）

粘土紐の貼り付けと竹管の押し引きによって文様帯を構成するもの。1片のみである。

21AII002はやや外反する深鉢形土器の副部片である。口縁部近くかと思われる。器厚7~9mmの器壁をもち、器表面に半截竹管状工具により竹管文を施文する。まず上方に半截竹管状工具により幅5mmの沈線を横に1条入れる。その下方に粘土紐の貼り付けとその上方から同様工具によって押し引きにより竹管文を施文し、方形区画を施す。沈線施文工具は幅5mmの竹管、隆起線は幅6~7mmとやや太い竹管を用いている。施文前に表面と裏面にナデを施している。胎土は径2mm程の砂粒を非常に多く混入し、雲母も若干含む。色調は表面は明褐色(7.5YR5/6)、裏面は暗褐色(10YR3/3)である。焼成は良好。

2類（第24図、図版17）

口縁部に区画文様帯を持ち、頸部に刺突列を有するもの。1片のみである。

18AIII005は沈線区画の口縁部文様帯と頸部刺突列を有する、深鉢形土器片。口縁部沈線は幅4mmで、円棒状工具によって施文する。頸部刺突列は幅5.5mmで、同工具によって刺突する。

器表面にはヨコナデを施す。口縁部沈線区画内は、縄文を充填するものと思われる。胎土には砂粒を多量に含むが、雲母は少ない。焼成は比較的良好で、表面が橙色（7.5YR6.5/6）、裏面はによい黄橙色（10YR6/4）を呈する。

3類（第24図、図版17）

沈線区画された胴部文様帯を有する一群。沈線区画内に充填する文様の種別によって、3種に細分する。

a種) 沈線区画された文様帯に、無節斜縄文を充填するもの。1片のみである。

8CN001は器厚5~7mmとやや薄手の深鉢形土器の胴部で、やや外に開く。縦方向に2mm前後の浅い沈線を3条入れて、これらの沈線によって区画された中に無節の斜縄文を充填する。施文原体は長さ3.5cm程と思われる。全体的に粗雑な作りの土器である。一部にススが付着する。胎土は径1mm前後の砂粒をやや多く含み、中でも石英が目立つ。焼成はやや甘く、色調は表面が明褐色（7.5YR5/6）、裏面はによい黄橙色（10YR7/4）である。

b種) 沈線区画された文様帯に、結節縄文を充填するもの。

19CII017は器厚6mm前後のやや薄手の胴部片。幅3mm程の沈線で区画を入れる。沈線はヘラ状工具によるものと思われ、沈線区画内には結節縄文を施す。施文原体の大きさは2.5cm程のものと思われる。胎土には径2mmの砂粒をやや多く含む。黒雲母を微量、長石、石英をやや多く含む。焼成は普通で、表裏面ともに明黄褐色（10YR7/6）を呈する。

18AN001は器厚5~6mmで、やや薄手の深鉢形土器の胴部。ヘラ状の工具で、幅3mm前後の沈線を縦に入れて区画した後に、斜位の結節縄文を施す。沈線の深さは0.5mmと浅いが、比較的明瞭に施文する。施文原体は長さ2cm程と思われる。胎土は径2mm程の小礫を少量含み、径1mm程の粗砂をやや多く含むが、長石、石英が主で、雲母は少ない。焼成は普通で、色調は表面がによい橙色（7.5YR7/4）、裏面が褐灰色（10YR5/1）である。

20AIII001は、器厚5mm程のやや薄手の深鉢形土器の胴部と思われる小片である。幅4mmの浅い沈線を縦に入れて区画した部分に、斜位の結節縄文を施す。施文原体の長さは3cm程と思われ、沈線の施文工具は先端が尖っている。胎土は径2mm程の礫を少量含む。長石は見られるが、石英、雲母は認められない。焼成は比較的良好で、表面は浅黄褐色（10YR8/4）、裏面は灰黄褐色（10YR6/2）を呈する。

c種) 沈線区画された文様帶に、斜状沈線、葉脈状文を充填するもの。

18AW012は器厚7~13mmとやや厚手の深鉢形土器の副部片で、底部に近い。幅1mm前後の細い縦位の沈線で区画し、区画内に細い斜状沈線を施す。葉脈状文を構成するかどうかは、断定できない。胎土には径1mm前後の粗砂を若干含み、長石と石英の小片に加えて、金雲母の細片を多く含む。焼成はあまり良くなく、表面は浅黄橙色(10YR8/4)~黄橙色(10YR8/6)、裏面は灰白色(2.5Y8/2)~浅黄橙色(7.5YR8/6)を呈する。

17AIII019は器厚6mm前後のやや薄手の深鉢形土器片。幅2~4mmの2本の沈線で縦位に区画し、斜位の沈線を施す葉脈状文になる可能性が高い。胎土は粗砂をやや多く含み、焼成は普通である。色調は表面が明黄褐色(10YR7/6)、裏面はにぶい黄橙色(10YR6/4)である。

4類 (第24図、図版17)

副部に継がき条線風の文様を施す一群。小片ばかりであるが、5点を図示した。

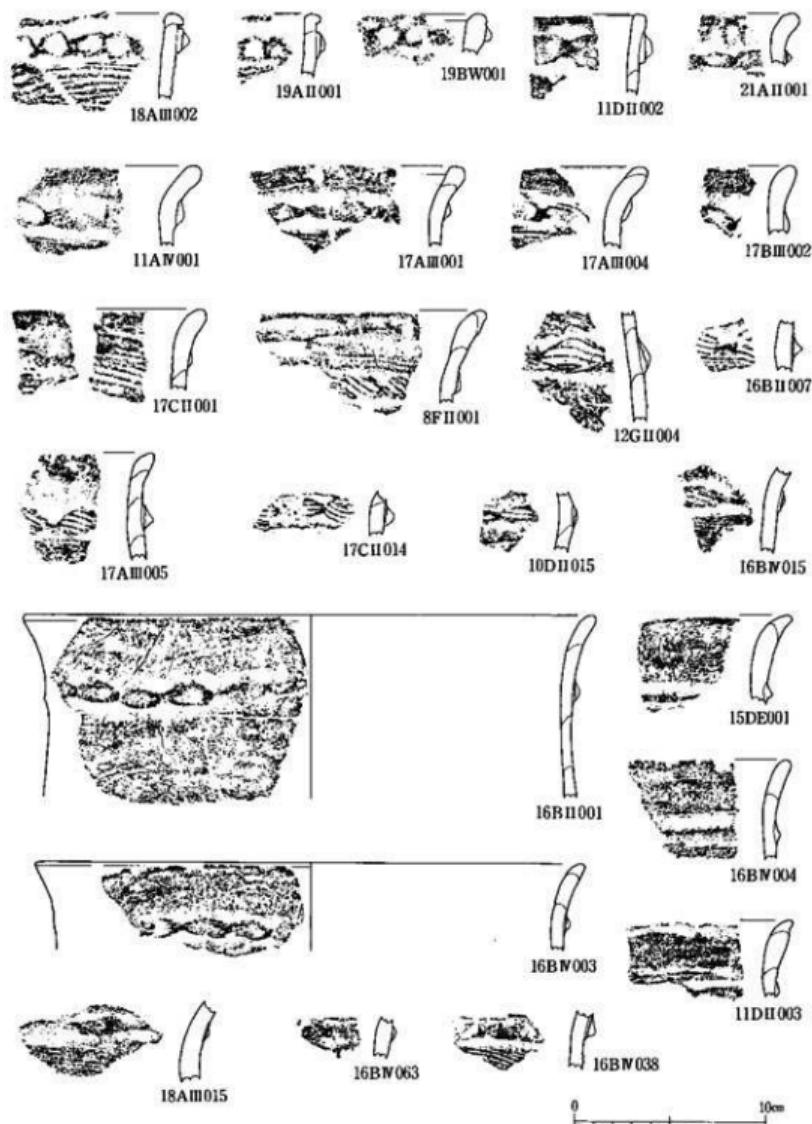
12CII001は器壁7mmの胴部片。器表面に縦位に施文する。ただし、他の土器片とは異なり緻密には条線とはいえないが、一応ここに含めた。胎土には小礫の他、金雲母を少量含む。焼成はやや青く、表面は明赤褐色(5YR5/6)、裏面も同色(5YR5/8)を呈する。

16BIV012は器厚8mmをはかり、櫛状工具により条線を施文する。施文順位は縦→横→縦となる。胎土には小礫の他、砂粒を多量に含み、金雲母も含有する。焼成は普通で、色調は表面が黒色(10YR2/1)、裏面はにぶい褐色(7.5YR5/4)である。

15BII002は器底6mm前後の比較的薄い小片。表面は継がき条線風の文様を施文する。胎土は径2mm以下の砂粒を多数含む。焼成は普通で、表面は黒褐色(10YR3/1)、裏面は黒褐色(7.5YR3/3)を呈する。

16BIV043は器厚5mmの薄い器壁で、6DII001は器厚約7mmである。ともに櫛状工具により縦位の条線が施文されるが、後者には横位の条線が加わる。ともに砂粒を多く混入する。表面は黒褐色(10YR3/1~3/2)、裏面は褐色~黒褐色(10YR4/4~3/1)を呈する。

以上、第3群土器は中期の後半を中心とする時期であろうと考えられるが、小片ばかりで詳細はよくつかめない。



第25図 包含層出土の土器(7) 第IV群

第IV群土器 繩文時代晚期後半以降の土器

縄文時代晚期後半以降の、突帯文・条痕文系土器をこれに含める。いくつかの時期に分けられる可能性があるが、小片が多いためこれに一括する。突帯の貼り付け部位と突帯の種類、調整の種類によって、次の7類に分類する。

1類（第25図、図版17～18）

口縁部に貼り付け突帯を有する土器のうち、深鉢形土器、壺形土器をこれに含める。突帯の貼り付け部位及び突帯の種類により、次の4種に分類する。

a種）ほぼ直立する口縁の直下に、口唇部に接する突帯を有するもの。突帯は指による押圧突帯を基本とする。

18AIII002はほぼ直立する深鉢形土器、もしくは壺形土器の口縁部。口縁部は一度丸くおさめた上で、さらに粘土紐を足して外側へ折り返す。口唇部には所々に指による押圧を加えている。このため、口唇部がつぶれたような感じとなっている。口縁部の折り返し直下に、それと接するように突帯を貼り付け、その上から指腹によって幅約14mmの押圧を加える。突帯の最も突出した部分の高さは約8mmである。突帯の下の器表面には横位の貝殻条痕文を施文する。内面は無文。胎土には径2～3mmの小礫を多く含み、焼成も甘い。器表面は明赤褐色（2.5YR5/8～5YR5/8）、裏面も明赤褐色（5YR5/8）を呈する。

19AI001はほぼ直立する口縁部で、器厚は約6mmと比較的薄い。口縁端部を外側へ折り返し、直下に突帯を貼り付ける。突帯の上からは指頭によって幅約10mmの押圧を加える。突帯の最も突出した部分の高さは約5mmである。突帯下の器面には、横位の条痕文が施文される様子がうかがえる。裏面は無文。胎土には径2～4mmの小礫を非常に多く混入するが、茎母は認められない。焼成は甘く、表面ともに明赤褐色（2.5YR5/8）を呈する。

19BW001はほぼ直立する口縁部。器厚は約9mmで、端部は丸くおさめる。端面を外に向って折り返し、その直下に貼り付けによる突帯をおく。突帯には指頭により幅約11mmの押圧を加える。突帯の最も突出した部分の高さは、約4mmと比較的低い。胎土は径2mm以下の砂粒を多量に含む。焼成は甘く、表面は明赤褐色（5YR5/6）、裏面は橙色（7.5YR6/6）を呈する。

これらは下開田村平遺跡（宇野・佐野ほか1993）のB1群土器の中に類例を見い出すことができる。突帯文・条痕文系土器の中でも条痕文土器、櫻玉式の範疇に属すると考えられるが、

水神平式にまで下がる可能性もある。

b種) ほぼ直立、もしくはやや外反する口縁部の直下に突帯を有するもの。突帯には指、その他の工具によって押圧を加える。器形と押圧の種類によって次の3種に細分する。

b1種) 直立する口縁直下に指による押圧突帯をおくもの。

11D II 002は器壁6mmの比較的薄い器厚を持つ口縁部片。ほぼ直立する口縁で、口縁部端面は丁寧にヘラナデを施し、端部直下に突帯を貼り付ける。突帯の幅は13mmで、指腹による押圧を加える。押圧は左から右へなでつけるように加える。押圧を加えた部分では、突帯の幅は19mmに広がっている。貼り付けた突帯は低いため、突帯の上側ではほとんど器壁と区別できない。下は約3mmの段差となり、最も突出した部分では約8mmの高さをはかる。器表面は突帯下に指による押さえの痕跡があり、他は丁寧にヘラナデを施す。内面は条痕が若干認められるが、ナデにより磨り消す。胎土は細砂粒を含有するのみで、焼成は比較的良好。表裏面ともにふい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

b2種) 外反する口縁直下に指による押圧突帯をおくもの。突帯は貼り付けによるものを基本とするが、非常に低い。

11A IV 001は外反する深鉢形土器、もしくは甕形土器の口縁部。口縁端部は器厚約10mmとやや肥厚させ、ナデにより丁寧に整形する。口縁端部の直下に低い突帯を貼り付ける。突帯の上から指腹で強くなでながら押圧を加える。押圧は内面にまで突き出るように強く押しつけ、そのため内面が盛り上がっている。突帯下には横位の条痕が見られる。突帯をはさんで上下は強く右から左へナデ。裏面にもヨコナデを施し、丁寧な調整を加えている。胎土には径2~3mmの小礫を非常に多く含み、金雲母も若干含有する。焼成は比較的良好で、色調は表面が明赤褐色(5YR5/6)、裏面は暗赤褐色(5YR3/3)である。

21A II 001は外反する口縁部で、端部の器厚は約10mmとやや肥厚させる。突帯は口縁端部直下に貼り付け、その後に指による押圧を加える。突帯の突出部の高さは約4mm。さらに端部から突帯までの間を指により縦位にナデ。非常に浅いが、円線に似た効果を持たせている。胎土には径3mm程の砂粒を多量に含む。焼成は甘く、もろい感じを受ける。色調は表面が明赤褐色(5YR5/6)、裏面は明褐色(7.5YR5/6)である。

17B III 002は外反する口縁部で、端部はやや肥厚させる。突帯は口縁直下に貼り付けるが、非常に低い。その後に指による押圧を加える。胎土には砂粒に混じって金雲母の細片を含む。

焼成はやや甘く、色調は表面が赤褐色（5YR4/8）、裏面は明赤褐色（5YR5/6）である。

b 3種) 外反する口縁直下に棒状工具、ヘラ状工具による突帯をおくもの。突帯は貼り付けによるものを基本とするが、非常に低い。

17AIII001は外反する口縁部。外表面には横位の条痕文を施した後、口縁直下に低く粘土を貼り付け、押圧を加える。押圧はヘラ状工具で加えるが、強く押圧するため内面が若干盛り上がりしている。押圧を加えた部分では突帯の高さは消滅するが、最も高い突起部でも高さは3mm程にすぎない。突帯の貼り付けの後は、ナデによって密着させている。口縁部内面には、幅6mmの浅い凹線を1条入れる。胎土には径3mm程の小礫が多く含まれる。焼成はやや甘く、表面は黄褐色（10YR5/6）、裏面は黄褐色（10YR5/8）を呈する。

17AIII004は外反する口縁部。口縁端部直下に極めて低い突帯を設けるが、突帯と呼べる程の高さを有しない。ヘラ状工具、または棒状工具によって左から右へ押圧を加えている。押圧を加えた部分には器壁との高低差はない。器表面には地文として条痕文を施し、その後にナデを施す。胎土には多量の砂粒と径4mm程の小礫を含む。色調は表面はにぶい黄褐色（10YR5/4）、裏面は黄褐色（10YR5/8）である。

17CII001は器壁約8mmで、口縁が外反する。やや肥厚させながら丸くおさめる口縁端部直下に突帯をおく。突帯は極めて低く、突帯と呼べる程の高さを持たない。突帯の上からヘラ状工具または棒状工具によって押圧しながら横へ押し引く。突帯の押圧を加えた部分では、器壁と高さは変わらず、最も高い突起部でも2mm程の高さを有するにすぎない。内面には貝殻条痕文をそのまま残し、口縁周辺は丹念にナデを施す。胎土は径3mm程の小礫を多量に含み、金雲母も含有する。表面は灰黄褐色（10YR4/2）、裏面は褐色（7.5YR4/3）を呈する。

c種) 外反する口縁部の端より無文帯をおいた上で突帯をおく一群。突帯の種類によって3種に細分する。

c 1種) 無文帯の下に二枚貝による押圧突帯をおくもの。口縁部が主であるが、その他の部位に二枚貝を用いた押圧突帯をおくものもこれに含める。

8FII001は外反する口縁部片。器厚7~8mmであるが、口縁部端はやや肥厚させる。端面より幅3cm程の無文帯をおいて、その下に突帯を貼り付ける。突帯には二枚貝の腹部によって太くべったりした押圧を施す。押圧の方向は斜め横で、左上から右下。無文帯の外表面には、指によるナデを施す。粘土紐の接合部が階段状となる。内面はヨコナデ。胎土には径2mm以下の

砂粒を多く混入するが、焼成は比較的良好。色調は表面が赤褐色（5YR4/8）、裏面は暗赤褐色（5YR3/4）である。

12GII004は器壁6mmの比較的薄い胴部片。部位は明確ではないが、やや内傾する器形として図示している。この場合、口縁部とはならない可能性があるが、二枚貝を用いた押圧突帯ということでこれに含めた。突帯は幅15mm、高さ約5mmで、断面三角形を呈する。この上から二枚貝で押圧を加え、太くべったりとした圧痕を残す。突帯の上部には横位の貝殻条痕文を施文する。突帯の下部にはヘラによるケズリを施す。ケズリの方向は右下から左上。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや甘い。色調は表面が黒褐色（10YR3/1）、裏面は明褐色（7.5YR5/6）である。

17AIII005は外反する口縁部片。端部は若干肥厚させながら外に開く。端部から幅約3cmの無文帯をおき、その下に突帯を貼り付ける。突帯は幅14mm、高さ5~6mmの断面三角形で、この上から二枚貝の胴部で押圧を加える。突帯の上下はナデによって調整する。突帯の上部には指頭を用いて押圧を加える。胎土には径3mm程の小礫を多数含む。焼成は普通で、表面は褐色（7.5YR4/3）、裏面も同色（7.5YR4/6）を呈する。

17CII014はほぼ直立する胴部から外反しながら外へ開く口縁部。端部は欠損しているが、残存状況から見て無文帯をおいて端部に至ると思われる。突帯は断面三角形状に貼り付け、その上から小ぶりの二枚貝を用いて押圧を加える。押圧は左から右へ横位に押し引く。突帯の押圧部分では器表面とほとんど高さは変わらないが、突起部では約5mmの高さを有する。胎土には径2~3mmの小礫を多数混入する。焼成は比較的良好で、色調は表面はにぶい赤褐色（5YR5/4）、裏面はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈するなど、他の第IV群土器と異なる様相を見せる。

16BII007は外反しながら開く口縁部近くの小片で、端部は欠損している。器厚は約7mmで、断面三角形を呈する突帯を貼り付けている。押圧と押圧の間は、人差し指と親指でつまみ上げたように見えるが、基本的には三角形の突帯を貼り付けた後に、上から二枚貝を押圧している。突帯下には条痕文を施文する。内面は無文。胎土には砂粒に金雲母が混じる。焼成は比較的良好で、表面は褐灰色（10YR4/1）、裏面はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。

10DII015は器厚7mmで器形は明確ではない。二枚貝で押圧を加えた貼り付け突帯を有するため、これに含めた。突帯は比較的狭い断面三角形を呈し、その上を二枚貝で押圧する。突帯の下は右から左へケズリ。胎土は砂粒を非常に多く含む。表裏面ともににぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。

16BN015は外反する口縁部近くの小片。端部は欠損している。突帯は断面三角形を呈し、その上から二枚貝による押圧を加える。地文は条痕文で、横位に施文する。胎土は径3mm程の砂粒を非常に多く含み、焼成は悪い。色調は表面がにぶい褐色（7.5YR5/4）、裏面が褐色

(10YR4/6) である。

c 2種) 無文帯の下に指による押圧突帯をおくもの。突帯は一応は貼り付けであるが、非常に低い。

16BII001は口縁径30.2cmの壺形土器もしくは深鉢形土器で、図上復元してある。外反する口縁部を有し、口縁端から無文帯をおき、その下の頸部のくびれ部に低くて粗略化した突帯をおく。器壁は口縁部付近を若干肥厚させる他はほとんど変化がなく、約5~6mmである。突帯は幅約12mmの低い粘土紐を、低い三角形の断面形状を呈するように貼り付ける。貼り付け位置は口縁に対して平行をそれほど意識せず、やや波状となるように見える。この突帯の上から左から右へ押圧を加え、押圧突帯とする。押圧部ではほとんど高さを持たず、器表面に接する。突帯をはさんで器表面にはナデ、裏面には斜位の条痕が見られるが、ナデによって消されている。胎土には径2mm以下の砂粒を多量に混入する。また、径3~4mmの小砾も見られる。金雲母の含有は少なく、白雲母、黒雲母が多い。焼成は普通で、表面が暗赤褐色(5YR3/3)~明赤褐色(5YR5/6)、裏面は明赤褐色(5YR5/8)~明褐色(7.5YR5/6)を呈する。

16BIV003は口縁径約29cmの壺形土器もしくは深鉢形土器で、図上復元してある。外反する口縁部の端から無文帯をおき、その下の頸部に、低く粗略化した突帯をおく。器厚は6~8mmではほぼ一定の厚さを保つ。突帯は幅10mmの粘土紐を三角形の断面形状を呈するように貼り付ける。貼り付け位置は口縁端部より約3cmの無文帯をおき、頸部に貼り付ける。突帯の上には指腹による押圧を施すが、その方向は右から左で、順次左へ移動しながら施文する。最も高い突起部で高さ約4mmをはかる。押圧を加えた部分では、器面と高さは変わらない。外表面、裏面ともにナデによる調整を行う。胎土は砂粒を多く含み、黒雲母も見られる。焼成は普通で、表面は黒褐色(10YR3/1)、裏面は褐色(7.5YR4/6)を呈する。

c 3種) 無文帯の下に素文突帯をおくもの。突帯の幅は狭く、高さは低い。

15DE001は外反するII縁部の下に約4cm弱の無文帯をおき、その下に貼り付けによる素文突帯をおく。器厚10mmほどの土器であるが、口縁端部に近づくにつれて肥厚させ、最も厚い部分で約11.5mmをはかる。端部は外反しながら、先端を尖らせておさめる。突帯は幅約10mmの粘土紐を貼り付け、断面形状三角形として、指によりつまみ上げながら整形する。高さは約4mmと低い。器表面、内面ともにヨコナデを丁寧に施す。胎土には径2mm程の砂粒を多く混入し、雲母の微細片も含む。焼成は比較的良好で、色調は表面は黒褐色(7.5YR3/2)、裏面は赤褐色(5YR4/8)である。

16BIV004は外反する口縁部で、端部から無文帶をおき、その下に貼り付けによる素文突帯を設ける。器厚は約6mmと薄いが、口縁端部に近づくにつれて若干厚くなる。突帯は幅11mmで粘土紐を貼り付け、断面を三角形とするが、高さは低い。器表面は突帯の上がナデ、下がケズリ、内面はヨコナデ。胎土は砂粒を多数含み、金雲母も認められる。焼成はやや甘く、色調は表面は黒褐色(10YR3/1)～灰黄褐色(10YR4/2)、裏面は褐色(7.5YR4/4)である。

11DII003は外反する口縁部片。端部より無文帶をおき、その下に貼り付けによる素文突帯をおく。外反するII縁端部下はやや肥厚させる。端部に1条、突帯の上に1条の不規則な浅い凹線を入れる。突帯の断面は半円状となる。器表面、内面ともに左から右へのナデが認められる。胎土は径3mm程の小礫の他に砂粒を多数含む。焼成はやや甘く、表面はにぶい褐色(7.5YR5/3)、裏面は褐灰色(10YR4/1)～にぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。

d種) その他の深鉢形土器をこれに含める。突帯を有するが、小片のため貼り付け部位が不明なものをこれに含める。

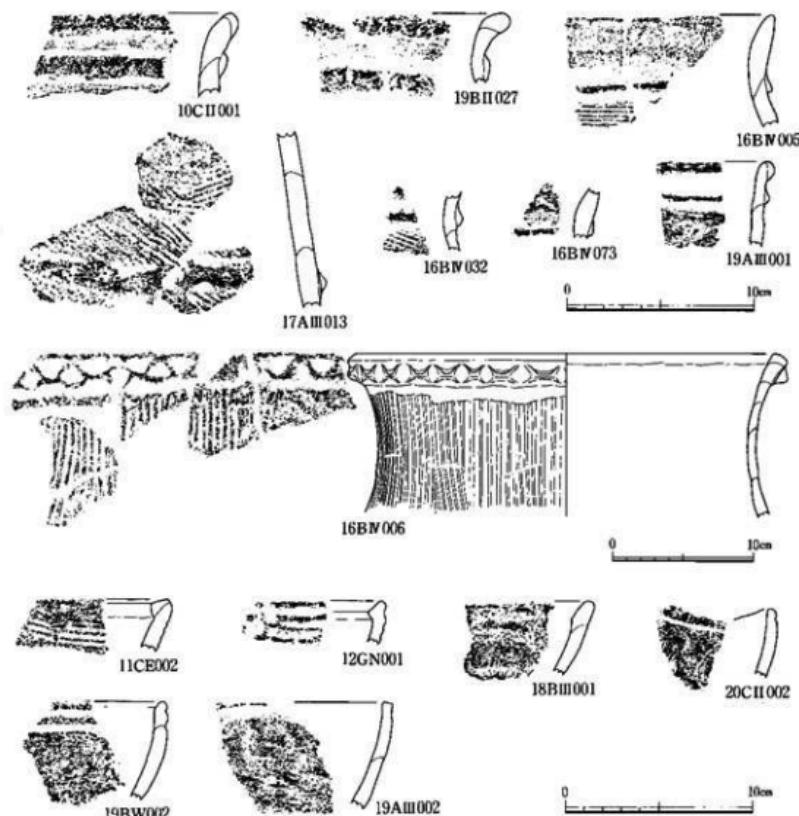
d1種) 指腹による押し引き状の突帯を有するもの。

18AIII015は口縁部が大きく外反する深鉢形土器と思われるが、突帯の貼り付け部位は不明。拓影でのセクションでは一応、頸部に突帯がめぐり、外反する器形として図示してある。突帯は非常に低く、粘土紐を貼り付けたものであるかどうかも不明。指腹による押圧を加えるが、押圧部では器表面から内側に向って凹みができ、裏面が盛り上がる。最も高い突起部でも高さ2～3mmにすぎず、突帯とは呼べない程度低い。器表面は条痕調整を施した後にナデ。横位の貝殻条痕文が磨り消されている。胎土は多数の砂粒に混じって径5mm程の小礫も混じる。焼成は普通で、表面はにぶい褐色(7.5YR5/4)、裏面は灰褐色(5YR5/2)を呈する。

16BIV063は小片であるため、器形は不詳。低い突帯を貼り付け、指による押圧を加えるが、押圧が強いため裏面が盛り上がっている。胎土には金雲母が若干含まれる。焼成は甘く、表面はにぶい黄褐色(10YR4/3)、裏面は明褐色(7.5YR5/6)を呈する。

本種の突帯を「押し引き状」と称したが、粘土紐の貼り付けは不明瞭で、つまみ出したような突起と称した方が正確かもしれない。あたかも突帯を明確に貼り付けたような擬突帯とする。磯山城遺跡(滋賀県米原町)B7群土器に類例が見られる(中井1986)。

d2種) 棒状工具による押し引き状の突帯を有するもの。



第26図 包含層出土の土器(8) 第IV群

16BN038は小片のため器形及び取り付け部位は不明。おそらくは口縁端面より無文帯をおいて突帯を付けるものと思われる。突帯は幅約15mmで、粘土紐を貼り付け、その上からおそらくは棒状工具による押圧が施される。押圧が強いため、内面が盛り上がる様子がうかがえる。突帯の突起部の最も高い所は約4mmをはかる。突帯の下は斜位の条痕文を施し、その後に突帯の貼り付け、棒状工具による押圧の順で整形する。内面はヨコナデ。胎土は多数の砂粒に混じって、径5mmの小砾も含む。焼成は普通で、表面は黒色(10YR2/1)、裏面は灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。

2類（第26図、図版18～19）

突帯を有する土器のうち、壺形土器をこれに含める。突帯の貼り付け部位及び突帯の種類により、次の3種に分類する。

a種) 肥厚させた口縁の直下に太く素文突帯をめぐらせ、胴部に押圧突帯をおくもの。

10CII001は口縁部が外反する壺形土器。肥厚させた口縁の直下に太く素文突帯をめぐらせる。口縁は粘土紐を外側に貼り付け、その上からナデを施し1段目の突帯を設ける。その下に貼り付けた粘土紐をヨコナデによって圧着させながら凹線文を入れ、その下に次の2段目の突帯を貼り付けによって形づくる。2段目の突帯は幅13mmで、高さは約5mm。全体としては低く、丸くおさめる。2段目の突帯の下の器面はヨコナデ。内面もヨコナデ。胎土は砂粒を多く含み、雲母の小片を比較的多く含む。焼成はやや甘く、色調は表面がにぶい黄橙色(10YR6/4)、裏面は褐灰色(10YR5/1)～暗灰黄色(2.5Y5/2)である。

19BII027は外反する口縁部を有する壺形土器。口縁端部に粘土を貼り付け、肥厚させてこれを1段目の素文突帯とする。その下にヨコナデによって設けた凹線を挟んで、2段目の素文突帯を貼り付けによって形づくる。2段目の突帯の幅は約15mm、高さは約3～5mmで、突帯の頂部は指によって押さえられている。胎土は砂粒を非常に多く含み、焼成も悪い。色調は表面が灰黄褐色(10YR6/2)、裏面がにぶい黄橙色(10YR6/3)である。

17AIII013は器厚約10mmの壺形土器片。肩部から口縁部にかけてはやや内傾し、この上におそらく口縁部直下の素文突帯がおかれると思われる。器表面に貝殻条痕文を施す。胴部と口縁部の境の肩の部分に突帯を貼り付ける。粘土紐の幅は約15mmで、高さは突起部で約5mmの、低くて粗略化した突帯を設ける。突帯には指腹による押圧を施し、押圧部では器壁と同じ高さとなる。おそらくはこの下の胴部にはケズリが用いられるものと考えられる。胎土は砂粒の他に径3mmの小礫を多量に混入し、金雲母も混じる。焼成は甘く、色調は表面が明黄褐色(10YR6/6)、裏面がにぶい黄褐色(10YR4/3)である。

本種には18Dグリッド埋設土器も含まれる。これらは所謂「伊勢タイプ変容壺」と称されるものである。徳山地内でもいづれ遺跡(岐阜県教育委員会1989)の第4群1類土器で、多数認められる。また揖斐川中流域では、池田町段原遺跡(谷際J地点)において土器館として用いられている。突帯文土器の新しい段階として把握できると考えられる。

b種) ほぼ直立、もしくは外反する口縁の下に素文突帯をおくもの。突帯の貼り付け部位に

は口縁直下と無文帯をおくものとがある。

16BN005は若干外反する口縁部を有する壺形土器と考えられる。口縁端面の直下に1条の不鮮明な浅い沈線を入れ、それにつづいて無文帯をおく。頸部には幅10~11mmの低い粘土紐を貼り付け、突帯とする。高さは約4mmで、下に垂れ下り気味に貼り付ける。突帯の下には櫛状工具と思われる施文工具で引かれた4条の平行沈線を引く。表面、裏面ともにナデを施す。胎土には径2mm以下の砂粒を非常に多く含み、径4mmの小礫も含む。また、金雲母も含有する。焼成は普通で、表面は黒色(7.5YR1.7/1)、裏面は褐色(7.5YR4/4)を呈する。16BN073も同一個体かと思われる。

16BN032は頸部に垂れ下り気味の素文突帯をおく小片。突帯は幅約10mmの粘土紐の貼り付けで、高さ約5mmを有する。突帯の下部には斜位の貝殻条痕文を施し、内面にはナデを施す。胎土は径2mm以下の砂粒を多く混入し、金雲母も含む。焼成は普通で表面は褐色(10YR4/4)~黒色(10YR2/1)、裏面は明褐色(7.5YR5/6)を呈する。

19AH001は若干外傾する口縁部を有する壺形土器と考えられるが、小片のため不明。器表面、内面ともに丹念にナデを施す精製土器。口縁端部は粘土紐を貼り付け、丸味を帯びた作りとする。その下に突帯を貼り付ける。幅は約8mm、高さは3mmで、断面は頂点のつぶれた三角形を呈する。突帯の下はヨコナデをへて、斜位の弱い条痕が見られる。内面にも条痕文の痕跡が認められるが、ヨコナデによって磨り消されている。胎土に砂粒を混入するが、比較的少ない。焼成は良好で、色調は表面が黒褐色(7.5YR3/1)、裏面は褐灰色(7.5YR4/1)である。

c種) ゆるやかに外反する口縁の直下に指頭押圧による突帯をおくもの。

本種は1個体のみである。

16BN006は壺形土器の口縁部で、5片の接合片である。残存部は口縁部のみであり、器形の図上推定復元を図示してあるが、残存片は口縁の1/4程である。外反しながら立ち上がる器形で、口縁部端面は外傾し、幅10mm程のフラットな面を持つ。口縁は頸部にくらべてやや厚い器壁を有する。端部直下に幅約18mmの幅広の粘土紐を貼り付ける。その上で粘土紐を人差し指と親指でつまみながら指頭と指腹を用いて押圧突帯を設ける。突起部は幅約25mm、高さ約9~10mmにも及ぶ程、高くしっかりと作られている。突帯の下は縦位のナデが施されているが、これは突帯を貼り付けた粘土の圧着を兼ねている。頸部から胴部にかけては二枚貝を用いた貝殻条痕文を縦位に明瞭に施文する。器厚は平均6~8mm。胎土は径3~4mmの小礫を非常に多く含む。焼成は甘く、胎土に含まれる砂粒が剥離する程である。色調は表面が黒褐色(10YR3/2)~にぶい黄褐色(10YR5/4)、裏面はにぶい黄褐色(10YR5/3)である。

本土器は条痕文土器、櫻王式に類似する資料であるが、同類資料のほとんどが頸部から胴部にかけて横位の条痕文を施文するのに対して、本資料のように縦位に施文する例はあまり見ない。

3類（第26図、図版19）

浅鉢形土器をこれに一括する。口縁の形状により2種に分類する。

a種) 平口縁で、内側に折り返しを有する口縁を持つもの。

11CE002は平口縁で、内側に折り返しを有する。折り返し部は断面三角形で、粘土紐を貼り付ける。口縁部は外傾し、傾きから見ておそらく浅鉢形土器と考えられる。外表面には横位の貝殻条痕文を施文し、4条の条肋が1単位となる。胎土に径2mm以上の小礫は皆無で、径1mm以下の砂粒を非常に多く含む。焼成はもろく、表裏面ともに明褐色(7.5YR5/8)を呈する。

12GN001は平口縁で、内側に折り返しを有する。内湾しながら立ち上がる口縁部から見て、浅鉢形土器と考えられる。外表面には幅約5mmの沈線を3条施文する。工具は器面の荒れのため不明。胎土は径1mm以下の砂粒を多く含み、小礫は含有しない。焼成は悪く、表面は黄褐色(10YR5/6)、裏面はにぶい黄褐色(10YR4/3)を呈する。

18BIII001は平口縁で、内湾しながら立ち上がる器形を有する。小片であるので器形は推定しがたいが、浅鉢形土器となる可能性がある。口縁は内側に段を設け、肥厚させる。器厚6mmに対してこの部分は9mmの厚さを有する。外表面、内面ともにヨコナデを施す。無文系浅鉢形土器かと思われる。胎土は径1mm以下の砂粒を非常に多く含む。焼成はやや甘く、表面は明黄褐色(10YR6/6)、裏面は明黄褐色(10YR7/6)を呈する。

b種) 平口縁、もしくはゆるやかな波状口縁で、外側に1~2条の沈線を施すもの。

20CHI002はやや内湾しながら立ち上がる口縁部片。器厚は約6mmと比較的薄い。ゆるやかな波状を呈する浅鉢形土器と思われるが、小片のため不詳。外表面の口縁端部直下に幅約2mm、深さ1mmの浅く細い沈線を1条施す。また、磨耗のため明確ではないが、口唇部に浅く不鮮明な刻目が認められる。外表面には丹念にナデが施される。胎土には砂粒を混入し、金雲母の他に黒雲母が多く認められる。焼成はやや甘く、表面はにぶい褐色(7.5YR5/4)、裏面はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。

19BW002はやや内湾しながら立ち上がる口縁部で、器壁は約7~8mm。平口縁の浅鉢形土

器と考えられる。外表面の口縁端部直下に、幅5mm、深さ1mmの沈線を2条施す。沈線下の器表面にはナデを施した形跡がある。外表面にはスス状炭化物が付着している。胎土には径2mm以下の砂粒を多く混入する。焼成は甘く、表面は褐灰色(10YR4/1)、裏面は黒褐色(10YR3/2)を呈する。

19AIII002は内湾気味に立ち上がる口縁部。器壁は約6~7mmで、平口縁の浅鉢形土器と考えられる。外表面の口縁端部に接して、幅7mmの凹線状の凹みを設け、端部は外へや張り出させている。外表面の胴部はヘラで右から左へナデを施している。胎土には径1mm程の長石粒を多数含み、黒雲母も若干含む。焼成は甘く、表面はにぶい黄褐色(10YR5/4)~黒褐色(10YR3/1)、裏面は黒褐色(10YR3/1)を呈する。

4類（第27~28図、図版20~21）

条痕文他を施文する小片を一括する。本類は第IV群の1~2類の胴部に相当するものも含まれるが、区別できないためこれに含める。

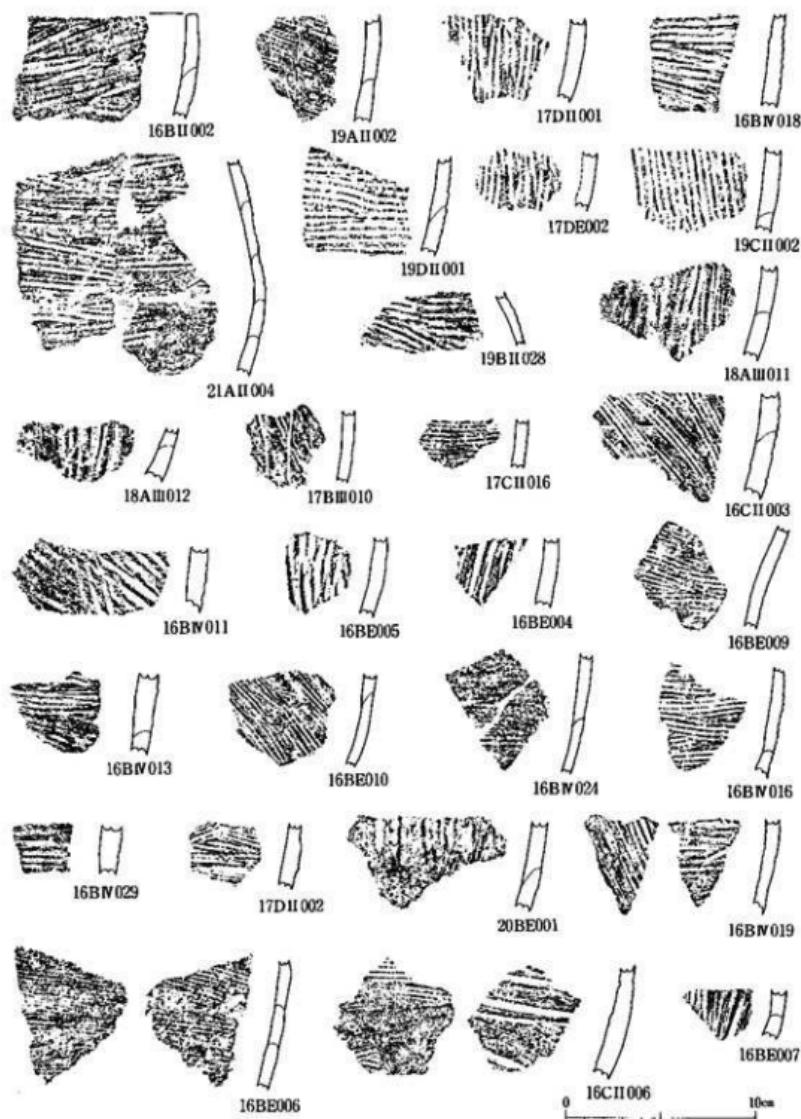
a種 器面に貝殻、他の工具による条痕文を施すもの。

16BII002は若干内湾気味に立ち上がる深鉢形土器の口縁部片。器表面全面に横位、斜位の貝殻条痕文を施文する。条肋のよく発達した二枚貝を用いている。内面には条痕は認められず、ナデにより整形している。外表面にスス状炭化物が付着する。胎土は多くの砂粒と径3~4mmの小砾を混入し、金雲母も認められる。色調は表面が褐色(7.5YR4/4)、裏面はにぶい橙色(7.5YR6/4)である。

19AI002は器厚7~9mmの胴部片。外表面に貝殻条痕文を施文する。条痕文は斜位に施文した後に、縱位の擦痕を残す。胎土への砂粒の含有は比較的少なく、精緻な感じを受ける。また、金雲母も含む。焼成は良好で、表面は褐色(7.5YR4/4)~黒色(7.5YR2/1)、裏面は灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。

17DII001は器厚8mm程の胴部片。外表面に縱位の条痕文を施文する。工具は半截竹管系かとも思われる。胎土には長石粒が多いが、金雲母も若干含む。焼成は比較的良好で、色調は表面ともに褐色(10YR4/4)である。

16BN018は器厚6~8mmの胴部片。表面に横位の貝殻条痕文を施文する。施文工具は条肋の発達した二枚貝を用いている。内面はナデによって調整されている。胎土は砂粒を多く含む他、径6mmの砾も見られる。焼成は比較的良好で、表面は明赤褐色(5YR5/6)、裏面は橙色(5YR6/8)を呈する。



第27図 包含層出土の土器(9) 第IV群

21A II 004は器厚5~7mmの比較的薄い器壁を有する胴部片。壺形土器の胴部となる可能性がある。表面は横位の貝殻条痕文を施文し、条肋の1条の幅が3mmとよく発達した貝殻を用いている。条肋は4条が1単位となるが、その中でもとくに2条が明瞭に施文される。肩部より上が黒く、スス状炭化物が付着しているのが認められる。内面の調整はヨコナデ。胎土には砂粒に金雲母が混じる。焼成はやや甘く、表裏面ともに褐色(10YR4/4)~黒褐色(10YR3/1)を呈する。

19D II 001は器壁7~8mmの胴部片。表面に横位の貝殻条痕文を施文する。条肋の4条が1単位で、よく条肋が発達した貝殻を用いている。施文順位は上部から下部へと順次繰り返される。胎土は砂粒を非常に多く含み、径3mm以上の礫も含有する。焼成はあまり良くない。色調は表面が暗赤褐色(5YR3/3)~にぶい赤褐色(5YR4/4)、裏面は明赤褐色(5YR5/8)を呈する。

17DE002は内面が剥離している。表面に縦位の条痕を4条を1単位として施文する。胎土には黒雲母を若干混入する。表面はにぶい黄褐色(10YR5/3)で、焼成はやや甘い。

19C II 002は器厚8~9mmの胴部片。表面に縦位の条痕文を、条肋のよく発達した貝殻を用いて施文する。19D II 001と胎土、焼成とともに似る。色調は表面が褐色(7.5YR4/3)、裏面が明褐色(7.5YR5/6)である。

19B II 028は器厚4~5mmの薄い器壁を持つ。内湾する器形となることから、壺形土器の胴部片とも考えられる。表面には横位の貝殻条痕文を施文する。1条の条肋の幅は約2.5mmで、比較的発達した二枚貝を用いている。条肋の1単位は4条と思われ、内面には丹念なナデが施される。胎土には径1mm以下の砂粒を多く含み、金雲母の細片を多く含有する。色調は表面が黒褐色(10YR3/1)、裏面は褐色(10YR4/4)である。

18A III 011は器厚8mmの胴部片。表面に縦位の条痕文を施文するが、あまり明瞭ではない。工具は半截竹管系かとも思われる。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや甘く、表面は明赤褐色(5YR5/8)、裏面は明黄褐色(10YR6/6)を呈する。

18A III 012は器壁6~10mmの胴部片で、器厚から見て底部近くと思われる。幅広の条痕を上から下に引きするように施文する。内面には横位のナデ。内外面にスス状の炭化物が付着する。胎土には砂粒を多く含み、焼成は普通。表面はにぶい黄褐色(10YR5/4)、裏面は灰黄褐色(10YR4/2)を呈する。

17B III 010は器壁約6mmの胴部片。斜位の条痕文を施文した後、2条の条線文を施文するが、工具は不明。条痕文の上に条線文を施文するものは他では見られないが、IV群に含まれると考えられるのでこれに含める。胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや甘い。表面は褐色(7.5YR4/6)~褐灰色(10YR4/1)、裏面は褐色(7.5YR4/3)を呈する。

17C II 016は器壁約7mmの胴部片。表面は横位の条肋のあまり発達していない貝殻を用いて

貝殻条痕文を施文する。胎土には砂粒を多く含み、雲母の細片も見られる。焼成は比較的良好で、表面は明赤褐色（5YR5/8）、裏面も同色（5YR5/6）を呈する。

16CII003は器厚9～10mmの比較的厚い器壁を有する胴部片。胎土へ砂粒の混入は他と比較して少なく、固く焼きしまっている。左上から右下に向って条痕文を施文する。1条の幅は2mmで、5条を1単位として施文する。表面にはスス状炭化物も付着する。裏面は横位のナデ。砂粒の移動が見られる程強くナデを施す。内面にもスス状炭化物が付着する。胎土には金雲母も若干含む。色調は表面が明褐色（7.5YR5/6）～黒褐色（7.5YR2/2）、裏面は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。

16BN011は器壁約10mmの胴部片で、比較的厚手である。器表面には条肋が非常に発達した貝殻を用いて、4条を1単位として斜位に施文し、次いでその上から縦位に施文する。斜位の条痕文に比べて、縦位の施文は弱い。胎土には砂粒を多く混入する。焼成は普通で、表面はにぶい黄褐色（10YR6/4）～黒褐色（10YR3/1）、裏面は黒褐色（10YR3/2）を呈する。

16BE004と16BE005はおそらくは同一個体。器壁約8mmで、いずれも縦位の条痕文を施文する。条痕は太く明瞭で、1条の幅は約4mmに達している。工具は半截竹管系かと思われる。胎土には径2mm以下の砂粒を多く含み、焼成は普通。色調は表面がにぶい褐色（7.5YR5/4）～明褐色（7.5YR5/6）、裏面は灰褐色（7.5YR4/2）である。

16BE009は器厚6mm前後の比較的薄い器壁を持つ。条肋の余り発達していない二枚貝を用いて、4条を1単位として施文する。胎土への砂粒の混入は比較的小ない。焼成は良好で、表面は黒褐色（7.5YR3/2）、裏面は暗赤褐色（5YR3/4）を呈する。

16BN013は器厚8～11mmの比較的厚い器壁を有する胴部片。表面に条痕文を施文する。上半分は幅の狭い条痕で、下半分は広い条痕が施文されており、工具が異なる可能性がある。施文後にナデを加えているように思われる。内面はヨコナデ。胎土には径2～3mmの小礫を多数含むが、焼成は比較的良好。色調は表面がにぶい黄褐色（10YR5/3）、裏面は暗褐色（7.5YR3/3）である。

16BE010は器厚6mm前後の比較的薄い器壁を持つ。表面に斜位の条痕文を4条を1単位として比較的浅く施文する。工具は不明。胎土には砂粒を混入するが、比較的小ない。焼成はほぼ良好で、表面は明褐色（7.5YR5/6）、裏面は褐色（7.5YR4/3）を呈する。

16BN024は5～6mmの薄い器壁の胴部片。表面の条痕文は横位で、浅く不鮮明である。内面はナデ。胎土には径1mm程の砂粒を含むが、焼成は比較的良好。色調は表面がにぶい黄褐色（10YR5/3）～黒色（10YR2/1）、裏面は明赤褐色（5YR5/6）である。

16BN016は器厚7mmの器壁を持つ。表面に横位の貝殻条痕文を施文し、条肋4条で1単位となる。条痕文は明瞭に施文する。裏面はナデ。胎土には砂粒を含むが、比較的小ない。焼成は比較的良好で、表面は褐色（10YR4/1）、裏面は黒褐色（10YR3/1）を呈する。

16BN029は器厚10mm程の比較的厚い器壁を持つ。表面に横位の条痕文を施文するが、工具は不明。胎土には砂粒を含むが、焼成は比較的良好。色調は表面が明褐色（7.5YR5/8）、裏面が明褐色（7.5YR5/6）である。

17DII002は器厚6～8mmの器壁を持つ胴部片。器表面に条痕文を施文する。表面の条痕文はケズリ手法を施すため、中央部が凸部として残る。胎土には径3mm前後的小礫を多く含むが、裏面はこの礫をうめるように丁寧にナデを施している。色調は表面が黒褐色（10YR3/1）、裏面は明褐色（7.5YR5/6）である。

20BE001は器厚7～9mmの器壁を持つ胴部片。表面に半裁竹管状工具を用いて、条痕文を縱位に施文する。条痕は明瞭ではなく、磨耗が著しい。裏面はヨコナデ。また、スヌ状の炭化物が付着する。胎土には砂粒を比較的多く含む。焼成はほぼ良好で、色調は表面が明赤褐色（5YR5/6）、裏面はにぶい黄褐色（10YR4/3）である。

16BE007は器厚8mmの胴部小片。表面には縱位の条痕文を施文する。工具は不明。胎土への砂粒の混入は非常に少なく、比較的良好である。表裏面ともににぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する。

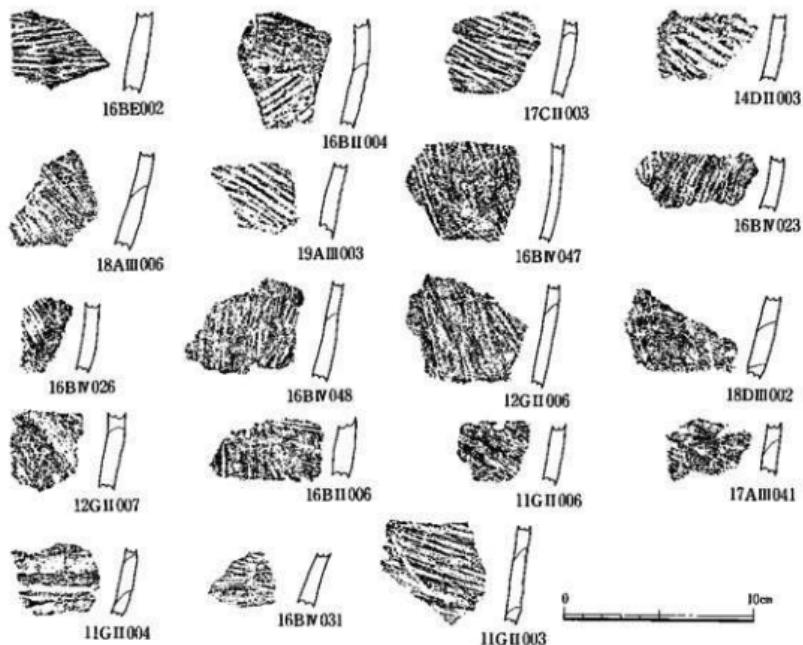
16BE002は器厚8～9mmで、器表面に横位の条痕文を半裁竹管系かと思われる工具を用いて施す。胎土には小礫を多数含み、表面は灰黄褐色（10YR4/2）、裏面は褐灰色（10YR4/1）を呈する。

16BII004は器厚8mm前後の器壁を有する胴部片で、上半分は条痕調整の後にケズリを施す。ケズリの方向は右から左。下半分は貝殻により条痕文を施文する。胎土は多量の砂粒を混入するが、焼成は比較的良好。色調は表面が黒褐色（7.5YR3/2）、裏面は橙色（7.5YR6/6）である。

17CII003は6～8mmの器厚を有する胴部片。表面に横位の条痕文を施文する。内面はナデ。かなり強くナデを施すため、砂粒の移動が見られる。胎土に砂粒の混入は少なく、焼成は比較的良好。また、胎土にチャート製のチップが1点混入していることが観察される。色調は表面が明褐色（7.5YR5/6）、裏面は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。

14DII003は器厚6～7mmで、表面に斜位の条痕文を施文する。条痕の条肋1条の幅は3.5mmと比較的発達した貝殻を用いている。条肋は3条が1単位。胎土には径2～3mmの小礫を多数含む。また、金雲母の細片も含む。焼成はやや甘く、表面は黄褐色（10YR5/6）、裏面は灰黄褐色（10YR4/2）を呈する。

18AIII006は器壁7～8mmの胴部片。表面には条痕文を施文するが、いずれも斜位で、弱く施文する。また工具は不明であるが、2種類以上用いている可能性がある。内面はヨコナデ。胎土への砂粒の混入は比較的少ないが、金雲母の細片が多い。焼成は比較的良好で、色調は表面がにぶい黄褐色（10YR4/3）～黒褐色（10YR3/1）、裏面は明赤褐色（5YR5/6）である。



第28図 包含層出土の土器(II) 第IV群

19AM003は器厚8mmの胴部片。表面の条痕文はすべて斜位で、3条が1単位となるようと思われる。幅広で、明瞭に施文される。胎土には砂粒を多数含むが、焼成は比較的良好。表裏面ともに明赤褐色(5YR5/6)を呈する。

16BW047は器厚6mmの胴部片で、比較的薄い。表面に縱位の条痕文を施文するが、条痕は不明瞭。胎土に金雲母を含み、焼成は比較的良好。表面は黒色(7.5YR2/1)、裏面は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。

16BN023は器厚7~8mmの胴部片。表面に縱位の条痕文を施文するが、工具は不明。胎土には小礫を若干含み、焼成は普通。色調は表面は黒色(7.5YR2/1)、裏面はにぼい赤褐色(5YR4/3)である。

16BN026は器厚7mm前後の器壁を有する。表面には弱い条痕文を施文する。胎土は砂粒を含み、焼成は普通。色調は表面が黒色(7.5YR2/1)、裏面は暗褐色(7.5YR3/4)である。

16BN031は外表面に右から左へ条痕文が施文される。工具は貝殻ではなく、繊維束などの

纖維質のものと考えれる。刷毛目状に痕跡が残る。胎土に長石粒を若干含む。焼成は比較的良好で、表面は暗褐色（10YR3/3）、裏面は灰黄褐色（10YR4/2）を呈する。

11GII003は器厚6～7mmの胴部片。表面には条痕文を施文するが、工具は二枚貝とは考えられないが、詳細は不明。ヘラ状の工具でなでついているようにも思われる。内面はナデ。スス状炭化物が付着する。胎土には砂粒を若干含み、黒雲母を若干含む。焼成は普通で、表面はにぶい黄褐色（10YR4/3）、裏面は暗褐色（10YR3/3）を呈する。

以上は外表面に条痕文を施文する土器であるが、この他に内面にもあわせて条痕文を施文する土器がある。16BN019、16BE006、16CII006の3点である。

16BN019は器厚9mm程の胴部片。表面、裏面ともに条痕文を施文する。外表面には斜位の条痕文を施し、裏面には横位に施文する。ともに比較的1条の幅は広いが、工具は不明。胎土には砂粒を多く含み、焼成は普通。表面はにぶい褐色（7.5YR5/3）、裏面は明褐色（7.5YR5/6）を呈する。

16BE006は器厚5～6mmの比較的薄い器壁を持つ。内外面ともに条痕文を施文する。他の条痕文とやや様相を異にし、第IV群に含めるべきか迷うが、胎土に纖維を全く含まないためこの群に含めた。表面の条痕は細かく刷毛目状に、横位に施文する。5条で1単位となる。裏面も同工具を用いて施文しているが、裏面の方が遺存状態はよい。胎土は砂粒を多量に含み、雲母の細片も含む。焼成は甘く、表面はにぶい黄褐色（10YR5/4）、裏面はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。

16CII006は器厚7～11mmの胴部片。表面は横位の条痕文を施文するが、内面に複雑な調整痕を有するのが特徴。表面は条痕文施文後、横位のケズリを施す。下には右下から左上へのケズリを入れる。裏面はヘラ状工具により鋭く切れ込みを入れながら、ケズリを入れる。ヘラによる切れ込みは深さ約1mmに及ぶ。ナデあとも見られるので、ナデを施した後にケズリを入れるものと思われる。内面の調整は特異なもの。胎土への砂粒の混入は非常に少なく、小砾は全くない。黒雲母を含む。表面は明褐色（7.5YR5/6）～黒褐色（7.5YR3/2）、裏面は黒褐色（7.5YR3/2）を呈する。

本種は1点の口縁部片を除いてすべて胴部片であり、口縁部資料が胴部資料に比して極端に少ないことが注意される。口縁端部から胴部にかけて全面に条痕文を施文する深鉢形土器、もしくは壺形土器は少なく、残存口縁部片より見る限りでは、その多くが口縁に突帯を有する土器の胴部となる可能性がある。

b種) ケズリ等の調整痕を有するもの。

b種は器表面にケズリ、ナデ、ミガキなどの調整を有するものをこれに含める。これらの破片はa種の下部となるものも含まれると考えられるが、区別することができないので、便宜上これに一括して含める。ただし、a種と比べて量的に非常に少ないため、ケズリ調整等を含む土器は全体的に少数にとどまるものと考えられる。

16BIV048は器厚6～8mmの胴部片。縱位の条痕文を施文した後、下から上へケズリを施す。工具は板状かと思われるが、不明。裏面に炭化物が付着している。胎土には径4mmの小礫を若干含む。焼成は普通で、表面はにぶい黄褐色(10YR5/4)、裏面は黒色(10YR1.7/1)を呈する。

12GII006は器壁6～7mmの胴部片。表面は条痕調整を行った後に右下から左上へのケズリを施す。内面はヨコナデ。胎土には砂粒と金雲母片を含有する。焼成は普通で、色調は表面が黒褐色(10YR3/2)～にぶい黄褐色(10YR4/3)、裏面は橙色(7.5YR6/6)である。

18DIII002は器厚7～10mmとやや厚めの胴部。表面は下から上へのケズリによって調整を加えている。細かい刷毛目状の擦痕が認められることから、工具は板状のものかと思われる。胎土には砂粒を多く混入し、金雲母、黒雲母も含有する。焼成は普通で、表面はにぶい黄橙色(10YR6/3)、裏面は灰黄褐色(10YR5/2)を呈する。

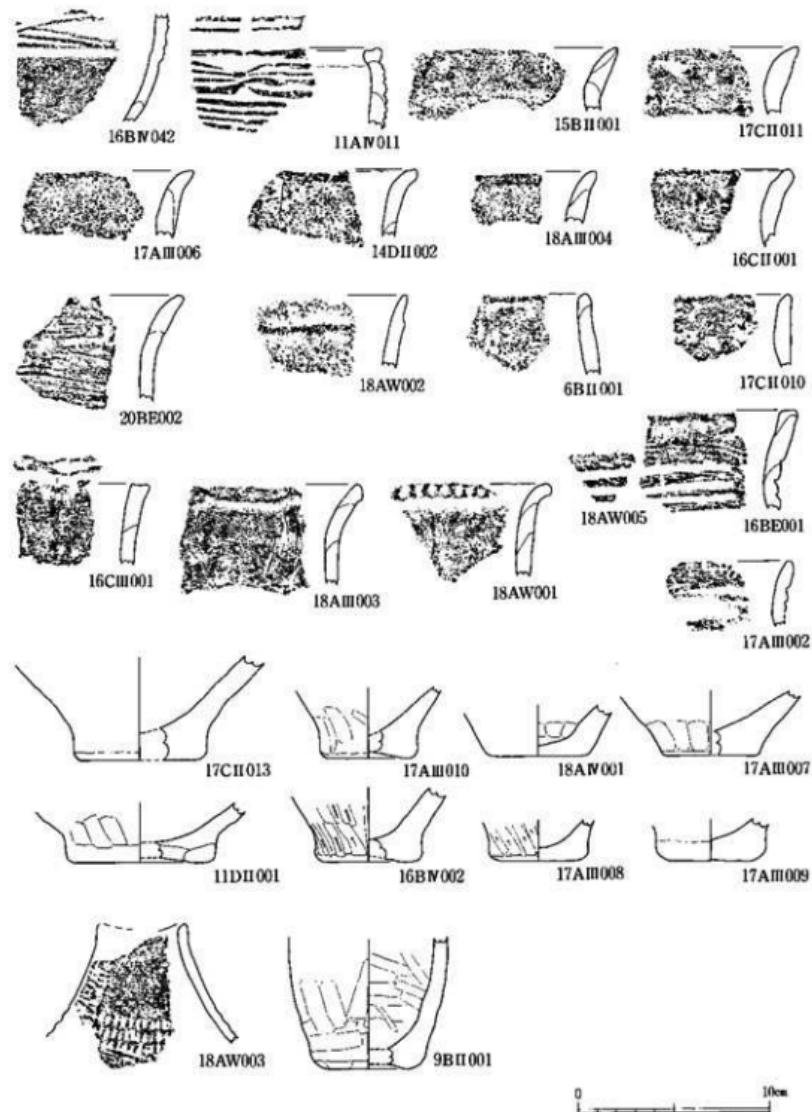
12GII007は器厚7～9mmの胴部片で、表面には明瞭なケズリによる擦痕を残す。ケズリの方向は右下から左上。砂粒の移動が顕著で、工具は板状のものかと思われる。胎土には黒雲母を含む砂粒が若干混じる。焼成は普通で、表面は明褐色(7.5YR5/6)、裏面は灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。

16BII006は器厚9～10mmの比較的厚い胴部片。表面にケズリによる調整痕を残す。ケズリは板状工具で、下から上へとケズリ上げる。胎土には径2mm以下の砂粒を多く含み、焼成は比較的良好。表面は暗褐色(7.5YR3/4)、裏面はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。

11GII006は器厚7～8mmの胴部片。表面は右下から左上方向へのケズリによる調整痕を残す。ケズリの幅は約14mm。胎土には砂粒を多く含み、金雲母、黒雲母も混入する。焼成は普通で、表面はにぶい赤褐色(5YR4/4)、裏面は赤褐色(5YR4/6)を呈する。

17AIII041は器厚約8mmの胴部片で、表面に右から左方向へのケズリを施す。胎土には多量の砂粒に金雲母が混じる。焼成は普通で、色調は表面は褐色(7.5YR4/6)、裏面は明褐色(7.5YR5/6)である。

11GII004は器厚6～8mmの胴部片。表面にケズリを施す。ケズリは右から左。なお、ケズリ痕が凹みとなるので、板状工具とは考えられず、幅も約10mmと狭い。胎土には砂粒を含むが、比較的少ない。金雲母を若干含む。焼成は普通で、表面は褐色(10YR4/4)、裏面は暗褐色(10YR3/3)である。



第29図 包含層出土の土器(II) 第IV、V群

5類（第29図、図版22）

浮線文系の土器をこれに一括する。量的には数点を数えるのみであるが、手法により2種に分類する。

a種) 彫刻的手法により浮線文をモチーフするもの。

16BN042は浮線文系の文様を有する、やや薄手の浅鉢形土器の胴部である。7mm前後の器厚の土器の口縁近くに、ヘラ状工具でケズリを入れて、浮線部分を残す。その浮線部に同工具を用いて沈線を施す。また、無文部分や内面にも左から右へケズリを施している。焼成は甘く、精製土器とはいがたい。胎土には粗砂をやや多く含み、長石、石英、黒雲母も見られる。色調は表面が明黄褐色（10YR6/6）～灰黄褐色（10YR5/2）、裏面は灰黄褐色（10YR4/2）である。

b種) 沈線の多用によってモチーフを構成するもの。

11AN011は浮線文系の文様を有する、浅鉢形精製土器である。口縁部をやや内湾させ、端部は器厚約10mmとやや肥厚させ、内面をふくらませる。端面には幅5mmの凹線を1条引く。表面は丹念にヘラミガキを行った後に沈線を入れ、さらにヘラミガキを施している。沈線は幅2.5mmで円棒状工具かと思われるが、不明。この沈線を多用することによって網状文を描出している。まず上から沈線5条によって浮線文4条を描く。中央に上下からそれぞれ工具による押圧を加え、結束部を作る。上下とも右から左へ工具を移動させながら、中央部へ工具をねかせ、さらに沈線を続いている。内面はヨコナデ。胎土に長石粒をやや多く含み、雲母や小礫を含むが、丁寧に作られており、焼成も良好。表面はにぶい黄褐色（10YR5/3）～黒褐色（10YR3/2）、裏面はにぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する。

6類（第29図、図版22）

晩期後半以降の無文系土器と考えられるものを、これに一括する。11類の形状により次の3種に分類する。

a種) 口縁が外反するものをこれに一括する。やや肥厚させた口縁部もこれに含む。

15BII001は器厚10mm程の外反する器形を有する口縁部。外反部は25mm程であるが、内面は外反し、外表面は外傾する口縁部となる。したがって、口縁端部に近付くにつれて先細りとなる。成形に際しては、口縁端部内面に貼り付けを設ける。表面、内面ともにナデを施すが、詳細は不明。胎土に径2mm以下の砂粒を非常に多く含む。径5mm程の小礫も含み、砂粒の混入率は非常に高い。金雲母、黒雲母も含有する。焼成はやや甘く、表面は明褐色(7.5YR5/8)～灰褐色(7.5YR4/2)、裏面は赤褐色(5YR4/8)を呈する。

17CHI011は外反する口縁部を有する。内面は外に向って強く外反するが、外表面は外傾気味に外へ折れ曲がる。口縁端部直下には横に指でなぞり、浅い凹線状のなぞりを入れる。最も肥厚させた部分で器厚11mmをはかる。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや甘い。砂粒の剥落が見られる。色調は表面がによい黄橙色(10YR6/4)～褐灰色(10YR4/1)、裏面はによい黄橙色(10YR6/4)である。

17AIII006は器厚10mm程で、外反する口縁部。内面はゆるやかに外反するが、外表面は先端近くで外に折れ曲がる。口縁端部は、一度口縁部を成形し、さらに外側から上へ伸ばすように貼り付けることによって作り出している。表面にはヨコナデが認められる。胎土には砂粒を多く含み、焼成は甘く、ボロボロと砂粒が剥落する。色調は表面が明赤褐色(2.5YR5/8)、裏面は明赤褐色(5YR5/8)である。

14DII002は外反する口縁部。外反しながら、口縁端部をさらに折り返す器形で、17AIII006に似る。外表面の頸部付近から斜位の条痕が入るかもしれない。内面はヨコナデ。胎土には径1mm前後の砂粒を多く含むが、丹念にナデを施しているため、砂粒は胎土に埋もれている。金雲母も含む。焼成は比較的良好で、表面は褐色(10YR4/6)～黒色(10YR2/1)、裏面はによい黄褐色(10YR5/3)～明赤褐色(5YR5/6)である。

18AIII004はゆるやかに外反する口縁部。外表面の口縁端部直下に1条の凹部を横位に入れる。指により押さえながら横に押し引き、これによって粘土紐の接合部を押さえている。方向は右から左。胎土には砂粒に混じって、金雲母の細片を含む。焼成はやや甘く、表面は暗褐色(7.5YR3/3)、裏面は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。

16CII001は外反する器形を有する口縁部で、端部で外傾させる。内面は指によるヨコナデを施し、浅い凹線状となる。外表面には擦痕、または条痕状の痕跡が見られるが、その後にナデを施している。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや甘い、表裏面ともにによい黄褐色(10YR5/4)を呈する。

20BE002は外反する口縁部。器厚7～9mmで、端部に幅4mm程の狭い面取りを行う。外表面はまず指によってナデを施した後にヘラナデ。内面には上半分に細かい擦痕が入り、下半分はナデ。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は比較的良好。色調は表面は褐色(7.5YR4/3)、裏面は灰黄褐色(10YR4/2)である。

18AW002は6~8mmの薄い器壁で、外反する口縁部。口縁端部の下に1条の隆線を有する。器表面、内面ともに器面の荒れは著しい。胎土は砂粒を非常に多く含み、砂粒の剥落が著しい。焼成は甘く、表面は褐色(10YR4/6)、裏面は明赤褐色(2.5YR5/8)を呈する。

b種) 口縁が直立、もしくはやや内傾するものをこれに括する。

6BII001はやや内傾、もしくは直立する口縁部を有する器形。口縁端部はやや外側へ折り返し気味にナデ。端部内側に粘土を貼り付けたように見える。表面に一面スス状の炭化物が付着する。内面には指による押さえの痕跡が認められる。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は普通。色調は表面がにぶい黄褐色(10YR4/3)、裏面は黒褐色(10YR3/1)である。

17CII010はほぼ直立する口縁部。約4cmの立ち上がりを有し、その下は外へ開く器形と思われる。内面はナデ。表面の調整は不明。胎土には砂粒を多く含み、金雲母の細片も混入する。焼成は甘く、砂粒の剥落が見られる。色調は表面がにぶい赤褐色(5YR4/4)、裏面が赤褐色(5YR4/6)である。

c種) その他の口縁部をこれに括する。

16CIII001は外反気味に立ち上がる器形。器厚6~8mmであるが、口縁端部に近付くにつれて厚くなる。口唇部は6mm程度で、指頭による押圧を加え、押圧を加えた部分では幅は約9mmに達する。外表面は丹念にヘラナデ。内面は指による押さえと右から左へのヨコナデ。胎土には砂粒を含むが、比較的少ない。焼成はやや甘く、表面は明赤褐色(5YR5/6)、裏面は明赤褐色(5YR5/8)を呈する。

18AIII003は外反する口縁部。端部を折り返し気味に傾け、指で横へ押圧を加えながらのナデを施す。表面、内面にはヨコナデを施す。16CII001は別個体だが、器形は似る。胎土には長石粒が多く見られ、金雲母、黒雲母も含む。焼成は比較的良好で、表裏面ともに橙色(7.5YR6/6)を呈する。

18AW001はほぼ直立する器形で、口縁端部を強く外反させる。折り返した端部には先端のあまり鋭くない工具で划印を入れる。端部直下は指による押さえを施し、ナデで調整。内面もナデ。胎土には長石粒を含むが、金雲母も見られる。焼成は比較的良好で、表裏面ともににぶい黄褐色(10YR6/4)を呈する。

16BE001と18AW005はおそらく同一個体。外反する口縁部で、端部はナデによって面取りを行う。外表面に横位の条痕文が認められるが、その後にナデによって消されている。頸部にヘラ状工具を用いて幅4mmで4条の沈線を施す。沈線の断面は三角形を呈するが、両端がや

や深く刻まれるため単純なヘラとはやや異なる工具かと思われる。沈線はいずれも左から右へ押し引きされている。内面はヨコナデで丹念に調整されている。胎土には径2mm程の砂粒を比較的多く含み、金雲母も混じる。焼成は比較的良好で、表面は灰黄褐色(10YR5/2)、裏面も同色(10YR6/2)を呈する。

17AIII002は外反する口縁部で、端部は先細り気味におさめる。器表面の剥落が著しいが、外表面に2条以上の沈線が認められる。沈線は断面三角形で、幅4mm。形状は16BE001とほぼ同様である。焼成は甘く、砂粒の剥落が著しい。胎土には金雲母も認められ、表面はにぶい黄褐色(10YR5/4)、裏面はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。

7類(第29図、図版22~23)

1類~6類の底部と考えられる土器をこれに一括する。

17CHI013は底径約7cmをはかる平底の底部。底面はほぼフラットとなる。外表面に調整は認められず、内面も不明。内面は底に向ってゆるやかにカーブし、フラットな面は作らない。胎土には径1~2mmの砂粒を多く混入し、金雲母の細片が見られる。焼成はやや甘く、表面は赤褐色(5YR4/6)、内面は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。

17AIII010は底径5.2cmの底部。底は中心近くでは3.5mm程浮く、所謂上げ底となっている。内部は中心に向ってゆるやかに傾斜し、フラットな面は形成しない。外表面はナデが施されている。胎土に砂粒を多く混入し、金雲母の細片も混入する。焼成は甘く、砂粒がボロボロ剥落する。色調は表面が赤褐色(5YR4/8)、内面も同色(5YR4/6)である。

18ANW001は底径5.4cmの底部。底面はフラットとなる平底である。外表面は遺存状態が悪く、砂粒の剥落が著しい。内面は比較的の遺存状態が良く、底面との接合部に指によるナデを施した跡も見られる。焼成は甘く、表面はにぶい黄褐色(10YR5/4)、内面はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。

17AIII007は底径約5cmの底部。底面はフラットで、平底となる。内面は中心に向ってゆるやかに傾斜する。底部器厚は約13mm、最も厚い部分で21mmをはかる。外表面は器面の荒れのため、調整は不明。指による押さえかと思われる痕跡が見られる。内面は剥落が著しく、不明。胎土は長石粒を多く含み、径5mmの小礫も混じる。焼成は甘く、剥落が著しい。表面は赤褐色(2.5YR4/6)、内面は明赤褐色(2.5YR5/6)を呈する。

11DII001は底径約7.5cmの、若干上げ底となっている。底はしっかりと作り付け、約15mm立ち上がって胴部に至る。外表面の胴部から底部への接合部付近に、ナデが施される。内面の調整は不明。胎土には砂粒を多く含み、焼成は普通。表面はにぶい黄褐色(10YR5/4)、内面は

にぶい黄橙色（10YR6/3）を呈する。

16BW002は底径5.8cmの底部。底は中心に向うにつれて若干の上げ底となる。外表面は底近くまでケズリにより、調整を行う。ケズリの方向は下から上。工具はヘラ状工具かと思われる。強くケズリを施すため、砂粒が大きく移動する。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は比較的良好。表面は赤褐色（5YR4/6）、内面は褐灰色（5YR4/1）を呈する。

17AIII008は底径5.2cmの小平底となる底部。外表面は器面の荒れのため、よく観察できないが、右下から左上へのケズリを認めることができる。内面は中心に向って下がり、フラットとはならない。中心部分では器厚7mmと薄い。内面はヨコナデ。胎土には径2mm前後の長石粒、石英粒を多く含む。焼成は甘く、砂粒の剥落が見られる。色調は表面が橙色（5YR6/6）、内面はにぶい黄橙色（10YR6/4）である。

17AIII009は底径5.8cmの底部。底は中央部付近で若干浮き、浅い上げ底となる。器表面、内面ともに荒れのため、調整痕を認めるることはできない。底の上げ底は成形上生じた特徴であろう。胎土は径1mm以下の砂粒を多く含み、焼成はやや甘い。表面は明褐色（7.5YR5/6）、内面は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。

第IV群土器は、突帯文・条痕文系土器群（突帯文土器研究会1993）として把握されるものである。また、本群には少量ではあるが5類のような浮線文系の土器も伴う。器種は變形土器、深鉢形土器、壺形土器、浅鉢形土器が認められるが、量的には前3器種が圧倒的に多い。また、18Dグリッド埋設土器として用いられた壺形土器も、スヌ状炭化物の付着から見て、日常生活に使用されたものを転用したものである。時期的には、馬見塚式から権現式にかけての遺物として、ほぼ総体を把握しうるものである。

第V群土器 その他の土器（第29図、図版23）

その他の土器をここに一括する。時期不明の資料もこれに含める。

18AW003は器厚約5mmの薄い器壁を有する資料である。一部のみの残存であるが、口縁部と思われ、壺形土器の頸部として推定復元を示してあるが、詳細は不明。口縁部はフラットとならず、若干波状となるかもしれない。残存片から見て、口径は外径が4.6cm、内径は3.8cmと、非常に狭い口を持つ。残存部の最も下の胴部近くでは径10cmとなる。口縁端部から3条縦位に連続刺突列を配する。拓影では2列と見えるが、おそらくは3列。頸部下には3列の横位の刺突列がめぐる。器面の荒れのため刺突の施文工具は不明であるが、刺突は器表面から強く押すため、裏面がふくらんでいる。壺形土器と考えられるが、1片のみであり、詳細は不明。

胎土は径2mm以下の砂粒を多く含み、金雲母も混じる。焼成は甘く、表面は褐色(10YR4/6)、裏面も同色(7.5YR4/3)を呈する。

9BII001は11AIV004との接合片で、現存高12cm、底径約6cmの円筒状の器形を有する。器面は刷毛目状の痕跡が若干認められるがナデとミガキによって消されている。底部はケズリを施しているものと考えられ、若干の上げ底となる。底面はミガキ、ナデとともになく、砂粒がむき出しとなる。底に近い方から横位のナデを施し、その上はヘラミガキが丹念にされる。腹部も丹念にミガキによって、精緻な仕上がりとなっている。内面は指によると考えられるナデによって整形されている。焼成、胎土ともに良好で、一見弥生土器を思わせる。器形、時期ともに不明。胎土には径3mm程の比較的大きな小礫を含むが、砂粒の含有は非常に少ない。金雲母の細片を若干含む。焼成は良好で、固くしまる。表裏面ともに橙色(7.5YR6/6)を呈する。

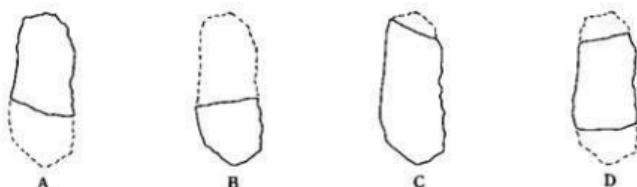
第2節 石 器

1. 包含層出土石器の概要

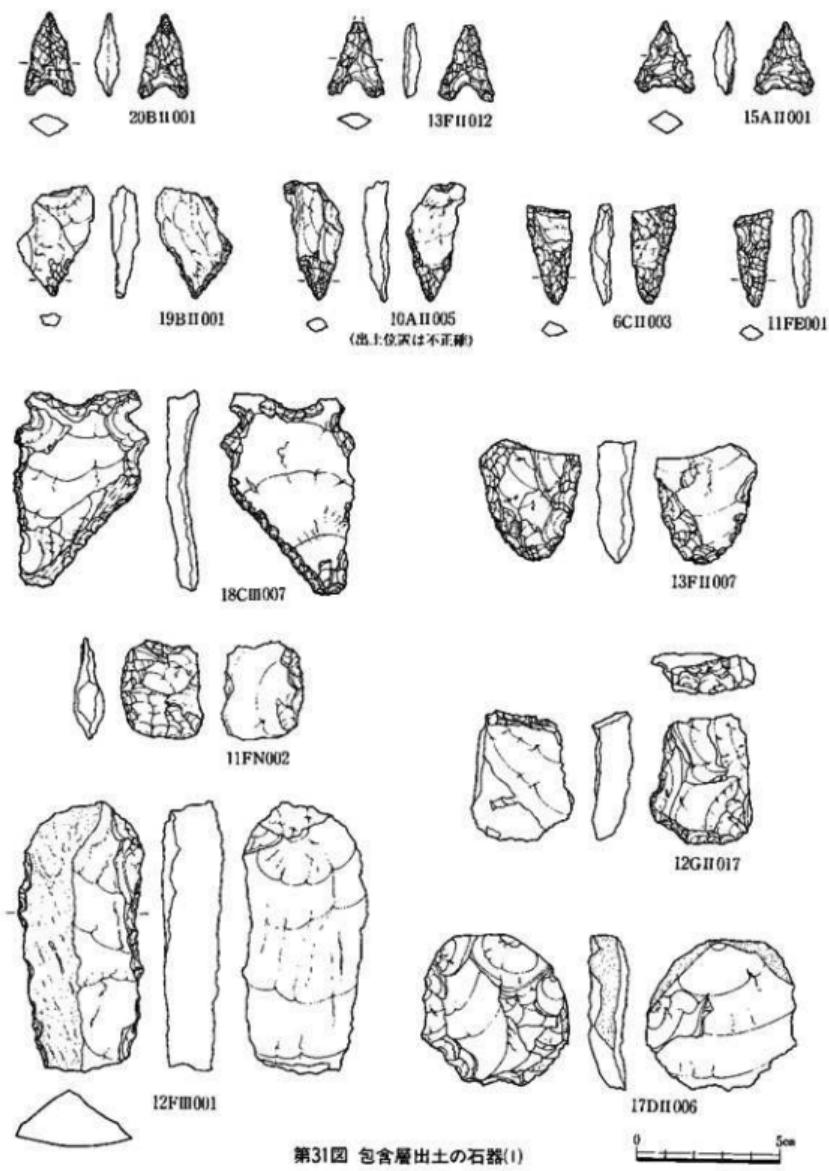
長吉遺跡から出土した石器群は、総計425点である。伴出している土器群からこれらの石器は縄文時代早期・晚期のいずれかに属する可能性が高いが、層位では時期は明確にとらえられなかった。

石 織 (第31図、図版26)

3点出土した。いずれもチャート製である。20BII001は装着部がわずかにえぐられており、尖頭部は先がやや細くとがり、肩が少しあっている。13FII012は装着部にやや深いえぐりがあり、尖頭部の平面形は二等辺三角形を呈する。15AII001は、装着部がややえぐられていて、尖頭部は二等辺三角形を呈している。



第30図 打製石矛の折損の部位による分類



第31図 包含層出土の石器(I)

石錐（第31図、図版26）

石錐のような尖頭部をもつが、装着部に何も加工がみられないもの、尖頭部が摩滅しているものを石錐とした。7点出土した。すべて石材はチャートである。19BII001・10AII005は、剥片の一端に整形を加えている。このような元の素材の形状を残したもののは全部で3点出土している。6CII003・11FE001は、元の剥片全体を整形して尖頭部を作り出している。このタイプは4点出土している。

石匙（第31図、図版26）

18CIII007の1点のみ出土した。チャート製で、縦長剥片を素材としている。刃部は剥片の縁辺に浅く作り出されており、石匙としてはあまり整形されていない。

搔器（第31図、図版26）

やや厚めの剥片に刃部がつけられ、刃部の角度が大きいものを搔器とした。3点出土し、すべてチャート製である。13FII007は、表裏両面に刃部が付けられているが、他の2点は片面より刃部を作り出している。17DII006は、こぶし大の円礫からとられた一次剥片の縁辺に粗く刃部が作り出されている。

削器（第31図、図版26）

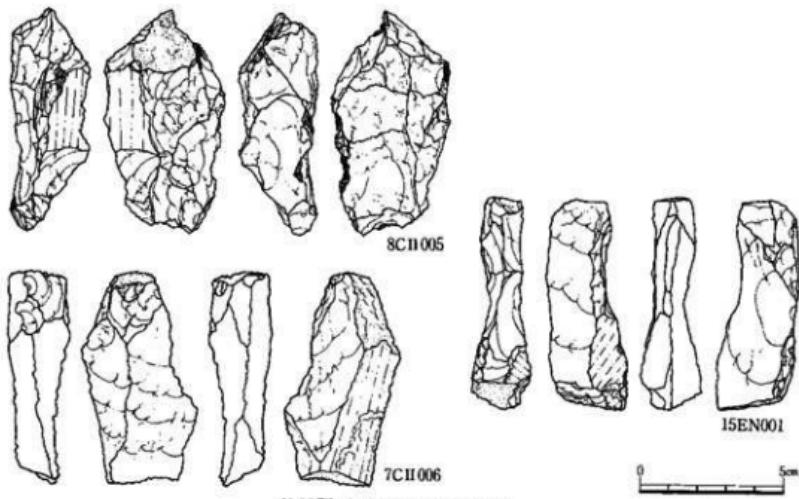
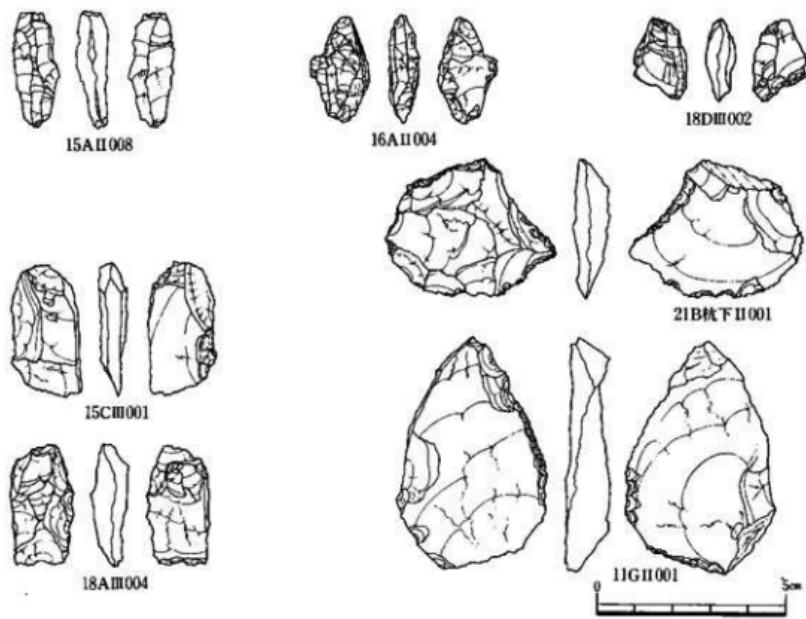
剥片の縁辺に連続的な調整によって刃部を作り出した石器を削器とした。3点出土し、すべてチャート製である。12FIII001は、縦長剥片を素材として側縁に刃部を作り出している。11FN002は剥片の腹面側に、打点側から側面にかけて極状剥離によってていねいに刃部を作り出している。

ピエス・エスキュー（第32図、図版26）

向かい合った2辺ないしは4辺の縁辺部に、剥離痕やつぶれが認められる石器をピエス・エスキューとした。8点出土し、すべてチャート製である。15AII008・16AII004・18DIII002は、どれも両方向からの細長い剥離が認められるものである。図示していないが他の5点は両方向からの剥離はみられず、つぶれが認められるだけのものである。

ヘラ形石器（第32図、図版26）

剥片の両端を折り取り、長軸方向一端に刃部をもつ石器をヘラ形石器とした。4点出土し、すべてチャート製である。4点中3点に刃部の反対側の縁部につぶれが認められる。15CIII001・18AIII004は、ともに元の剥片の鋭利な側辺をそのまま刃部としている。



第32図 包含層出土の石器(2)

二次加工のある剥片（RF）（第32図、図版26）

剥片の側縁に大小の剝離痕を連続して施したものを二次加工のある剥片とした。4点出土し、すべてチャート製である。21B杭下II001は剥片の一端を尖らせるように刃部を作り出している。11GII001は、縁端部に規則的に刃部が付けられており、削器の部類に入れても良いかもしれない。

石核（第32図、図版26）

11点出土している。大部分が残核と呼ぶべきものである。すべてチャート製である。2点図示した。8CII005は、長軸を中心として90°ずつ打面を転移させて剝離している。7CII006は、自然面の表面の磨耗が激しいことから川原の転石を使用したものと思われる。短軸側の一端を打面として縱長剥片を取り出している。作業面は2面ある。打面調整を一部施している。

剥片・碎片（第32図、図版26）

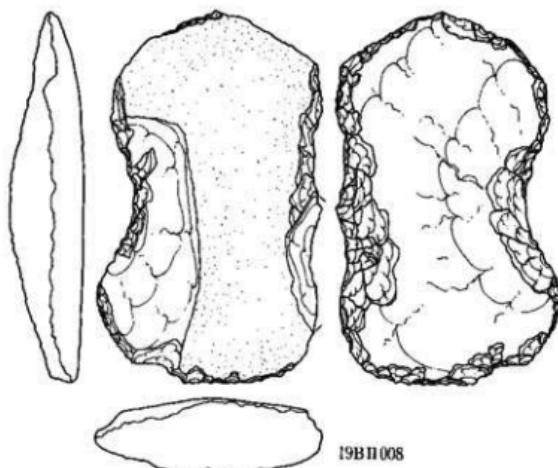
合計353点出土している。縱長剥片15EN001 1点を図示した。打撃の方向が垂直に近かつたせいか打点のバルブはあまり発達していない。縱長剥片は全部で2点しか出土していない。石材はチャートが大部分で、チャート以外のものは凝灰岩2点、ホルンフェルス3点、サヌカイト7点、ガラス質ではない安山岩？3点、砂岩1点である。ホルンフェルス・安山岩の剥片は打製石斧の製作時にできたものと思われる。サヌカイトの剥片は出土しているが、下昌石のものは出土していない。

磨製石斧（第34図、図版27）

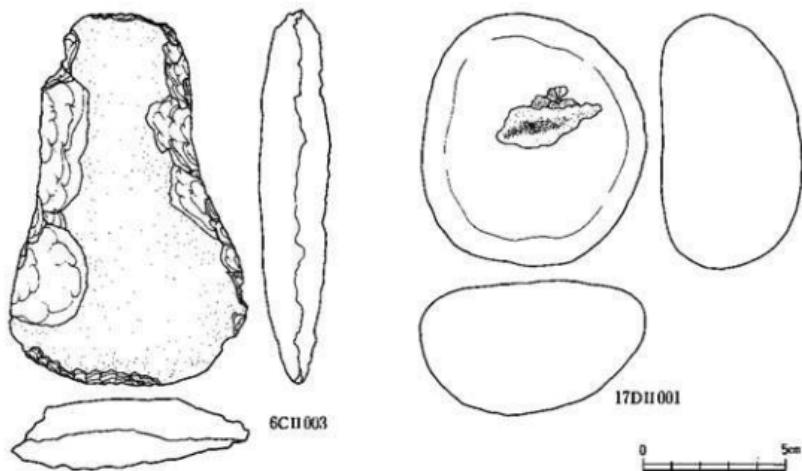
3点出土した。18EII001は砂岩製で全体を敲打によって整形した後、刃部と胸部を磨いている。磨製石斧の中では厚みがある。18BII003は多孔質の安山岩を使用しており、小さい剝離を施しながら整形し、そのうえから磨いている。5CII001は、やや白っぽい、大理石のような流れる模様のある緻密な石材を用いている。石材名の同定は表面観察のみからでは困難なため、一応凝灰岩としたが、緑色岩である可能性もある。この石材を用いた製品は徳山地域の繩文遺跡から比較的多く出土している。徳山地域には緑色岩の分布が見られるため、この石斧の石材が緑色岩であるとすると、在地製のものである可能性が高い。

打製石斧（第33～34図、図版27）

合計24点出土した。内、17点が折損もしくは破片である。打製石斧をその平面形から、バチ形（6CII003）、分鋼形（19BII008）、短冊形（15AII001）の3種類に分類した。バチ形が13

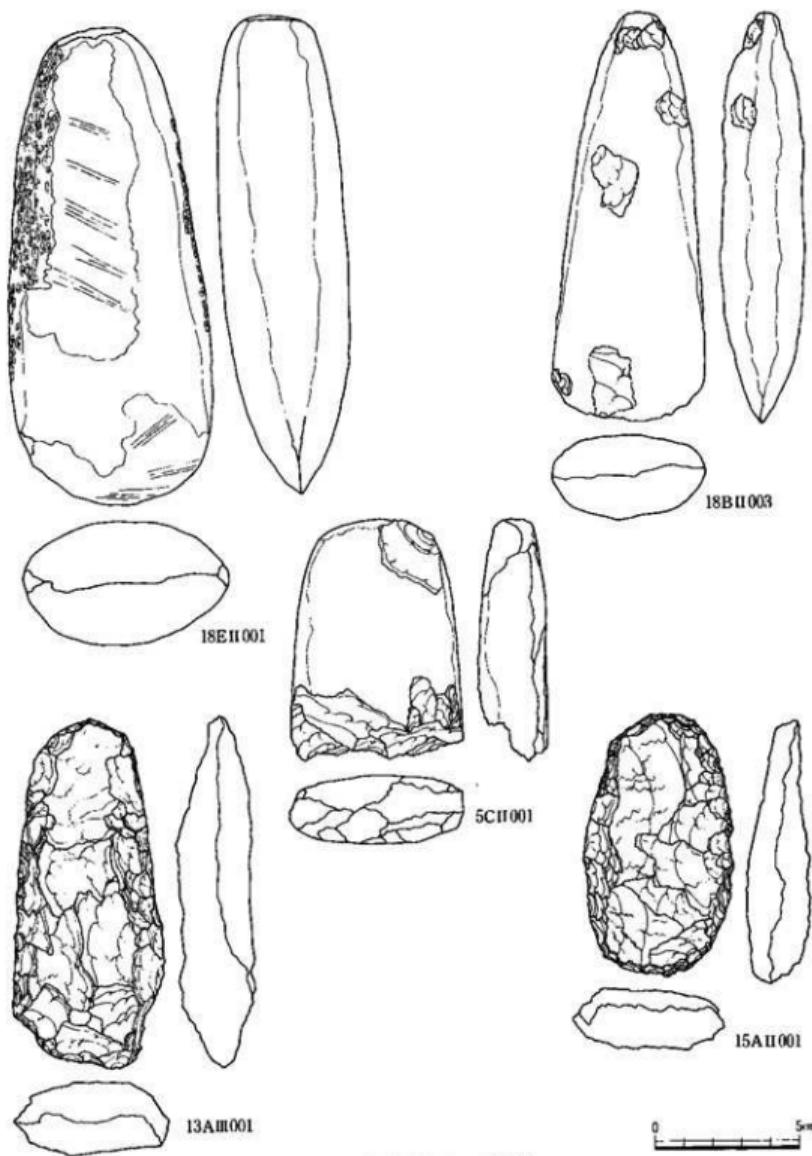


19B II 008

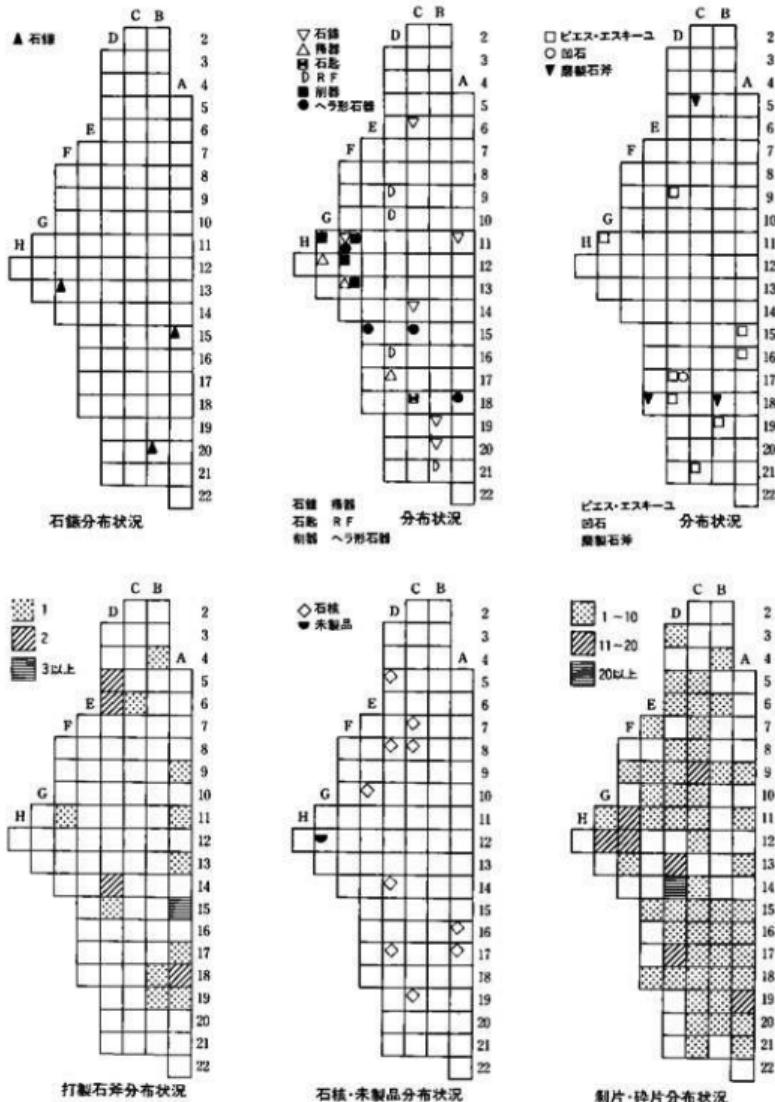


第33図 包含層出土の石器(3)

0 5cm



第34図 包含層出土の石器(4)



第35図 包含層出土石器の分布状況

点、分銅形が2点、短冊形が5点、不明が4点である。石材は、砂岩10点、礫岩1点、安山岩12点、ヒン岩1点である。砂岩・礫岩製のものは19BII008・6CII003のように川原石からとった一次剥片のまわりを整形して作り出したものが多い。安山岩製は13AIII001・15AI001がそれにあたり、特に風化の著しい面が観察されなかった。そのため、安山岩は露頭等の岩体から直接採取した石材を使用しているものと思われる。また、剥片類の中に、安山岩・砂岩等の打製石斧と同じ石材が少ないとことから、打製石斧は、本遺跡以外の地で製作された可能性もある。

この安山岩と同じものと思われる石材は、同じ徳山地域の戸入村平遺跡から出土した打製石斧にも使われている。徳山地域はほぼ全域が中生層で、安山岩を産する場所は能郷白山～若丸山付近の一部分にしかないが、川原にある転石から見る限り打製石斧に使われているような緻密な安山岩は見られない。そのため外部から持ち込んでいる可能性もある。この石材の原産地を明らかにしていくことが今後の課題である。

折損個体について、折損部位によって第30図のように分類した。それぞれの個体数は、Aが7点、Bが3点、Cが3点、Dが1点、一部欠・破片が3点である。折損個体が多いのは、当時この遺跡を採集地等として利用中、折れた打製石斧をそのまま放棄したためとも思われる。

四 石（第33図、図版27）

1点出土した。17DII001は砂岩製で片方のはば平らな面側の中央より長軸側にややすれた位置に右上がりの細長い凹部がある。このようなタイプの門石の機能として桃野1982は、石器製作時のハンマーを想定している。

2. 包含層出土石器の分布状況

第1節で述べたように、長吉遺跡で遺構に伴って出土したと確認された遺物は埋設土器のみであり、石器はすべて包含層からの出土である。

土器の分布状況が、晩期後半以降激しく擾乱を受けているとはいえ、早期後半の土器の集中箇所と晩期後半以降の土器の集中箇所が地点を異にしていることがわかった。そのため、石器についても包含層からの出土ではあるが、2次的に大きく移動していない可能性もあるため、石器の器種ごとの分布状況についてみておきたい。

石器の器種ごとの分布状況を第35図に示した。石器全体の分布状況と土器全体の分布状況を概観すると、両者はほぼ似たような分布状況を示していることがわかる。しかし器種ごとの分布を見ると明確な集中箇所はあるとはいはず、ここでは分布状況を示すだけにとどめたい。

石 灰

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	備考
1	13F	II	012	チャート	19	14	4	0.7	
2	15A	II	001	チャート	18	15	6	1.2	
3	20B	II	001	チャート	21	13	6	1.0	

石 鋸

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	備考
1	18C	III	007	チャート	51	36	9	12.3	

搔 器

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	備考
1	12G	II	017	チャート	33	27	10	10.9	
2	13F	II	007	チャート	32	27	9	9.4	
3	17D	II	006	チャート	43	38	10	18.6	

削 器

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	備考
1	11F N		002	チャート	25	22	7	4.0	
2	11G	II	001	チャート	58	40	10.5	23.7	
3	12F	III	001	チャート	70	33	16	39.7	
4	13F	II	008	チャート	31	24	8	6.1	

二次加工のある剥片

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	備考
1	9D	I	001	チャート	47	36	12	22.3	
2	10D	II	002	チャート	55	37	11	25.1	
3	16D	I	003	チャート	41	25	10	9.6	
4	21B	II	001	チャート	36	44.5	55	13.0	

ピエス・エスキュー

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	備考
1	9D	I	007	チャート	21	17	7	2.4	
2	11G	II	004	チャート	31	27	10	9.3	
3	15A	II	008	チャート	30	8	7	2.3	
4	16A	II	004	チャート	28	15.4	8	3.5	
5	17D N		001	チャート	21	23	8.5	4.7	
6	18D	III	002	チャート	16	15	7.5	1.9	
7	19B	II	001	チャート	32	45	9	15.4	
8	21C	II	001	チャート	28	15	6	4.1	

ヘラ形石器

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	備考
1	11F	II	010	チャート	40.5	20	10	9.3	
2	15C	III	001	チャート	34	17	7	5.1	
3	15E N		002	チャート	34	19	7	4.2	

磨製石斧

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	備考
1	5C	II	001	流紋岩?	(83)	(60)	(24)	(200.7)	先折れ
2	18B	II	003	安山岩	141	52	30	278	
3	18E	II	001	砂岩	167	71	44	759	

圓 石

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	備考
1	17D	II	001	砂岩	87	78	49	462	

第2表 包含層出土石器計測表(1)

打製石斧

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重積(g)	分類	折損分類
1	13A	III	001	安山岩	119	52	26	198	バチ	
2	19B	II	008	砂岩	130	78	25	(297)	分銅	一部欠
3	6C	II	003	砂岩	132	83	24	255	バチ	
4	18A	III	001	硬岩	120	61	24	210	バチ	
5	14D	II	019	砂岩	105	61	27	220	バチ	
6	11F	II	001	安山岩	143	70	24	(273)	バチ	C
7	19A	III	001	砂岩	(107)	69	17	(168)	分銅	A
8	15A	II	001	安山岩	91	51	21	114	短冊	
9	6D	II	002	砂岩	(138)	81	17	(207)	バチ	C
10	18A	III	002	ひん岩	108	48	25	172	バチ	
11	15D	II	001	砂岩	(118)	(62)	23	(217)	短冊	A
12	15A	I	002	安山岩	104	59	19	152	バチ	
13	15A	II	002	砂岩	(131)	75	39	(389)	バチ	A
14	11A	II	001	安山岩	(104)	99	35	(454)	バチ	B
15	18BW		001	砂岩	(82)	(52)	(30)	(196)	バチ	B
16	6D	II	004	安山岩	(101)	(54)	22	(119)	バチ	A
17	5D	II	005	砂岩	(80)	(61)	(17)	(102)	不明	B
18	17A	III	001	砂岩	(77)	(64)	(14)	(82)	バチ	A
19	15A	IV	002	安山岩	(60)	52	14	(62)	不明	D
20	4B	II	003	安山岩	(75)	(45)	(10)	(42)	不明	破片
21	15A	IV	001	安山岩	(59)	(57)	(11)	(43)	不明	破片
22	5D	II	001	安山岩	99	43	12	(78)	短冊	C
23	14D	II	015	安山岩	(67)	51	10	(49)	短冊	A
24	9A	II	001	安山岩	(68)	(58)	11	(73)	短冊	A

第3表 包含層出土石器計測表(2)

第3節 陶 器

長吉遺跡から出土した陶器は、近現代を含めて總点数5点を数えるだけである。しかも、限定されたグリッドから出土している。

19B II 015、20C II 007の2点はともに古瀬戸中期の有耳壺の一部である。内外面ともに灰釉が施されるが、外面は釉薬の磨耗が激しい。13C (図版23)。

第5章 長吉遺跡のまとめ

長吉遺跡は縄文時代中期等の遺物を若干見るものの、基本的には早期後半と晩期後半の2時期に形成された遺跡であることが明らかとなった。遺構については、多数の土坑状の凹み・ピット等を検出したが、性格、時期については明確にすることはできず、不明といわざるをえない。時期が特定できる明確な遺構は、晩期後半の土器棺の可能性が高い土器埋設遺構1基にとどまった。

長吉遺跡の発掘調査前の知見は、石鎚1点が表採されているのみであったが、調査の結果、縄文時代早期後半の資料をまとめて検出することができ、從来あまりよく知られていなかつたこの時期の徳山地区に新しい資料を加えることとなった。ここでは早期後半の第I群土器を中心にして、若干の検討を加えておきたい。

第1節 早期後半の土器群について

1. 長吉遺跡における第I群土器

長吉遺跡から検出した早期後半の第I・II群土器片は117点で、個体数にして約25個体前後と考えられる。晩期後半の突帯文・条痕文系土器群の土器片が180点で、晩期無文系も含めて60個体を超すと考えられる点数から見て、決して多いとはいえない。しかし、その遺存状態は晩期の資料に比べてむしろ良好で、接合片や同一個体と考えられる土器片が見られることから、本来の位置ではないにしろ、ある程度、原位置を反映しているものと考えられる。

さて、早期後半～末葉の土器群（第I・II群）は若干のオセンベ系土器（第II群）を除くと、ほとんどが広義の茅山式として把握できる内容のもので、その中でも從来茅山下層式としてとらえられてきた土器群に類似する。いずれも胎土に多量の纖維を含有し、表裏面に二枚貝を用いた貝殻条痕文が施文されるという特徴を持つ。また、神奈川県茅山貝塚、吉井城山貝塚出土の茅山下層式土器が貝塚出土ということもあり、非常に遺存状態が良いのに比較しても、胎土、焼成共に良好な一群である。

2. 第I群土器の器形と制作技法

第I群土器はいずれも屈曲する器形を有する土器で、口縁部から胴部にかけての接合関係や同一個体判別が可能なもので判断する限り、その多くは2段の屈曲部を持つ。しかし小片が多

く、屈曲部が1段のものもあるかもしれない。口縁部は平口縁が多いが、一部波状口縁となるものもある。また、端部はやや内削ぎとなるものがほとんどである。底部は平底で、底面にも条痕調整の痕跡を残す。胎土に礫の混入は少なく、特に雲母をほとんど認めず、非常に選択された胎土を用いている。

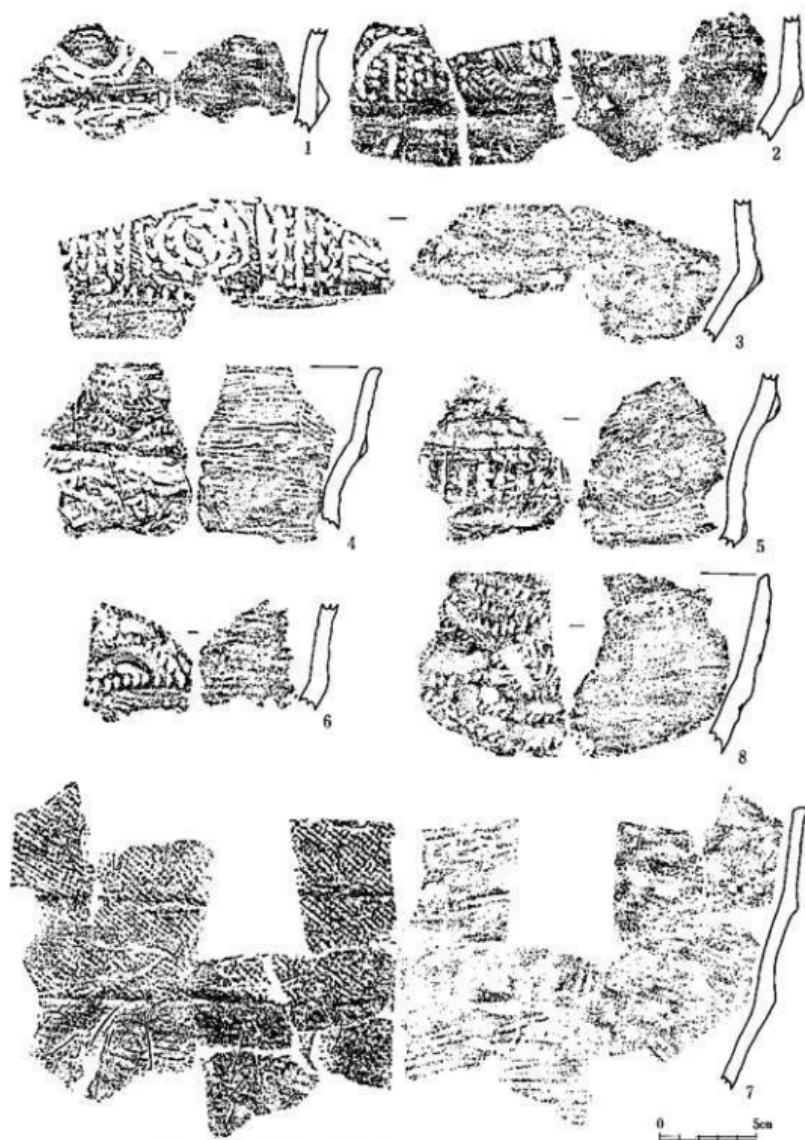
屈曲部は、粘土紐の貼り付けによって隆帯を設ける明瞭な屈曲部を持つものと、粘土紐を貼り付けずに屈曲させるものの2種類が見られる。また、明瞭な屈曲を持つ土器の中でも2つの成形技法が認められる。1類は凹線文と刺突文で口縁部文様帯、頸部文様帯を表現する一群であるが、a種とb種で屈曲部の成形手法が異なるようと思われる。a種は屈曲部を挟んで粘土紐を接合させると共に、さらに粘土紐を表面に貼り足して屈曲部を整えている。これに対し b種は内側へ高く粘土紐をつまみあけて擬口縁を作り、その外側にさらに上部の粘土紐を縫ぎ足して屈曲部を形作っている。ただし、5DII001は口縁部文様帯と頸部文様帯を分ける屈曲部については以上のような成形が見られるが、頸部文様帯と胴部を分ける屈曲部については、接合部に特別な成形を施しているようには思われない。明瞭な屈曲部を持つ破片を検討すると、その多くはa種と同様な成形手法を用いている。b種の手法は、野島式並行と報告されている静岡県古屋敷遺跡早期第IV群土器で観察された手法と類似する（阿部・恩田ほか1990）。また、揖斐郡内では谷汲村伊野遺跡第1地点（仮）から表揚されている鶴ヶ島式に類似する資料に類例が求められる（第7図1）。

3. 第I群土器の構成

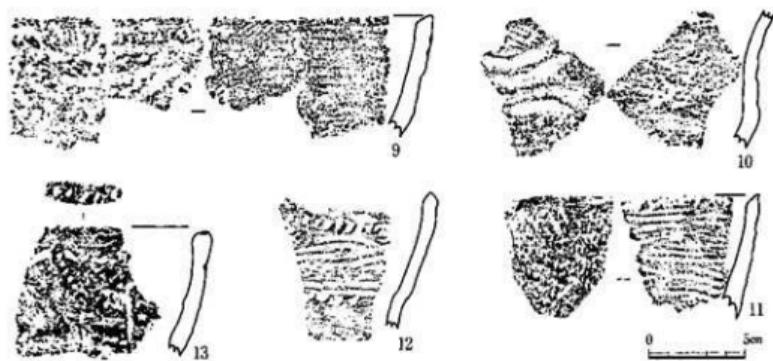
屈曲を有する器形を基本とする第I群土器を、施文手法によって6類に分けた。このうち、1～4類が装飾的な文様を施した土器で、5類が条痕文のみ施文される土器、6類は無文系上器で、胎土の纖維の含有によって第I群に含めたものである。1～4類は基本的に口縁部～口縁部文様帯～屈曲部～頸部文様帯～屈曲部に相当する資料であり、胴部については接合関係がない場合は明確ではない。一方、5類は表裏共に条痕文が施される例が多いが、胎土・焼成共に1～3類の資料に近似することと、口縁部資料が見られないことより、その多くは1～3類の胴部になるものと考えられる。

（1類）

1類は2段の強い屈曲部を有し、地文に条痕文を施した後、指による平行凹線文を幾何学的に施文する土器である。凹線文間は刺突文を充填するものとこれを省略するものがある。また I帶、II帶共に共通の文様構成をとる。この類のa種、b種、c種は丹念に整形されており、胎土も精選されていることから、在地の土器とは一概には断定できない。同様の文様構成をとるものの中でも、d種は文様の粗略化が進んでやや後出となる印象を受ける資料である。但



第36図 第I群土器の類例(I) (1~8小の原進路 報告書より一部改変。)



第37図 第I群土器の類例(2) (9~11小の原遺跡、12丸洞窯遺跡
13椿洞窯遺跡 各報告書より一部改変。)

し、胎土・焼成には大きな相違は認められず、それ程時期差を持つとは考えられない。

1類の文様帶の基本的な構成は、凹線文と連続刺突文が組み合わせて用いられていることがある。ただし、鶴ヶ島台式の系譜を引く区画状文はすでに消滅しており、茅山下層式の中でも中段階（関野1985）の様相を呈する。本類は静岡県西大曲遺跡出土土器（鈴木ほか1980）にモチーフが類似しているが、凹線文と連続刺突文の組合せを「茅山系土器群総体の中での検討」を行った金子1991は、茅山系土器群から連続刺突文系土器群と絶条体圧痕文系土器群を抽出し、変遷過程を分析している。これによると1類は連続刺突文系土器の第Ⅰ期、茅山系土器の第Ⅱ期に相当する。連続刺突文系土器群第Ⅰ期は「連続刺突文を施文しなければ茅山下層式土器と変わることなく」（金子1991）、茅山下層式土器が確立する段階でもある。

(2類)

2類は2段の強い屈曲部を有し、地文として条痕文を施した後、半截竹管状工具によって凹線文を施文する土器である。凹線文には褶曲状・波状に施文するもの（a種）、幾何学文を施文するもの（b種）、押し引きによって凹線文を施文するもの（c種）などが見られる。凹線文間には、これに沿うようにD字状刺突文を同じ半截竹管状工具を用いて施文している。この類も丹念に整形されており、胎土も精選されていることから、時期差はほとんど感じられず、ほぼ同一時期の所産であると考えられる。

2類の文様帶の基本的な構成は、竹管による凹線文とD字状刺突文を組み合わせて用いられていることである。I带、II带共に同じような幅をもって文様帶を構成し、茅山系土器群の第Ⅰ期で見られた、左右対称に円形の文様を施文する対弧文が、その名残をとどめながらも（10DII006）、そのモチーフが左右にずれていく様相が見られる（10DII004）。これらより2類は

1類と同様に、茅山下層式中段階（関野1985）、茅山系土器第Ⅰ期まではさかのばらず第Ⅱ期（金子1991）の中でとらえられることを示していよう。また、b種に見られる幾何学的な区画状文もこの時期に見られ、Ⅰ帯とⅡ帯では異なった文様が展開する例も見られる。

（3類）

3類は2段の強い屈曲部を有し、地文として縄文を施文するものである。これは裏に条痕文が見られないもの（a種）と条痕文が見られるもの（b種）がある。a種は地文施文後に半截竹管状工具又は円棒状工具を用いて凹線文を施文する。つよく蛇行する流水文も見られる。b種は細い凹線文に浅いD字状刺突文を施文する。量的には1、2類に比べて少ない。胎土は精選されており、焼成も良好であるが、やや粗略化の傾向が感じられる。

流水文は茅山下層式中段階（関野1985）、茅山系土器第Ⅱ段階（金子1991）で見られるが、縄文が多用される時期を関野は同時期とするのに対して、金子はさらに第Ⅲ段階を設けてこれに当たっている。但し、Ⅱ帯が形態化し、モチーフがⅠ帯に集約される第Ⅲ段階ほど、長吉遺跡の3類は形態化しておらず、新しい要素は見られつつも基本的に第Ⅱ段階の中で理解できると考える。

（4類）

4類は比較的薄手で、明瞭な屈曲部を持たないもので、量的には非常に少ない。地文の条痕文も明瞭ではなく、連続刺突文を主として施文するものである。屈曲部が不明瞭なこと、胎土も1～3類に比べてそれほど精選されている感じを受けず、焼成もやや甘いものが見られるなど、若干の時期差を感じさせる類である。すべて連続刺突文系のみで構成されており、凹線文系の施文は一切見られない。これらの中には八ツ崎Ⅰ式に類似する資料も見られるが、ここでは茅山下層式の凹線文が消失した段階、茅山下層式の新しい段階であると考えるにとどめておきたい。

以上、1類、2類、3類が長吉遺跡における茅山下層式に類似する土器の基本的な構成であり、4類は若干後出の要素を持つものと考える。その内容は、指もしくは半截竹管状工具によって凹線文を施文し、連続刺突文を共有することにある。また、地文に縄文を施すものも見られるが、量的には少數であり、これにも凹線文と刺突文を加えている。これらの時期は、茅山下層式土器群が確立する時期であり、かなり限定された時期に長吉遺跡が営まれたことを示していると考える。

4. 徳山地区における第Ⅰ群土器

第36～37図は徳山地区小の原遺跡（1～11、宇野・佐野ほか1991）、九合洞窟遺跡（12、澄田・大參1956）、椿洞遺跡（13、堀ほか1989）に見る長吉遺跡第Ⅰ群土器に類似する資料であ

る。揖斐谷辺では谷汲村伊野遺跡第1地点（仮）より鶴ヶ島台式に類似する資料が見られる他は、目立った遺跡は知らない。徳山地区に目を転じると、下開田村平遺跡では少量が出土しており、1994年の寺屋敷跡の調査でも量的には少ないが良好な資料が出土している。また、既報の中では小の原遺跡からは比較的まとまった資料が見られる（S 5群3類）。明瞭な屈曲を有するもののうち、貼り付け隆帯を設けるもの（1～5）、隆帯を貼り付けずに成形によって屈曲部を形成するもの（6、7、10）がある。8、9、11は屈曲も弱く、退化する傾向が著しい。長吉遺跡第I群1類に類似する資料は見られないが、2類に類似する資料は散見することができる。ただし、長吉遺跡2類は小の原遺跡S 5群3類よりも胎土・焼成共に良好で、小の原遺跡の土器群との相違が見られる。

小の原遺跡において茅山下層式に類似する資料は、野鳥式、鶴ヶ島台式、茅山下層式、茅山上層式という、茅山系土器が連続として用いられる中で出土している。また、茅山上層式段階では柏畠式が共伴し、以下上ノ山式、入海I式、入海II式、石山式、天神山式、塩屋式という東海条痕文系土器様式が継続する。これに対して、長吉遺跡においては明確な柏畠式は皆無で、それ以前の段階にとどまっている。遺物の出土状況から、第I群1～3類は短期間の所産であり、4類に若干後出の要素を認めることはできても、基本的には早期終末の第II群まで、遺跡は営まれることがなかったものと考えられる。茅山下層式の徳山地区への進出の経路と茅山下層式をもたらした人々の性格はなお不明であるが、詳細な検討は今後の調査をふまえて行いたい。

第2節 晩期後半の長吉遺跡

長吉遺跡からは晩期後半の土器群がややまとまって出土している。早期後半と同様に明確な遺構は明らかにすることはできず、土器棺と思われる土器埋設遺構を1基検出したのみであった。時期的には突帶文・条痕文系土器群の範疇としてはほぼとらえうるものである。この時期と考えられる土器片は計449点で、個体数は60個体を超すと考えられる。これらの出土した遺物はいずれも小片が多く、その性格は不明といわざるをえない。

長吉遺跡に近接する遺跡は、1991年に調査を終えた塚（塚村平）遺跡である。その詳細は整理途中ではあるが、晩期後半の資料は量的にそれ程多いとは思われず、長吉遺跡とのつながりを積極的に考えることはできない。また、土器片の器面の荒れはそれ程激しくなく、原位置を保っていないにしても、遠くからの流れ込みも考えにくい状況にある。ただ、接合片は少なく、晩期後半以降の擾乱の激しさがうかがえた。

さて、長吉遺跡の資料は本来の遺跡の中心部分が調査区に近接していたか、もしくは擾乱によって残されておらず確認できなかったかの、どちらかであった可能性がある。出土土器はこ

の時期の器種が一通り出土を見たことと、埋設土器が日常生活で使用された壺形土器を転用して使用されていることからも、長吉遺跡を残した縄文人の活動の場がそれ程離れていないことを示している。

出土した石器は、ほとんどが早期後半と晚期後半のいずれかに属すると考えられる。しかし量的には少量で、生産活動が積極的に行われていたとは考えにくい。中でも通有に見られる石鏃は3点出土しているのみで、狩獵活動は低調であった。また、敲石、石皿も皆無で、堅果類の加工を積極的に行っていたとは考えにくい。唯一打製石斧が24点と比較的多いことが注目され、根茎類の採集地であったとも思われるが、このような生産活動の場を営んだ集団の居住の場所は未だ明らかではない。

突帯文・条痕文系土器群はこれまでに徳山地区では、はいづめ遺跡からまとまって出土している。ここでは、条痕文土器に遠賀川系土器が共伴している。まだ整理途中ではあるが、上原遺跡においても条痕文土器と遠賀川系土器との共伴関係が認められる。しかし、1993年に調査を実施した山手宮前遺跡では、条痕文土器がやまとまって出土したが、遠賀川系土器は認められなかった。これまでの所では、東谷上流部では遠賀川系土器を伴わない条痕文土器群が認められることになるが、今後の調査の中で解明されるべき点であろう。突帯文・条痕文系土器群の徳山地区における様相については、今後の調査を待って解明したいと考えている。

第3節 中世の長吉遺跡

長吉遺跡から出土した陶器はわずか小片5点であるが、13世紀の古瀬戸の有耳壺片が2点見られることは注目される。長吉遺跡の北東に寺平と呼ばれる削平地があり、密教系寺院跡の伝承が伝えられていることは、既に第2章で述べた。今回の出土遺物は極めてわずかで、その意味するところを軽々に推断することはできないが、今後の課題となろう。

第6章 普賢寺跡の遺構

第1節 基本層序

普賢寺跡は揖斐川右岸の河岸段丘上のはば中央に立地している。背後のミヤノタニが押し出してきた土砂が厚く堆積していると考えられた。標高は294~296mで、揖斐川本流との比高は約15mである。

調査によって確認された層序は、基本的には8枚である。なお、各層位の詳細な観察は行いなかったことと、遺物の取り上げ時とベルトセクション実測時の層位認識が異なっているため、注記とは一致しない。

第I層 褐色土 (7.5YR4/3) 表土、耕作土である。現状は廃土を除去した状態であり、耕作土が一部除去されていて、本来の地表面よりは若干下がっている。

I a層 褐色土 (7.5YR4/6)

第II層 褐色土 (7.5YR4/3) 第I層に比べて、礫を多く含む。

II a層 明褐色土 (7.5YR5/6) 磯を多く含む。

第III層 灰褐色土 (7.5YR4/2) ~褐灰色土 (7.5YR4/1)

粘土分を含む。

第IV層 明褐色土 (7.5YR5/6) 磯まじり。

第V層 褐色土 (7.5YR4/4)

第VI層

VI a層 明褐色土 (7.5YR5/6) 磯まじり。

VI b層 褐色土 (7.5YR4/6) こぶし大の礫を多く含む。

VI c層 褐色土 (7.5YR4/3) 径2~3cmの礫を混入する。

VI d層 明褐色土 (7.5YR5/6) 磯まじり。

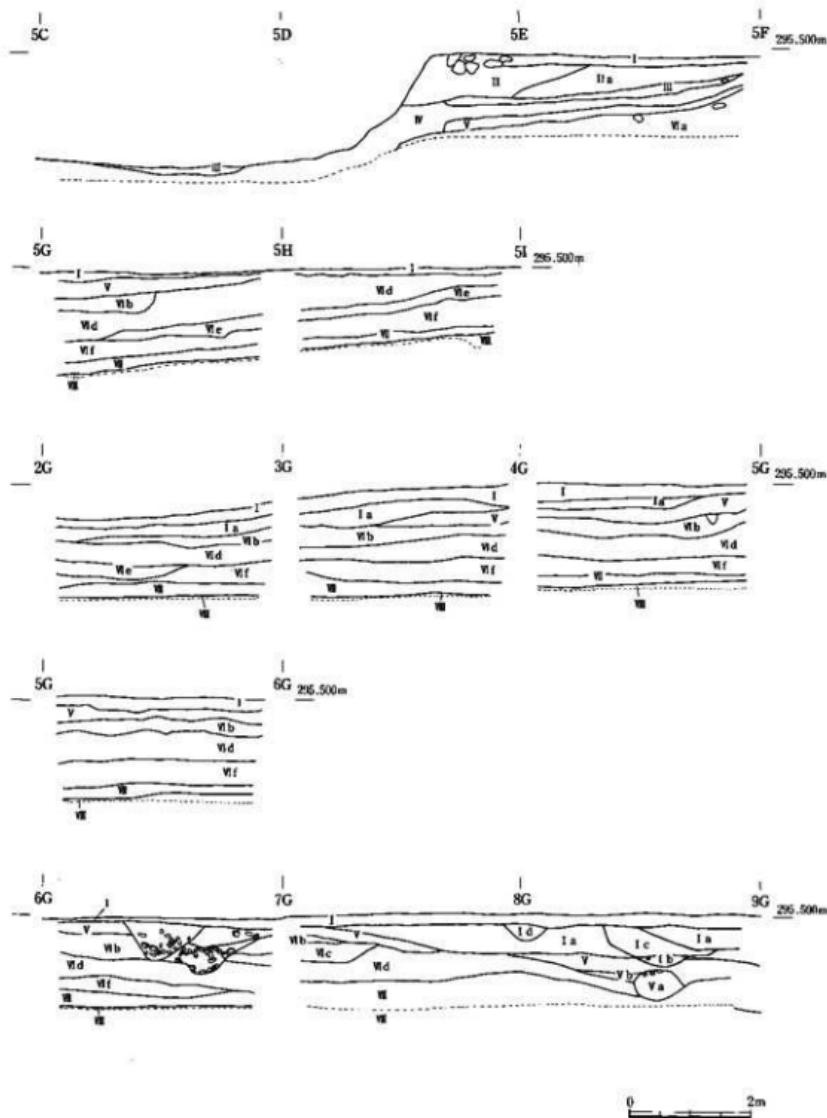
VI e層 明褐色土 (7.5YR5/6) 砂礫まじり。

VI f層 明褐色土 (7.5YR5/6) 磯まじり。

第VII層 褐色土 (7.5YR4/4) 砂質土。

第VIII層 黒色土 (7.5YR2/1) 粘性あり。

なお、調査段階では予想通り厚い土砂が覆っており、このため明確な包含層についてはとらえることができなかった。普賢寺跡と考えられる遺構の存在も、調査区内からは確認すること

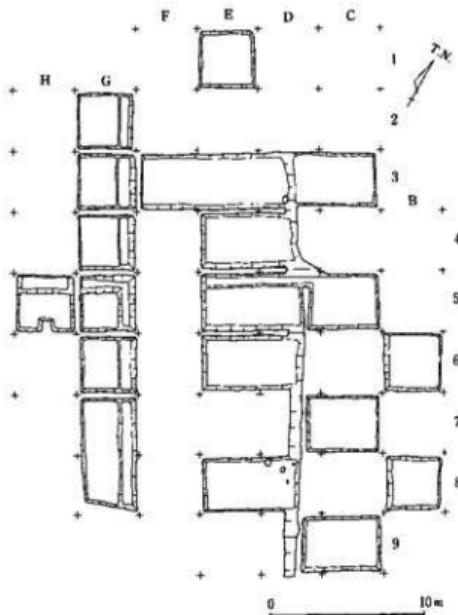


第38図 普賢寺跡土層図

ができなかった。また、縄文時代の遺物が若干ではあるが出土しているが、その性格については十分に把握できたとはいえない。第Ⅳ層は黒色土で、所謂「地山」としてとらえたが、さらに下層の遺構並びに包含層の存否については確認の調査は実施していない。また、段丘疊層まで掘り下げることはできなかった。

第2節 遺構と遺構出土の遺物

普賢寺跡に関連すると考えられる遺構は、約1.5mの深さにまで掘削を進めたが、調査区においては確認ができなかった（第39図）。遺物では、縄文時代の遺物、中近世遺物が若干出土しているが、これに伴う遺構は確認ができなかった。



第39図 普賢寺跡発掘状況

第7章 普賢寺跡の包含層出土の遺物

第1節 土 器

普賢寺跡から出土した土器は縄文土器で、表採資料も含めて56点である。出土土器はすべて包含層からの出土であるが、出土状態は散漫で、既報の下開田村平遺跡の周辺地としての様相を呈すると考えられる。全般に磨耗が著しい、小片が多い。

遺物のほとんどは晩期後半以降の突帯文・条痕文系土器（突帯文土器研究会1993）であるが、いずれも小片で詳細について観察ができないものが多い。部位によって次の4類に分けるが、同一個体の上下関係となるものもあると考えられる。

1類 口縁部、頸部資料をこれに一括する。貼り付けの突帯を有するものと、突帯を持たないものがある（第40図、図版32）。

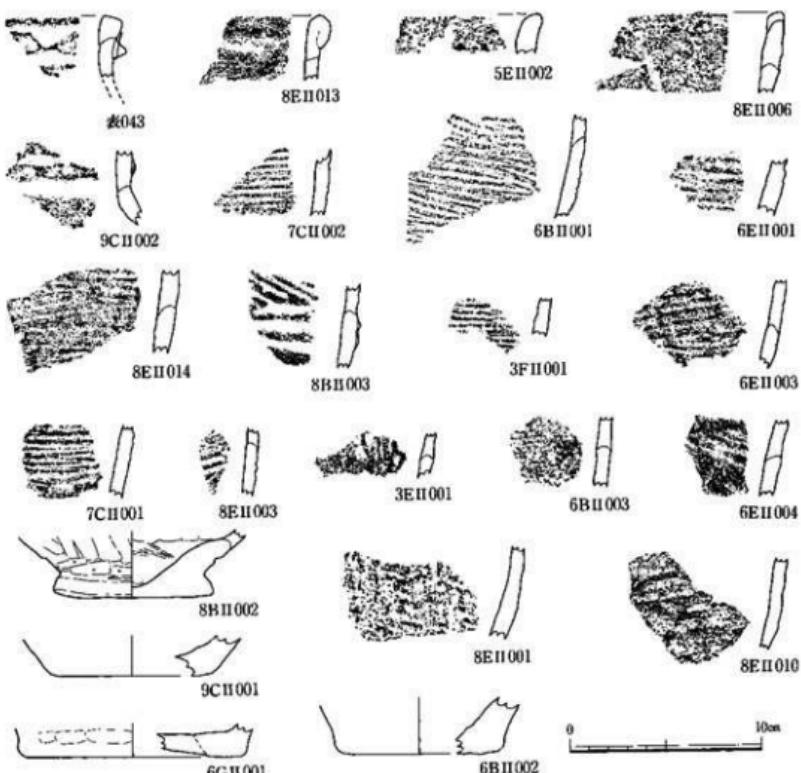
表採043は突帯を有する口縁部である。やや外反しながら立ち上がるが、胴部にかけてはややふくらむ器形となる。端面は約10mmの面をとり、やや外傾する。器壁は約6mmと比較的薄いが、口縁端部にむかうにつれて厚みを増す。口縁に接して粘土紐を貼り付け、指腹による押圧と指によるつまみ上げによって突帯をつくる。突帯部分の高さは約7mmを測る。表裏ともによい橙色（7.5YR7/4）を呈し、長石粒に混じって金雲母も若干混入する。焼成は比較的良好である。

8EII013は外への折り返しにより素文突帯を設ける土器である。器形はやや外に開くが、頸部にかけてふくらむ壺形土器のII縁部である。粘土紐の接合部で欠損しているが、おそらくはこの部分に2条目の素文突帯が巡る。表裏共明褐色（7.5YR5/6）を呈し、胎土には金雲母を多く含む。

5EII002は外反する口縁部。指によるつまみ上げで端部を整形している。器壁は12mmと比較的厚い。表裏共に明褐色（7.5YR5/8）を呈し、胎土には粗砂を多量に含む。焼成は比較的よい。

8EII006はやや外反しながら立ち上がる口縁部。一度擬口縁を形づくった上で、粘土紐を貼り付けて口唇部を作る。粘土紐の接合痕は明瞭である。器面にスス状の炭化物が付着し、土器の割れ口にも多量のススが付着している。これは、口縁の一部が欠損した後も煮沸具として使用されたことを表していると考えられる。表面は明赤褐色（5YR5/6）～橙色（7.5YR6/8）、裏面は褐色（7.5YR4/6）を呈する。

9CII002は器厚6～9mmの器壁を有する壺形土器の頸部。頸部やや上で粘土紐の貼り付けに



第40図 表探、包含層出土の土器

より低い低突帯を設け、その上から棒状工具によって左から右へ押圧を加える。外表面の調整は不明だが、条痕文を施した痕跡が浅く認められる。色調は表裏共に明褐色(7.5YR5/8)で、胎土には雲母はほとんどみられない。焼成は比較的良好。

2類 胸部資料をこれに一括する。条痕文を施すものと、ケズリによる調整痕を持つものがある(第40図、図版32)。

条痕文を有するものが多く、ほとんどが深鉢形土器の胸部片と考えられる。8EII003、6BII001、6EII001は、条助1条の幅が3~4mmと比較的発達した貝殻を工具に用いており、いず

れも横位に施文される。6BII001の施文方向は左から右。いずれも長石粒、石英粒を多く含有するが、雲母は少量にとどまり、多量に混入するものは認められない。表面はにぶい褐色(7.5YR5/4)～褐色(7.5YR4/3)が多いが、6EII001はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈する。焼成は良好なものが多い。

8EII001は表面全体に斜位の条痕調整を行った後、ケズリによって条痕が消されている。ケズリの方向は一定しない。表面は明黄褐色(10YR6/8)、裏面も同色(10YR6/6)を呈する。

8EII010の下半分は条痕調整を施した後に、板状工具により左から右へケズリ調整を行うことで条痕を消している。上半分もケズリを施すが、工具は不明。表面は褐色(7.5YR4/6)、内面は赤褐色(5YR4/6)である。

3類 底部資料をこれに一括する（第40図、図版33）。

8BII002は底径8.3cmの平底の底部であるが、完全なフラットではなく、圧痕状の凹凸が見られるがその内容は不明である。器厚は最も厚い部分で約2.5cmであるが、中心部分は約6mmを測るにすぎない。外表面には縦位のケズリを胴部に施し、底部との境には右から左へのケズリを施す。表面はにぶい黄褐色(10YR5/4)、内面は黄褐色(10YR5/6)を呈し、胎土には多量の砂粒を混入するが、雲母はほとんど見られない。焼成は比較的良好。

9CII001は推定底径8.6cmの平底の底部である。小片で詳細は不明。色調は表面がにぶい橙色(7.5YR6/4)、内面はにぶい黄橙色(10YR6/3)～褐灰色(10YR4/1)を呈する。細かい砂粒を胎土に多く含む。

6GII001はやや外反しながら立ち上がる胴部を有する底部片。推定底径11.5cmで、中心部分は所謂上げ底となる。外表面には指による押さえが認められるが、その他は不明である。表面は黄褐色(10YR5/6)、内面は橙色(7.5YR6/6)を呈する。胎土に黒雲母を含んでおり、他の土器と異なった様相を見せる。

6BII002は推定底径8.8cmの平底片。調整は不明である。表裏共に明褐色(7.5YR5/6)を呈する。

これらの他に、摩滅が甚だしく流入と考えられる資料が1点ある。8BII001は厚い器壁を持つ小片で、台部の可能性がある。そうであるならば、中期末にまでさかのほる可能性があるが、断定はできない。

普賢寺跡より出土した縄文土器は、ほとんどが縄文時代晩期後半以降の突帯文・条痕文系土器である。小片で不明な点が多いが、判別できる範囲では条痕文土器にまで下る資料は少なく、突帯文土器の新しい段階が散見される。8EII013は、所謂「伊勢タイプ変容壺」と呼ばれ

る土器の口縁部と考えられ、やはり突帯文土器の範疇で理解できよう。

第2節 石 器

普賢寺跡から出土した石器群は、石鎌1点、打製石斧7点、剥片石器1点の総計9点とわずかである。時期は共伴して出土している縄文時代晚期の突帯文・条痕文系土器と同じ時期と考えられる。その他の石器や剥片が1点も出土していないことなどの石器組成からみたこの遺跡の性格は居住域ではなく、採集地的なものであると考えられる。以下に各器種について述べる。

石 鎌 (第41図、図版34)

5E II 001 1点のみである。サヌカイト製で表皮部が浅くえぐられており、尖頭部の平面は二等辺三角形を呈している。

打製石斧 (第41図、図版34)

7点中4点を図示した。5C II 002、3G II 001、8E II 002は砂岩製でどれも一部に川原石のものと思われる自然面の表皮を残している。1E II 002のみが凝灰岩製でこれも川原石と思われる自然面の表皮を残している。図示しなかった3点も同様の自然面が見られ、これらはすべて川原石を削った一次剥片を整形して製作されたものと考えられる。折損がみられるものは5点あり、折損の部位による分類 (第30図) では、Bが2点、Cが2点、Dが1点である。

剥片石器 (第41図、図版34)

5C II 001 1点のみ出土した。硬くて緻密な砂岩の円盤を素材としている。円盤を割った一次剥片の縁辺を刃部とし、側縁を打ち欠いて整形している。

石 鎌

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)		備考
1	5E	II	001	サヌカイト	16.2	12.8	2.8	0.5		

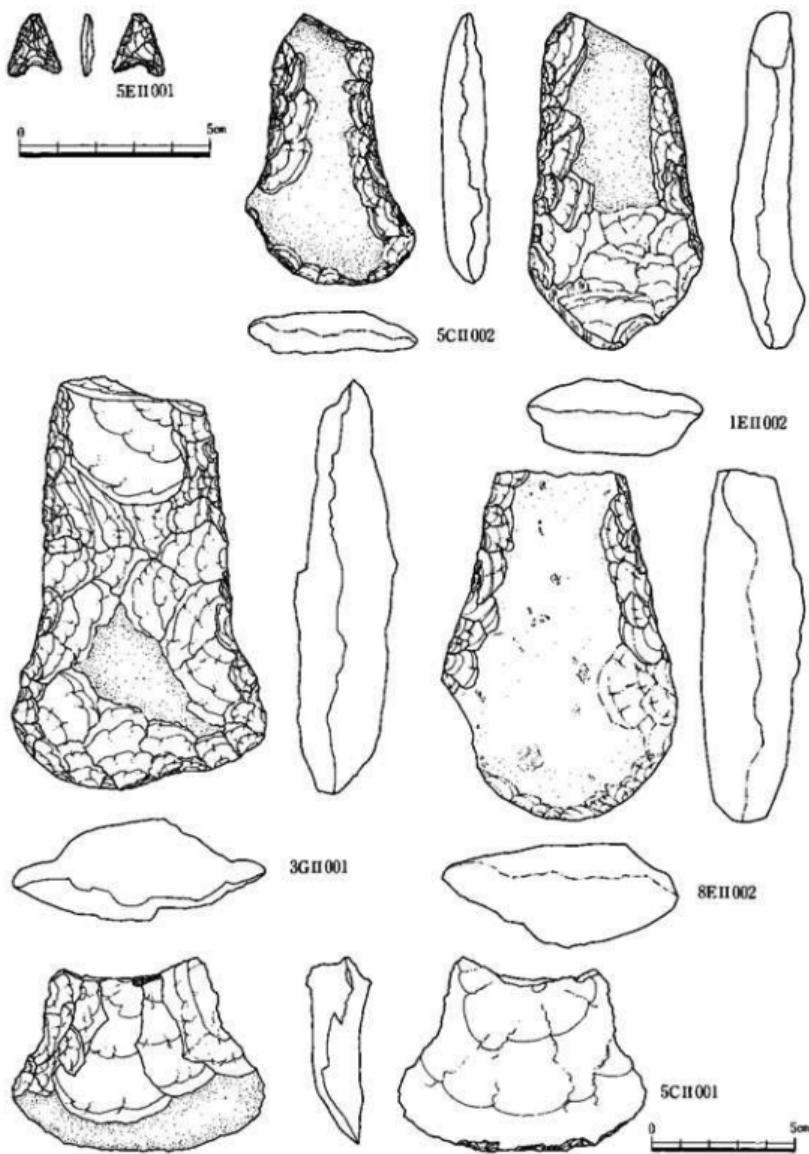
打製石斧

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)	分類	折損分類
1	1E	II	001	砂岩	(138.7)	106.8	27.9	(518.0)	バチ	B
2	1E	II	002	凝灰岩	115.0	59.2	18.4	155.9	バチ	C
3	3G	II	001	砂岩	144.8	89.7	33.0	405.0	バチ	
4	5C	II	002	砂岩	93.4	59.7	15.3	91.6	バチ	
5	6E	II	001	砂岩	(79.3)	(83.8)	(18.0)	(157.2)	バチ	B
6	8E	II	001	砂岩	(98.5)	(80.5)	31.5	(403.8)	不明	D
7	8E	II	002	砂岩	(122.5)	76.5	33.4	(386.1)	バチ	C

剥片石器

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)		備考
1	5C	II	001	硬砂岩	(63.9)	88.7	18.5	(113.6)		

第4表 包含層出土石器計測表



第41図 包含層出土の石器

第3節 陶器等

普賢寺跡出土の陶磁器等は、表採を含め総点数53点である。寺院伝承地の確認発掘調査であったが、遺構の確認はできず、遺物の出土も極少量である。近現代磁器が若干確認されているが、中近世陶器がほとんどである。尚、本節では陶器等を下記のように分類記載した。

- 1類 瓶類
- 2類 盆類
- 3類 鉢類
- 4類 壺類
- 5類 香炉類
- 6類 その他

1類 瓶類（第42図、図版35）

古瀬戸平碗（表採003、020）

表採003は推定底径4.6cm。体部内面および体部外面上半に灰釉が施されており、高台周辺は露体である。表採020は胴部片であり、表採003と同一個体と推定される。15C中頃。

瀬戸美濃塗り分け碗（3E II 002）

推定底径5.0cm。底部内面は灰釉、高台周辺は白釉が施されている。尚、高台接地面の釉は拭い取られている。18C。

瀬戸美濃御室茶碗（表採018）

推定口径11.2cm。体部はほぼ直立し、口縁直下がややくぼむ。18C。

瀬戸美濃広東茶碗（3E II 003）

推定口径11.0cm。体部外面に呉須絵による文様が描かれている。施文後、全面に透明釉が施されている。19C。

2類 盆類（第42図、図版35）

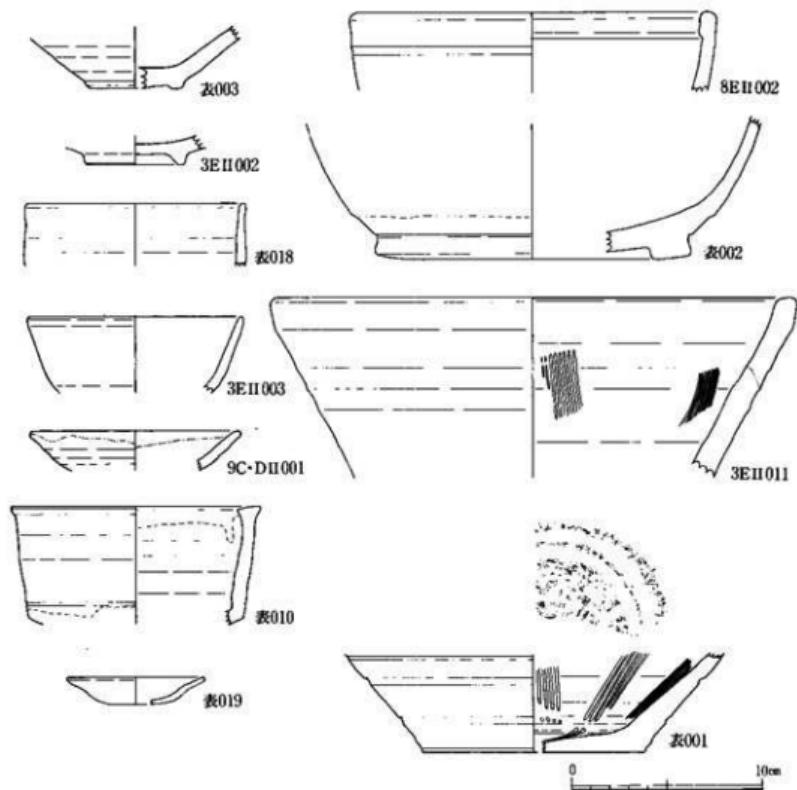
古瀬戸緑釉小皿（9C・D II 001）

推定口径11.0cm。口縁部内外面に漬け掛けによる灰釉が施される。形状は、体部が直線的に開くもので、内外面および断面には2次的に炭化物が付着している。15C前半。

瀬戸美濃丸皿（8E II 001）

高台接地面以外に灰釉が施される。16C中頃。

3類 鉢類（第42図、図版35～36）



第42図 表採、包含層出土の陶器等

越前檣鉢（3E II 011）

推定口径27.8cm。体部は直線的に開き、口縁部はやや立ち上がり気味である。口縁端部は、ほぼ水平に面取りされ、面取り部中央には1条のくぼみがみられる。檣目の1単位は不定。14~15cm。

瀬戸美濃檣鉢（表採001）

推定底径11.6cm。体部は直線的に開く。外面は、ヘラ削り調整が行なわれ、内面はかなり磨耗している。底部中央の器厚は薄く、底部と体部の接合部分の調整は難である。檣目の1単位は5本で、その原体幅は1.7cmである。内外面に錫釉を施す。15C後半。

瀬戸美濃片口 (8E II 002)

口縁端部は、内側に折り返され体部と結合し丸く収まっている。口縁部外面直下に浅い沈線が一周する。内外面共に灰釉が施されている。18C。

瀬戸美濃線跡 (表採002)

推定底径16.8cm。削り出し高台。体部は丸みを帯びながら立ち上がる。体部内外面に灰釉を施すが、高台周辺は露体である。また、底部内面にはトチンによる重ね焼きのために、一部分釉が拭い取られている。19C初頭。

4類 壺類 (図版35)

瀬戸美濃壺 (9C・D II 002、表採034)

共に体部外面に灰釉が施されている。15C前半。

5類 香炉類 (第42図、図版35)

古瀬戸筒形香炉 (表採010)

推定口径13.2cm。体部内面のロクロ目は顕著である。口縁端部は内傾して面取りされており、その両方向に挽き出されているため、中央が若たくぼんでいる。体部外面下方に、浅い沈線がみられる。口縁部内面から体部外面下半にかけて灰釉が施される。15C後半。

6類 その他 (第42図、図版35)

かわらけ (表採019)⁽¹⁾

推定口径7.2cm。口縁部内外面に、炭化物が付着している。

注

(1) 調査日誌では6Bブリッド第II層出土とある。

第8章 普賢寺跡と中近世の漆原村

普賢寺跡の調査は、工事によりここへ捨てられた土砂を重機を用いて除去することから始まり、降雪にせきたてられるように終了するという、困難な調査となった。調査の結果は、普賢寺伝承地にかかる遺構を検出するには至らなかった。普賢寺跡については、第2章第3節で既に述べたように、伝承と伝承地からの出土とも伝えられる五輪塔が残されているだけで、文献によってその存在をうかがうことはできない。しかし、旧徳山村は古くからの文化と共に伝承を非常によく伝えてきた村であり、以前より民俗学的に注目を集めてきた村でもある（桜田1951）。1993年に山手字沢焼にある寺屋敷跡の調査において、「寺屋敷」または「觀音尾敷」伝承地より平安時代後期の礎石建物跡が検出されたように（岐阜県文化財保護センター1993）、伝承の持つ意義を軽視することはできない。ここで調査の結果に加えて、從来の知見と徳山地区に伝わる伝承を合わせて検討しておきたい。

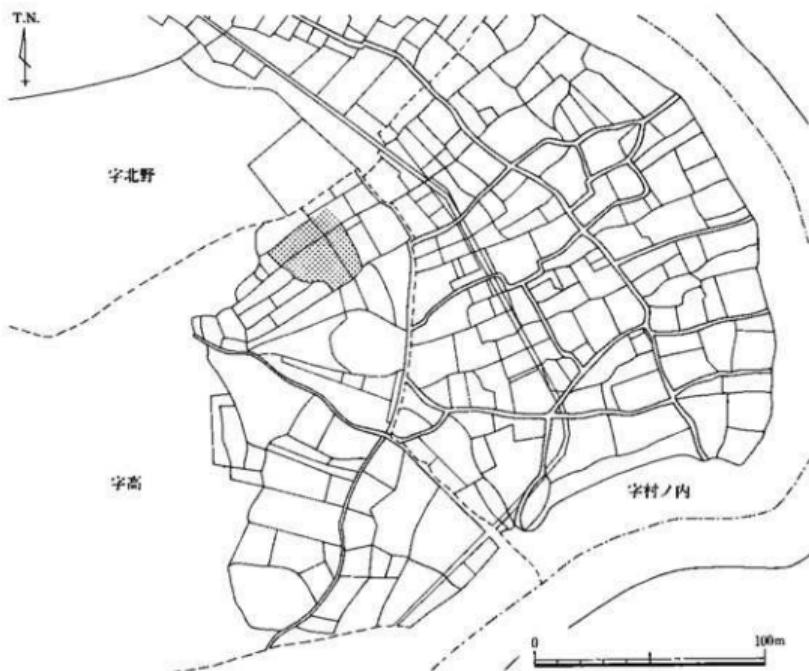
第1節 近世の漆原村

調査で出土した中世以降の遺物は、表掲も合わせて53点にとどまった。内容は近現代磁器が若干出土しているが、中世陶器がほとんどであった。これは、近現代において調査地が屋敷地としては用いられたことはなかったということとも符合する。出土陶器は15世紀と18~19世紀の2時期に分けられるが、15世紀の越前と瀬戸美濃系陶器が多く、16~17世紀の遺物が比較的少ないことが注意される。

普賢寺跡伝承地は地籍図で見ると、扇状地の扇頂部より放射状に分筆された扇尖部のはば中央よりに位置する。現在の国道417号が下位段丘の上位段丘寄りを通るが、かつては川よりに通る道が主道であり、「コンサツ」（高札場）等の地名もこれに沿って残っている。伝承によると、下開田集落はこの旧道沿いに家屋が広がり、人口と世帯の増加によって奥へと集落が広がっていった。調査地付近の地籍が、短冊状に奥へ伸びているのは開墾の過程を表すものと考えられている。⁽¹⁾ その中にあって、普賢寺跡の伝承地が短冊状にはならずに、一筆の区画を主としていることが注意される。

下開田はかつては池田郡漆原村であり、明治8（1875）年に池田郡池田村と合わせて池田郡開田村となり、明治22（1889）年に他村とともに徳山村へ合併した。文書に見る漆原村の初見は慶長14（1609）年の『濃州大野郡漆原村御縄打水帳』であり、その後正保2（1645）年の石高帳『美濃郷帳』には池田郡志津原村とある。

慶長の検地帳によると、漆原村の名請人は49人で、このうち屋敷持ちは12人と推定されてい



第43図 普賢寺跡周辺の地籍図(アミが普賢寺跡伝承地)

る。これによると、屋敷持ちに比して名請人が多く、これらの人々は屋敷持ちでなかったか、あるいは屋敷持ちに属していたと考えられている(大牧富士夫1985)。この検地高のうち、一反以上の名請人は13人で、平均の名請高は7畝にとどまり、しかも水田は皆無である。漆原村宗旨人別帳によると嘉永5(1852)年においても、家数は14と屋敷持ちの増加は見られないが、屋敷を持たない名請人はここでは消えている。

正保郷帳では漆原村の石高は太閤検高23石6斗5升(畠方19石5斗9升1合、山年貢4石5升9合)、外高(畠高)29石7斗6升の計53石4斗1升となっている。元禄高寄帳でも漆原村の村高はほとんど変化がなく、この石高は宝暦12(1762)年、明和2(1765)年、明和8(1771)年、そして幕末まで全く変わらない。これは開墾が元禄頃までにはほとんど極限に達していたことと、段木の流送という取税法によっているために開墾のつどの記録がとられる必要がなかったためと考えられている。慶応4(1868)年の郷帳によても石高に変化は見られないが、明治14(1881)年の村明細帳によると、開田村(旧漆原村、旧池田村)の水田は6町7反2畝22歩となり、水田開発がここで進んでいる。しかし、普賢寺跡伝承地の高が水田として開発され

るのは、明治21年の漆原用水掘削の後と考えてまず間違いない。

かつてここが水田や、屋敷地としては用いられてはこなかったと考えられるところから、今回の調査で出土した遺物の性格は、屋敷地にかかるものであると一概に特定することはできない。遺物から見た普賢寺跡出土遺物の中近世第Ⅰ期（15世紀）は、記録の上からは漆原村の実態は明らかではない。しかし、第Ⅱ期（18～19世紀）にはこれまで見てきたように若干の記録が登場し、村の姿は多少なりとも明らかになっている。中近世第Ⅱ期の遺物はこの時期の村の営みの中で、ここへもたらされたものと考えられ、商品経済の浸透が若干なりとも村へ及んでいたことをうかがわせる。

さて、普賢寺跡に近接し関連も深いと考えられる下開田村平遺跡は、大字開田字村ノ内にあって、下開田集落の中心地であったとともに旧漆原村の中心部分でもあった。この調査において、15世紀代の窯窓製品が見られる他は、18～19世紀の陶器類が出土している。16世紀後半の大窯製品も見られるが量的には少ない。ここで注意されるのは、普賢寺跡と同様に第Ⅰ期の遺物の次は第Ⅱ期に中心は移り、17世紀の遺物がどちらもほとんど見られないことである。17世紀は慶長の検地帳並びに正保郷帳によって、漆原村の存在が明らかである。しかし、この時期に陶器類が大量に漆原村へもたらされて使用されることは、少なくとも漆原村においては非常に少なかったのではないかと考えられる。徳山地区は木地師が活躍した地域であり、これらの木地師集団の生産による木地挽き製品が用いられた可能性が十分に考えられる。下開田村平遺跡、普賢寺跡の調査において木製品は検出されていないが、木製品が検出されにくい条件であることから、この推論の当否は将来に委ねねばならない。陶器類の出土が見られないことから、ただちに集落が営まれていなかつたと断定することはできない。

第2節 15世紀の徳山地区の様相

さて以上のように第Ⅱ期の遺物が漆原村の姿をある程度反映していると考えるならば、第Ⅰ期の遺物はどのような性格のものであろうか。15世紀について漆原村の資料は乏しいが、徳山地区全体に目を向けると、この時期には様々な資料が知られている。

まず、応永11（1404）年の徳山二郎右衛門尉貞信が没したこと記した「徳山家伝系図」には、「宗応寺有瀧州徳山」とある。ついで徳山出羽守常長の名が見られる永享3（1431）年の山鉄渡状によると、「はしさら」「やまで」「いそたに」「戸入」「つか」などの地名が見られ、15世紀の徳山地区の一端を垣間見ることができる。また文明4（1472）年の徳山家文書には越前朝倉氏に従っていたことを物語る記録が見られる。史料以外では、門入の八幡神社鰐口には文明8（1476）年の年号と共に「門丹生」とあり、上開田と戸入の間にかつてあり、廃村直前に行方不明となった地蔵尊には文明4年の記年と共に「増徳寺」と刻字されており、徳山氏支

配の下で宗応寺、増徳寺という寺院がすでに存在していたことがわかる。

さて、15世紀前半は徳山地区においては真言宗・天台宗の密教が盛んであったといわれ、中でも真言密教が隆盛を極めたと、徳山の各地区で伝承されている。廃村時には曹洞宗の増徳寺ただ1か寺だけであり、その他は浄土真宗誠照寺派、西本願寺派の道場が各集落に存在していた（岡野1985）。増徳寺は徳山五兵衛則秀の支配中の16世紀末～17世紀初頭に曹洞宗へと改宗したが、それ以前は天台宗、あるいは真言宗であったといわれている。密教系の影響の下で安置されたと考えられる宝篋印塔は門入（徳山村の歴史を語る会1984）、戸入、本郷、下開田において見られ、いずれも西谷沿いに分布している。宗応寺についてはその位置や宗派は明らかではないが、門人に真言宗であったという「相応寺」（揖斐郡教育会1924）の伝承地が伝えられており、戸入にも真言宗の寺院があったと伝承されている（増山・根尾ほか1982）。下開田の普賢寺と合わせて、これら密教系寺院伝承地の分布と宝篋印塔の分布が照合する。

一方、浄土真宗誠照寺派は川徳山村の約60パーセントを門徒とする宗派で、根尾村専念寺と福井県鯖江市西福寺を子繼寺とする。曹洞宗増徳寺が18パーセント、根尾村にある真宗西本願寺派の西光寺が16パーセントであるから、誠照寺派が占める割合は非常に高い。誠照寺派は福井県鯖江市誠照寺を本山とし、鯖江派ともいわれる。この誠照寺派の布教の時期は明らかではないが、誠照寺史によると、3代上人如覺（永仁5〈1297〉年～応長元〈1311〉年）に美濃布教が始まり、7代上人秀応（応永26〈1419〉年～文明15〈1483〉年）は誠照寺全盛時代の上人で、当時真照寺といわれた誠照寺の教説を加賀・能登・越中・美濃へと押し広めた。この時期に徳山の誠照寺派勢力は、確立したものと考えられる。秀応の晩年の文明3（1471）年には連如が吉崎に居を構え、誠照寺派など真宗他派を激しく攻撃した。これによって、誠照寺派の勢力は衰退を余儀なくされるが、徳山への影響はあまり及ばなかったようで、今日に至るまで誠照寺派の卓越する地域として、徳山は存在したのである。

さて、15世紀後半が真宗誠照寺派の強力な布教が徳山地区へ及んだ時期とするならば、徳山村史編集委員会1973が「真宗の強力な布教により、天台・真言等の寺院が頽廃したものと思われる」と述べるのは、十分に首肯しうるところであろう。普賢寺が下開田集落の人々によって記憶にとどめられ、地名・伝承として語りつがれてきた通りの真言密教の寺院であったとするならば、この時期に衰退したことは想像に難くない。

今回の調査では伝承を裏付ける遺構は何一つ確認することはできなかつたが、普賢寺跡出土遺物のうち中近世第Ⅰ期が、真宗の強力な教説進出の直前からそのまっただ中にあたることは、注意されてよいであろう。17世紀に漆原村が存続したにもかかわらず、この時期の陶器類がほとんど見られなかつたことを勘案すると、香炉等を伴う中近世第Ⅰ期の遺物が、普賢寺がかつて存在したことをうかがわせる遺物である可能性を指摘し、今後の検討に委ねたい。

註

(1) 大牧富士氏のご教示による。

第9章 結 語

1986年に徳山ダム建設に伴う考古学的調査が始まり、揖斐川上流域の遺跡のヴェールが次々に剥がされるにつれて、とくに縄文時代に関しては、これまで東海地方では空白であった部分が埋められたばかりでなく、時代観に変更を迫るような新知見も明らかにされて脚光を浴びるに至った。

今回の長吉遺跡の発掘では、縄文時代の土器・石器類約1,500点が出土したが、そのうちの中心をなすものは土器で、型式学的観点から、早期後半（第Ⅰ群）、早期末（第Ⅱ群）、中期（第Ⅲ群）、晚期後半（第Ⅳ群）の4群が識別された。第Ⅰ群はいずれも胎土に多量の纖維を含み、表裏両面に二枚貝による貝殻条痕文をもち、口縁部と頸部、頸部と胴部の境が屈曲するなど、広義の茅山下層式の特徴が明瞭である。

第Ⅰ群の装飾的な文様を施した土器が1～4類に類別できたのは特筆されてよいであろう。1類は文様帯に凹線文と連続刺突文を組み合わせた類、2類は竹管による凹線文とD字状刺突文を組み合わせた類で、ともに茅山下層式中段階の特徴を示し、文様帯に縄文施文後、半截竹管状工具又は円棒状工具による凹線文や蛇行する流文を加えた3類は、胎土・焼成が粗略化したもの、裏面に条痕文のないもの、縄文を多用するものなど、1・2類に比べてやや後出の要素が指摘される。4類にははっきりした屈曲部がなく、地文の条痕文も明瞭でなく、連続刺突文のみで施文されて凹線文ではなく、胎土・焼成とも粗くなるなど、茅山下層式の新しい段階に比定できる。

1987、1988両年度の小の原遺跡の調査においては、関東系の貝殻条痕文纖維土器は、野島式から鶴ヶ島台式—茅山下層式—茅山上層式へと躍進的に展開する様相が把えられ、近年ようやく東海地方で注目を集めようになつたこの時期の研究に先鞭をつけたが、今回さらに、当地方の茅山下層式の組成解明に糸口を与えることができたといえよう。

第Ⅱ群の指頭圧痕あるいは斜行条痕を突起上に施文した早期末～前期初頭の一群は、出土量こそ少ないが、小の原遺跡の早期末に繼起した柏畑式—上ノ山式—入海Ⅰ・Ⅱ式—石山式—天神山式—塩屋式の系列の終末段階を補足する資料である。中期後半の第Ⅲ群は極少量で、詳細は把みえなかった。

晚期後半以降の第Ⅳ群は出土点数約500点、推定個体数は60体を超え、馬見塚式から櫻王式にかけての遺物と思われるが、残念ながら小片の資料がほとんどで、その性格については不明な点が多い。この時期の資料は、徳山地区では、はいづれ遺跡からまとまって出土しており、遠賀川系土器との共伴関係の解明にも示唆が得られたが、その後、上原遺跡、山手宮前遺跡でも多量の資料が収集されているので、その整理の結果と合わせて、今後の検討に期待が寄せら

れる。

石器類は总数425点を数えるが、そのうち剥片・碎片353点と石核11点を除く定型石器類は10種類計57点で、伴出土器群からみて、それらは早期、晚期のいずれかに属する可能性は大きい。ただ、打製石斧24点を除くといずれも10点以下で、当時の生活様式や生業を考察できるまでには至っていない。

真言宗の寺院伝承地に由来する普賢寺跡の調査では、寺院に関する遺構は確認できなかった。縄文時代の遺物と中近世の遺物が若干出土してはいるが、これらに伴う遺構も確認できていない。

縄文時代の土器は表面採集品を含めて56点のみで、いずれも磨耗がはげしく小片が多い。そのほとんどは晚期後半以降の突帯文・条痕文系土器で、口縁部・頸部の資料によってみると、貼り付けの突帯のあるものとないものの別があり、胴部は条痕を施すものとケズリによる調整痕をもつものの両者がある。長吉遺跡の第Ⅳ群の範囲に入る一群であろう。

縄文時代の石器は石鎚1、打製石斧7、剥片石器1の計9点のみで、土器や石器の残存状態からは、ここに縄文時代に集落が営まれていたかどうかをうかがうことは難しい。

注目されるのは陶磁器類で、出土した53点のほとんどを中近世陶器が占め、中でも15世紀（第Ⅰ期）の越前と瀬戸美濃系陶器及び18~19世紀（第Ⅱ期）瀬戸系陶器類が中心となっている。

15世紀の徳山地区については、前半には真言宗・天台宗の密教が隆盛を極めたという伝承があり、密教の影響下に造営されたと思われる宝篋印塔が西谷川沿いに分布し、後半には真宗の強力な布教活動があって、密教寺院が衰退していったと伝えられている。今回の調査では、15世紀後半の香炉等を伴う遺物の出土によって、わずかに、その頃ここに、普賢寺が存在したことが想定できる。

下開田の地はかつては池田郡漆原村で、明治のはじめ開田村となりさらに1889（明治22）年、他村とともに徳山村へ合併した経緯があるが、この普賢寺跡伝承地周辺が水田として開発されたのは漆原用水開削の後、つまり徳山村合併のことと考えられるから、第Ⅱ期の遺物は、その頃の村の生活の一端を示すものといえよう。

さて、今回の両遺跡の発掘では、長吉遺跡の晚期の土器埋設遺構1基の他には、ほとんど遺構は検出されなかった。また、長吉遺跡では、多数のピット・土坑が認められたにも拘らず、調査期間中にこれらの実測図の作成や写真的撮影ができず、またそれらに伴う遺物を識別して取り上げることもしえなくて、その性格は明らかにされなかった。

9月から12月にかけての実質50日足らずの期間中に、相ついで調査を続行し、普賢寺跡では雨や雪のつづく悪条件下で作業を終えなければならなかつたとはい、今後の調査において留意しなければならない問題点の一つではある。

引用・参考文献

- 愛知考古学談話会 1985 「(条痕文系土器) 文化をめぐる諸問題—縄文から弥生—」。
- 赤星直忠・岡本 勇 1957 「茅山貝塚」『横須賀市博物館研究報告』(人文学科) 第1号。
- 赤星直忠・岡本 勇 1962 「横須賀市吉井城山第一貝塚調査概報(一)」『横須賀市博物館研究報告』(人文学科) 第6号。
- 阿部芳郎・恩田勇ほか 1990 「古屋敷遺跡発掘調査報告書」(富士吉田市史編さん室・古屋敷遺跡調査会)。
- 池田町 1976 「池田町史」(池田町)。
- 池田町教育委員会 1991 「池田町遺跡地図」(改訂版)。
- 伊藤樹樹・樋田通弘 1982 「美濃徳山村の切目石鉢(越美山系をめぐって)ー「徳山村の歴史を語る会」の活動より②ー」『岐阜史学』第76号。
- 井波一雄 1984 「徳山村の植物相について」『徳山村 その自然と歴史と文化(1)』。
- 揖斐川町 1971 「揖斐川町史」(揖斐川町)。
- 揖斐郡教育会編 1924 「揖斐郡志」。
- 揖斐郡教育会編 1992 「岐阜県揖斐郡 ふるさとの地名」。
- 揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い 1993 「久瀬村の遺跡」。
- 牛丸則太郎・桜田登雄 1963 「揖斐川上流域総合学術調査報告(地質)」『揖斐川上流域総合学術調査報告書』。
- 宇野治幸・佐野康雄ほか 1991 「小の原遺跡・戸入廻子森遺跡」(水資源開発公団・岐阜県教育委員会)。
- 宇野治幸・佐野康雄ほか 1993 「追分遺跡・下開田村平遺跡」(水資源開発公団・岐阜県文化財保護センター)。
- 大野町 1985 「大野町史」(大野町)。
- 大參義一・安達厚三 1972 「縄文時代」(『岐阜県史 通史編 原始』)。
- 大牧治子 1985 「地域研究 深原村」『美濃徳山村通信』第16号。
- 大牧富士夫 1985 「徳山村と村の伝説」『徳山村 その自然と歴史と文化(2)』。
- 岡野 清 1985 「中部地方の真宗道場建築」『徳山村 その自然と歴史と文化(2)』。
- 小川栄一 1952 「美濃の石器時代文化」。
- 小沢一弘 1975 「美濃徳山村宮ヶ原遺跡の縄文時代遺物」『古代文化』第27巻第10号。
- 小野真一・秋本真澄 1975 「ゆずり葉」(加藤学園考古学研究所)。
- 神奈川考古同人会縄文研究グループ編 1983 「シンポジウム 縄文時代早期末・前期初頭の諸問題 土器資料集成図集」『神奈川考古』第17号。
- 神奈川考古同人会編 1984 「シンポジウム 縄文時代早期末・前期初頭の諸問題 記録・論考集」『神奈川考古』第18号。
- 金子直行 1991 「茅山上層式土器の再検討」『埼玉考古学論集』。
- 金子直行 1992 「子母口式土器研究序説—子母口貝塚の実態と研究史を中心にして—」『縄文時代』第3号。
- 春日村 1983 「春日村史」(春日村)。
- 岐阜県教育委員会 1985 「揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区埋蔵文化財分布調査報告書」(岐阜県教育委員会)。
- 岐阜県教育委員会 1989 「はいづめ遺跡」(水資源開発公団・岐阜県教育委員会)。
- 岐阜県教育委員会 1990 「岐阜県遺跡地図」(岐阜県教育委員会)。

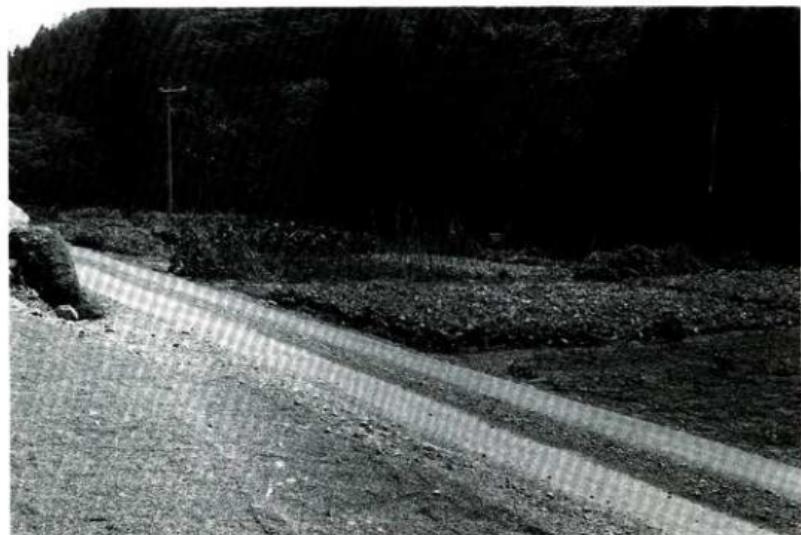
- 岐阜県文化財保護センター1993 「施山に埋もれた歴史を探る—1993年度徳山地区埋蔵文化財発掘調査現地説明会資料一」。
- 久瀬村 1973 「久瀬村誌」(久瀬村)。
- 久瀬村教育委員会 1993 「平安時代の久瀬の姿を求めて一大河原経塚範囲確認調査現地説明会資料一」。
- 蛭村 弘 1957 「東海の先史遺跡—美濃編一」。
- 小坂宗和 1989 「谷汲村深坂の貯水池より出土の遺物について」『美濃掛妻谷通信』第48号。
- 桜田勝徳 1951 「美濃徳山村民俗誌」。
- 真田幸成 1985a 「順成寺古墳群第一次発掘調査報告書」(池田町教育委員会)。
- 真田幸成 1985b 「順成寺墳之越第2号墳発掘調査報告書」(池田町教育委員会)。
- 真田幸成 1985c 「段1号2号古墳発掘調査報告書」(池田町教育委員会)。
- 沢島武徳 1984 「野鳥の生息からみた徳山村の自然」「徳山村 その自然と歴史と文化(I)」。
- 藤田通弘 1981a 「春日村内の遺跡踏査概要報告」。
- 藤田通弘 1981b 「岐阜県揖斐郡徳山村の遺跡—徳山村の歴史を語る会」の活動より—「古代文化」第33巻第11号。
- 藤田通弘 1982 「長吉遺跡(仮称)の巻—遺跡の話26—」『広報とくやま』第52号。
- 藤田通弘 1987 「大昔の徳山村—繩文人の足跡を追って—」(徳山村教育委員会)。
- 藤田通弘 1987 「掛妻谷の縄文遺跡 その1」「第5回掛妻谷の自然と歴史と文化を語る集いレジュメ集」。
- 藤田通弘 1988a 「掛妻谷の縄文遺跡 その2「藤橋村小曾根遺跡をめぐって」—」「第6回掛妻谷の自然と歴史と文化を語る集いレジュメ集」。
- 藤田通弘 1988b 「池田町の縄文文化—舟子遺跡①~④」「池田町文化連盟」第1号。
- 藤田通弘 1989 「ふるさとの遺跡の話13」「広報ふじはし」(藤橋村)。
- 渋谷昌彦・佐野五十三 1981 「木島 群岡県高士川町木島遺跡第4次発掘調査報告書」(高士川町教育委員会)。
- 渋谷昌彦 1982 「木島式土器の研究—木島式土器の型式細分について—」『静岡県考古学研究』第11号。
- 上嶋善治はか 1991 「藤原遺跡」(建設省・岐阜県文化財保護センター)。
- 鈴木裕範はか 1980 「西大曲遺跡発掘調査概報」(沼津市教育委員会)。
- 鈴木時夫・鈴木和子 1971 「日本海指数と潮戸内指数」『日本生態学会誌』第20巻第6号。
- 澄出正一・大參義一 1956 「九合洞窟遺跡」(名古屋大学文学部)。
- 瀬川裕市郎 1982 「丁母口式土器再考」「沼津市歴史民俗資料館紀要」第6集。
- 闇野哲夫 1980 「瀬ガ島台式土器細分への覚書」「古代探査 池口宏先生古稀記念考古学論集」。
- 闇野哲夫 1985 「茅山下層式土器について」『古代』第80号。
- 高橋順之 1993 「起し又遺跡発掘調査報告書—師川上流縄文早期・中期~後期遺跡の調査」(伊吹町教育委員会)。
- 谷汲村 1977 「谷汲村史」(谷汲村)。
- 徳山村の歴史を語る会 1984 「徳山村のあけぼのを求めて—岐阜県揖斐郡徳山村遺跡分布調査中間報告一」。
- 徳山村の自然と歴史と文化を語る集い編1984 「徳山村 その自然と歴史と文化(I)」。

- 徳山村の自然と歴史と文化を語る集い編1985 「徳山村 その自然と歴史と文化(2)」。
- 徳山村史編集委員会 1973 「徳山村史」(徳山村)。
- 突帯文土器研究会 1993 「突帯文土器から条痕文土器へ」。
- 中井均・ほか 1986 「穂山城遺跡—琵琶湖周辺縄文早期～晚期遺跡の調査一」(木原町教育委員会)。
- 中村俊夫・岩花秀明 1990 「岐阜県諸家遺跡出土の遺物から採取された炭化物とその抽出とフミン酸の加速器¹⁴C年代の比較」『考古学と自然科学』第22号。
- 中山英司 1955 「入海貝塚」(愛知県知多郡東浦町文化財保存会)。
- 馬場喜裕 1980 「白樺湖縄文遺跡調査概報」『岐阜史学』第72号。
- 日置弘三郎 1963 「近世における徳山村」『揖斐川上流域総合学術調査報告書』。
- 藤橋村史編集委員会 1982 「藤橋村史」(藤橋村)。
- 掘正人・ほか 1989 「横洞遺跡—岐阜市民公園整備計画関連事業一」(岐阜市教育委員会)。
- 増子章二・浜田晋 1989 「川崎市高津区子母貝塚調査報告」『川崎市市民ミュージアム紀要』第1集。
- 増子康真 1983 「ハツ崎1式土器をめぐって」『古代人』第41号。
- 増山たづ子・根尾弥七・ほか 1982 「徳山村の歴史と文化」『ゆるえ』創刊号。
- 松田順一郎 1991 「谷汲村深坂・名礼地区にみられる地形発達と考古遺跡—その1—」『第9回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集いレジュメ集』。
- 松田順一郎 1992 「谷汲村深坂・名礼地区にみられる地形発達と考古遺跡—その2—」『第10回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集いレジュメ集』。
- 松田順一郎 1993 「谷汲村深坂泥炭層の分析」『第11回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集いレジュメ集』。
- 松田順一郎 1994 「谷汲村深坂泥炭層の分析(続)」『第12回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集いレジュメ集』。
- 武藤貞昭・ほか 1994 「戸入村古遺跡」(永源開発公団・岐阜県文化財保護センター)。
- 桃野真光 1982 「石器を作るハンマー」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』。
- 谷沢良光 1977 「縄文時代早期末葉の遺構と土器編年—東海を中心として—(1)(2)」『史館』第8、9号。
- 横幕大祐・ほか 1991 「遠見塚古墳発掘調査報告書」(池田町教育委員会)。
- 渡辺誠・小笠原久和・ほか 1982 「形原遺跡発掘調査報告書」(蒲郡市教育委員会)。

図 版



1 長吉遺跡 発掘調査前の近景（1982年当時、徳山村の歴史を語る会提供）

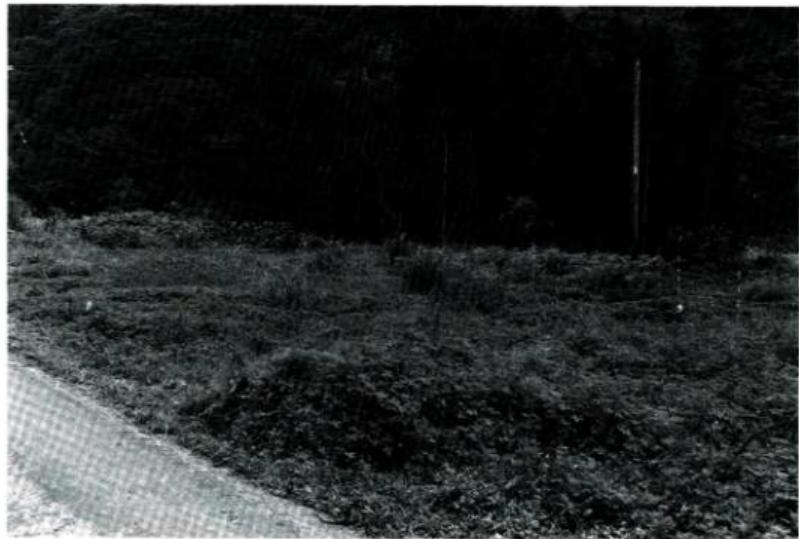


2 長吉遺跡 発掘調査前の近景（1982年当時、徳山村の歴史を語る会提供）

図版
2



1 長吉遺跡 発掘調査時の近景



2 長吉遺跡 発掘調査時の近景



1 長吉遺跡 調査状況



2 長吉遺跡 調査状況



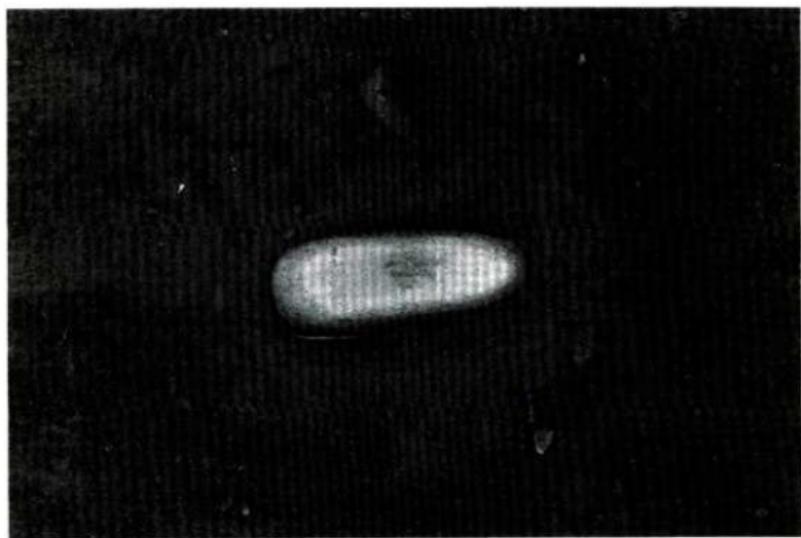
1 長吉遺跡 18Dグリッド土器埋設遺構検出状況



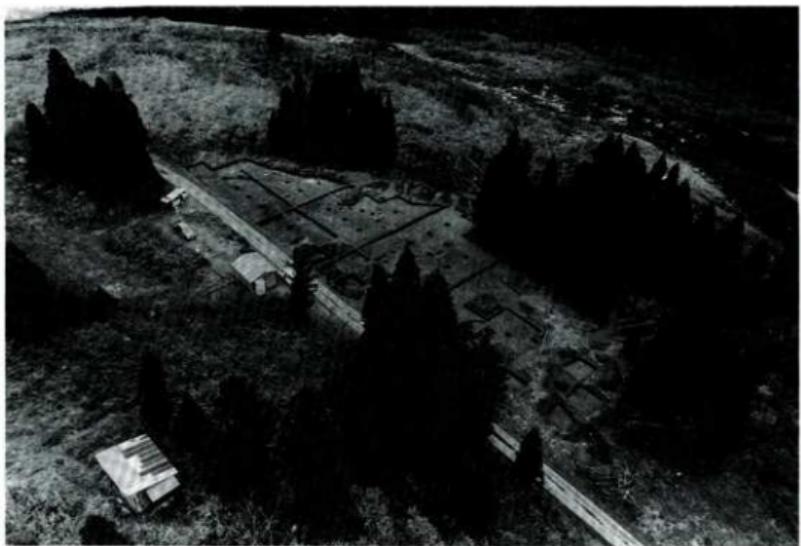
2 長吉遺跡 18Dグリッド土器埋設遺構検出状況



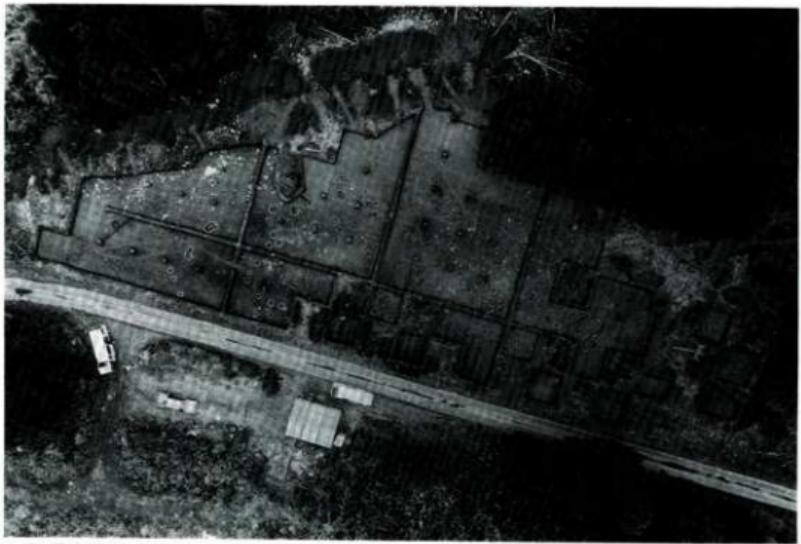
1 長吉遺跡 18Dグリッド埋設土器出土状況



2 長吉遺跡 磨製石斧出土状況



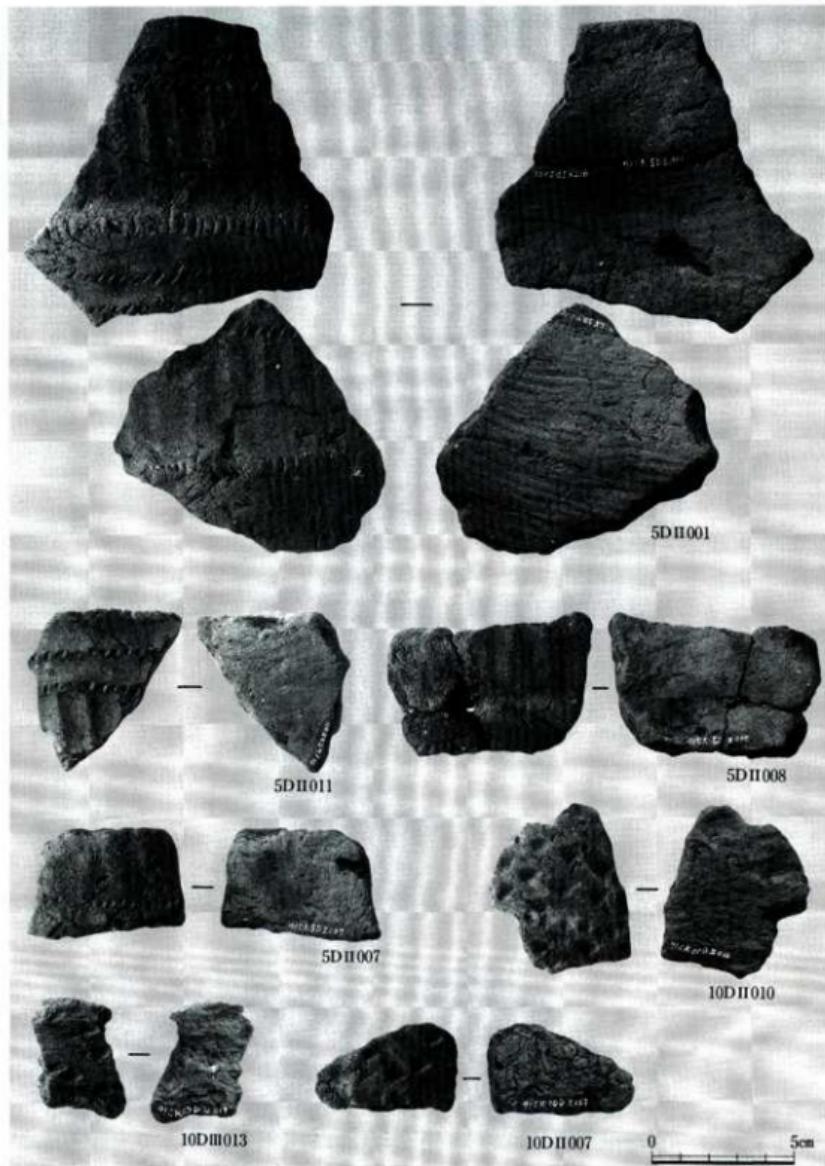
1 長吉遺跡 完掘状況



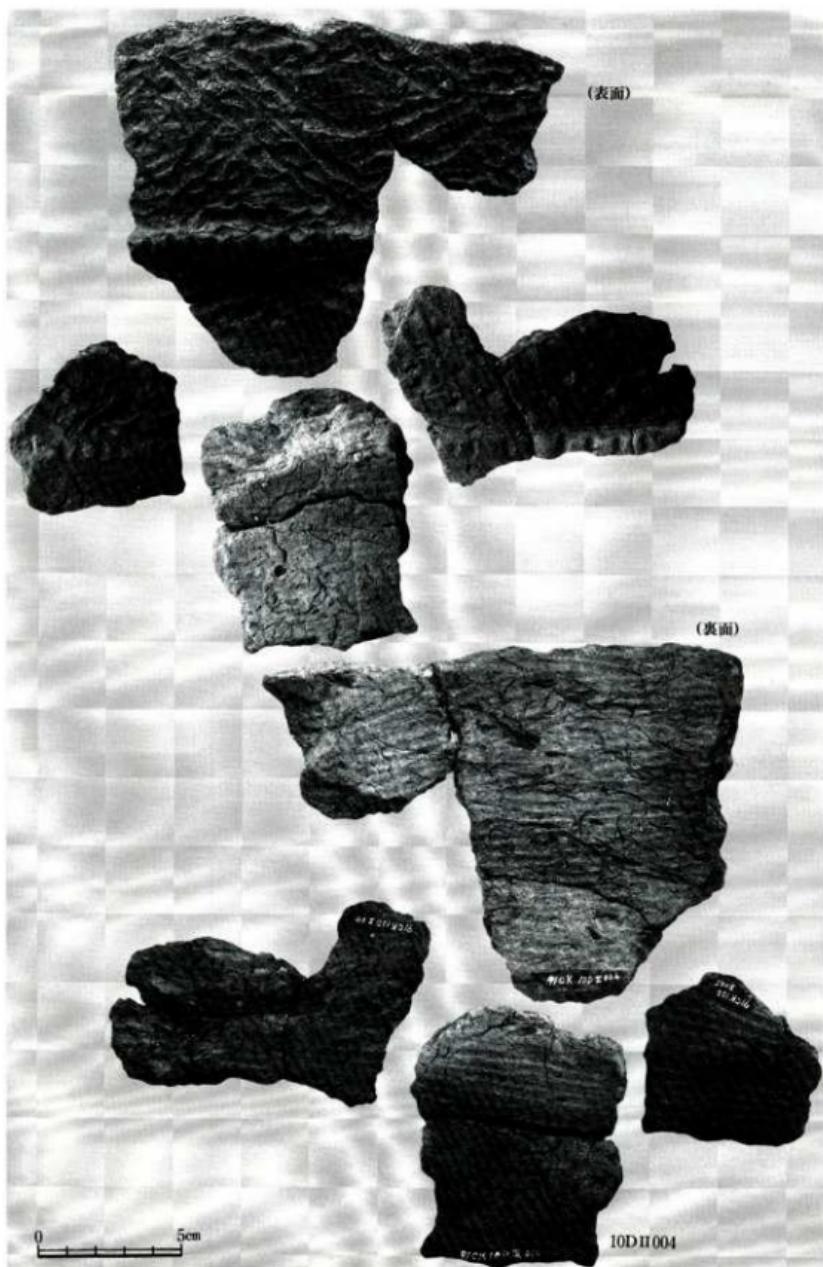
2 長吉遺跡 完掘状況



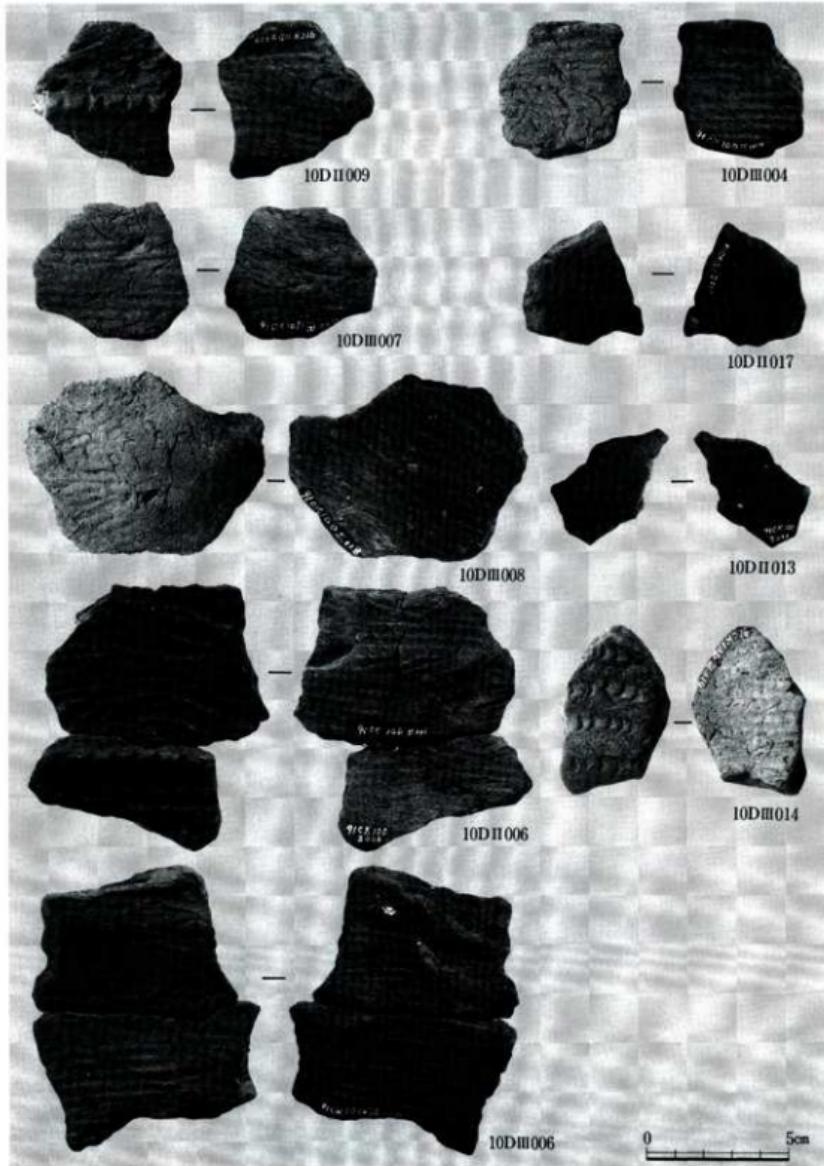
長吉遺跡 包含層出土の土器(I) 第Ⅰ群



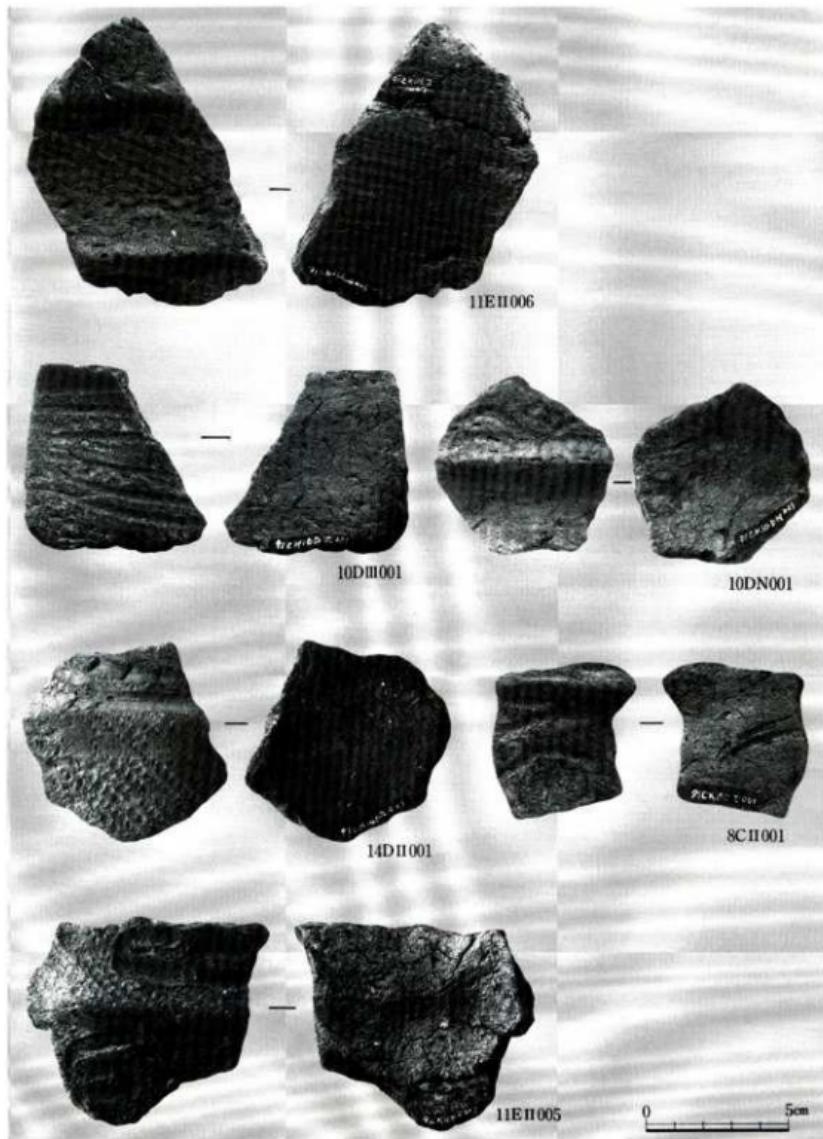
長吉遺跡 包含層出土の土器(2) 第I群



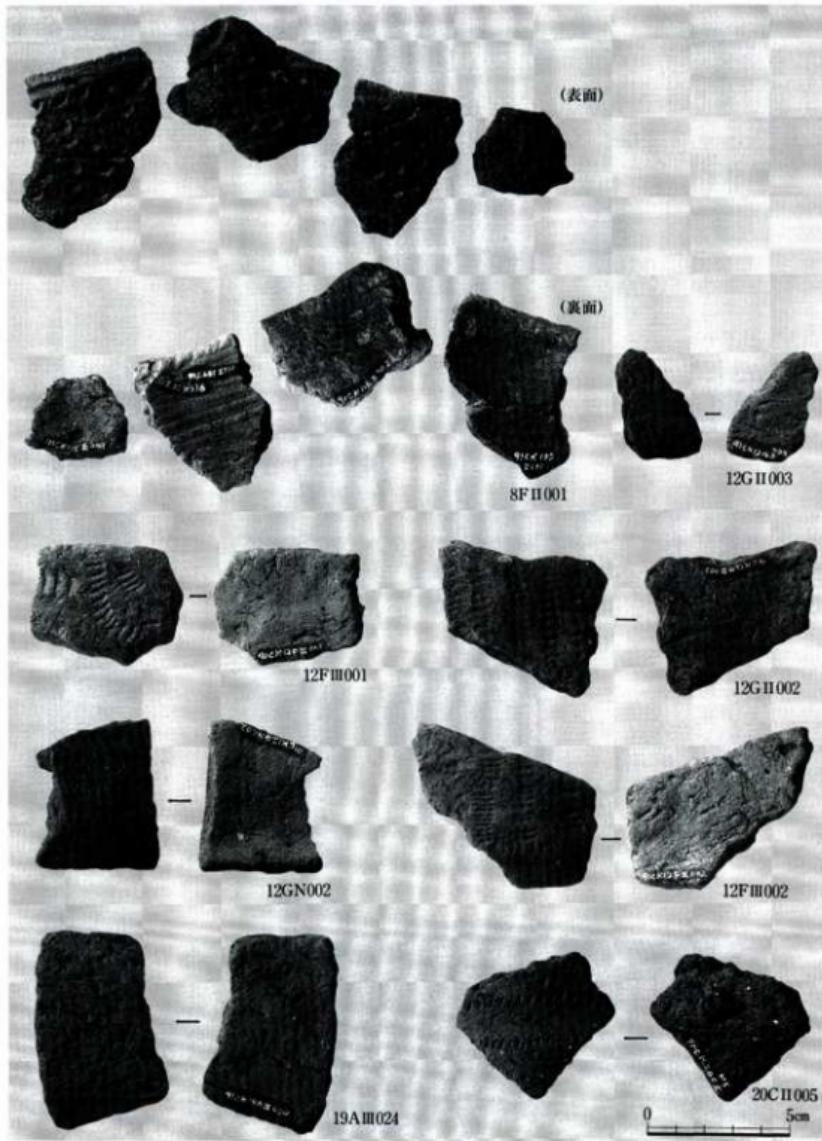
長吉遺跡 包含層出土の土器(3) 第Ⅰ群



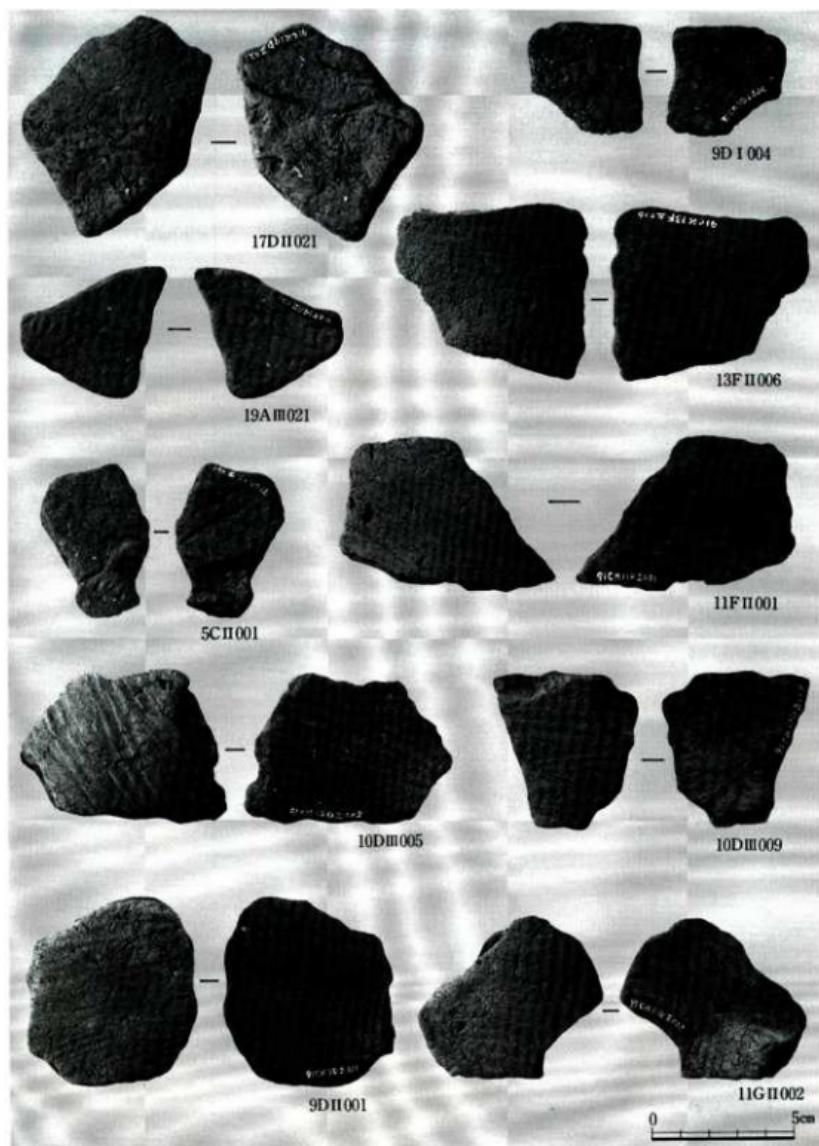
長吉遺跡 包含層出土の土器(4) 第Ⅰ群



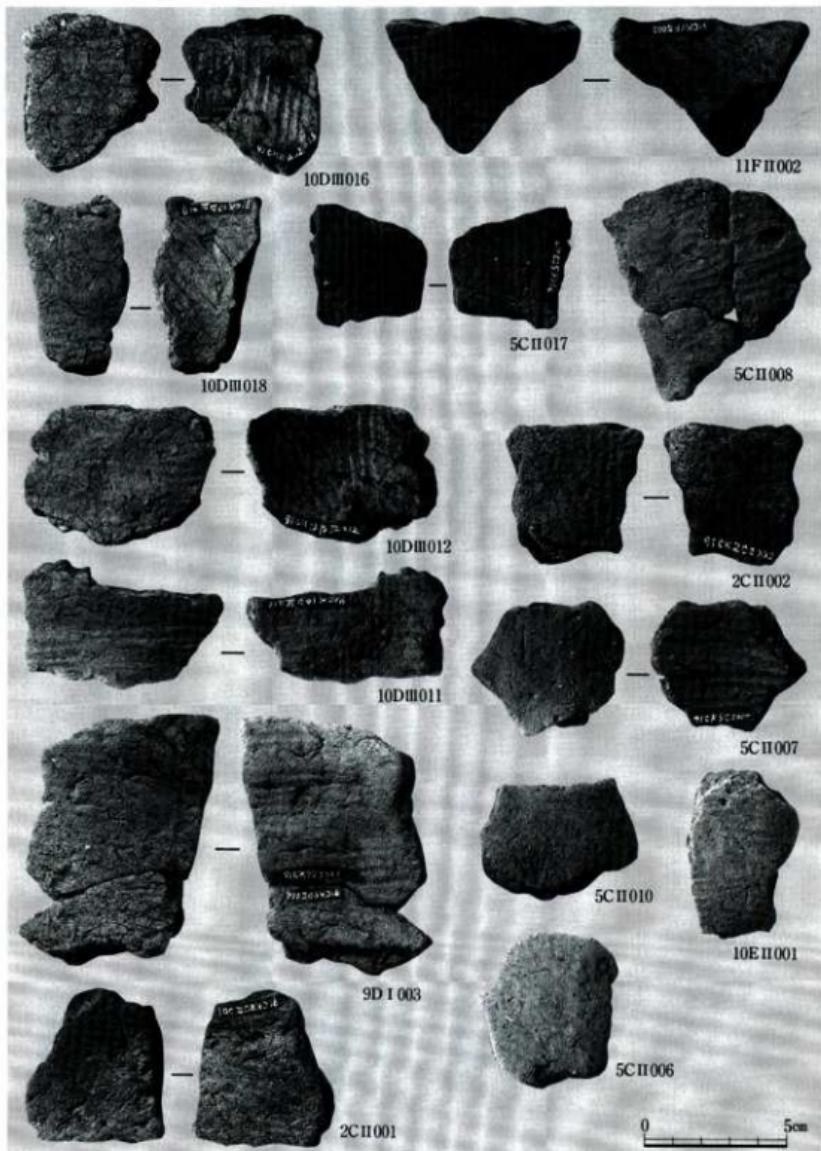
長吉遺跡 包含層出土の土器(5) 第Ⅰ群



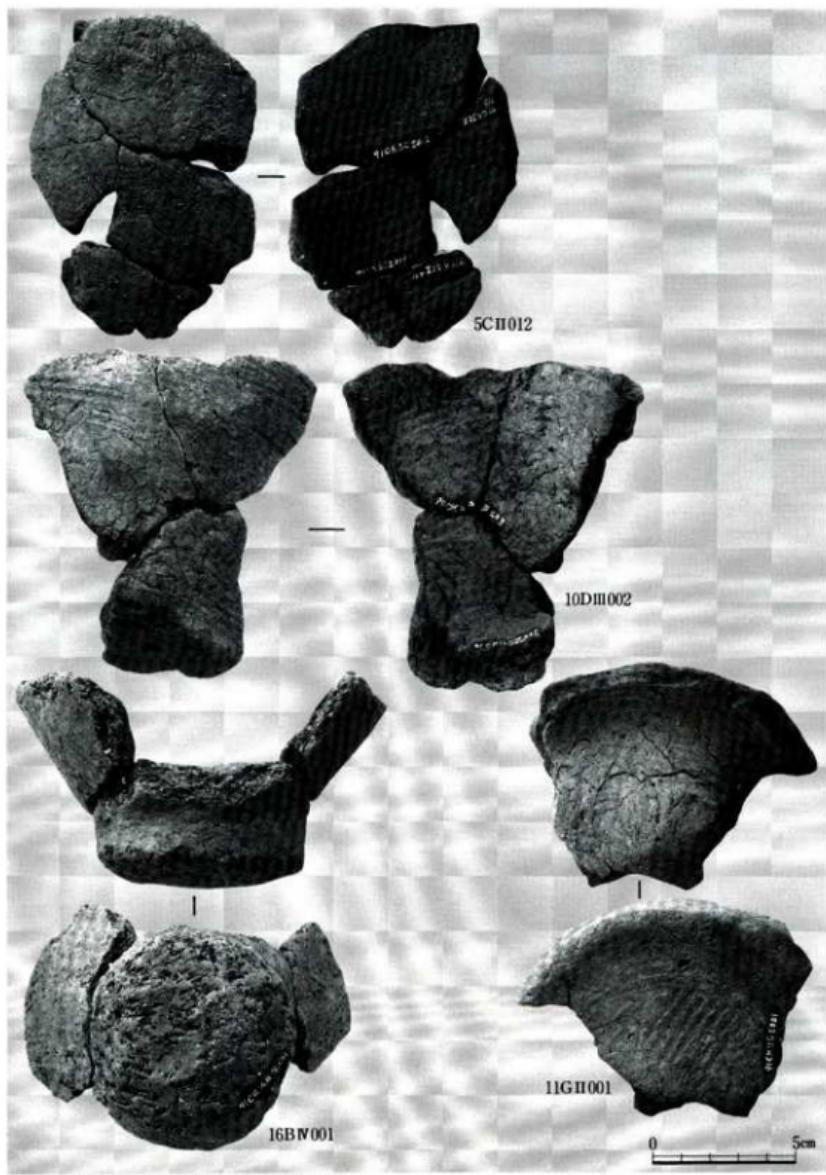
長吉遺跡 包含層出土の土器(6) 第Ⅰ群



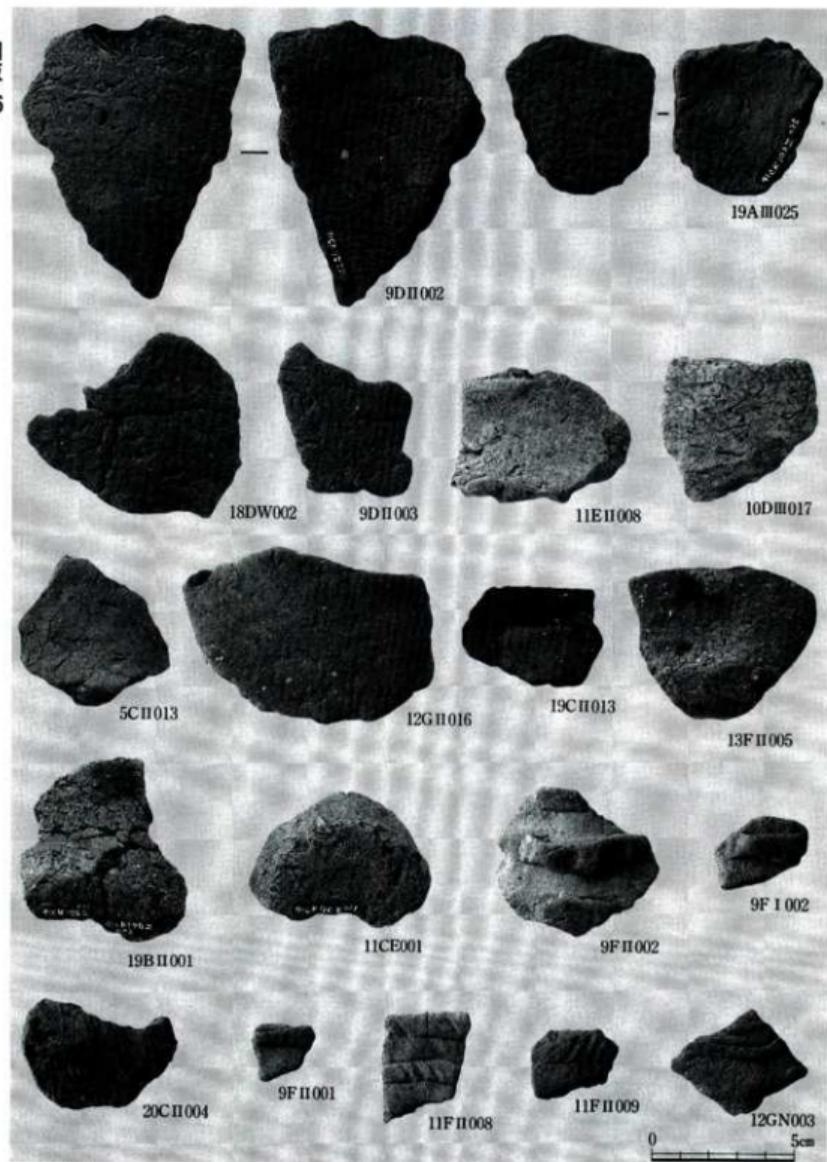
長吉遺跡 包含層出土の土器(7) 第I群



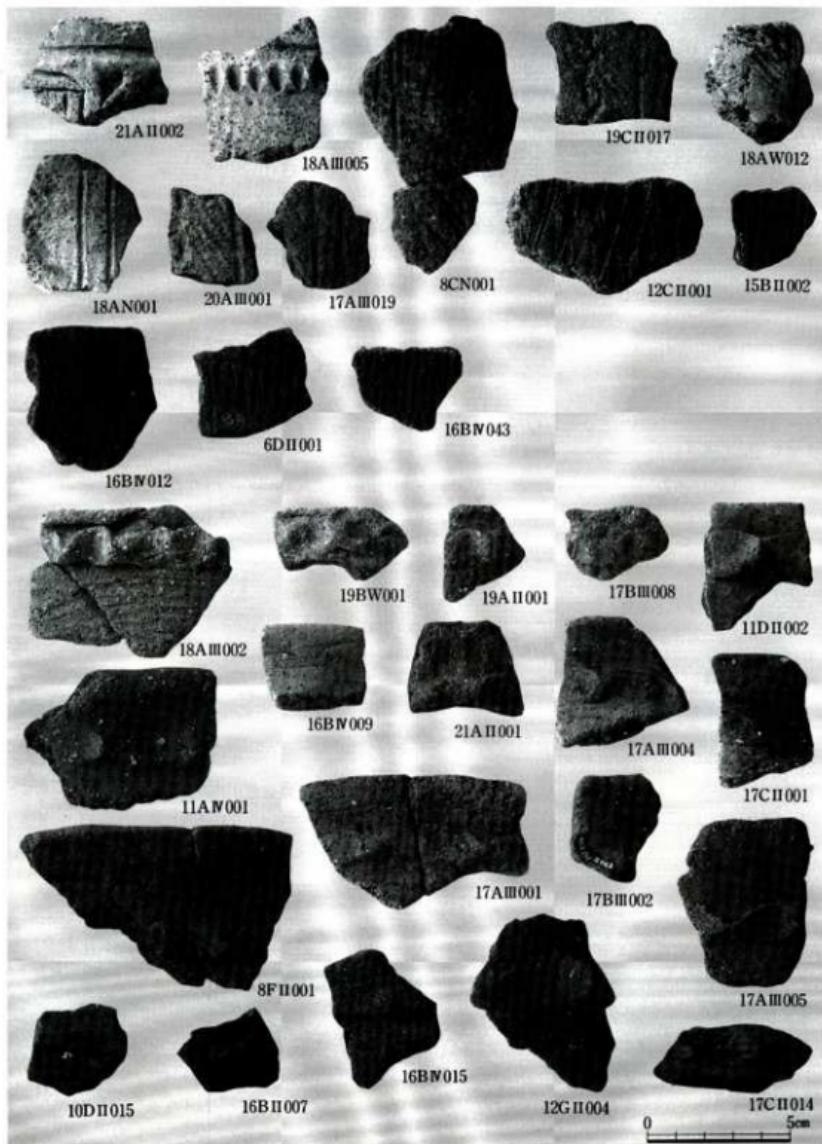
長吉遺跡 包含層出土の土器(8) 第1群



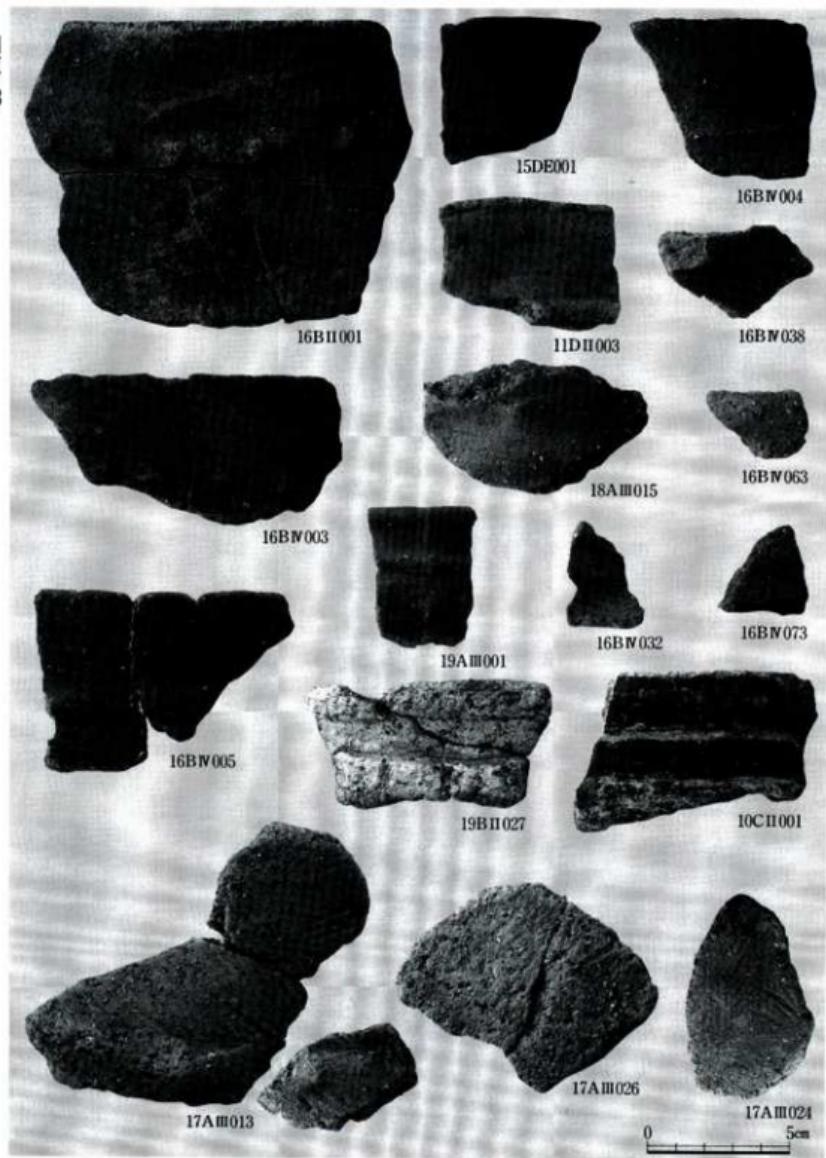
長吉遺跡 包含層出土の土器(9) 第1群



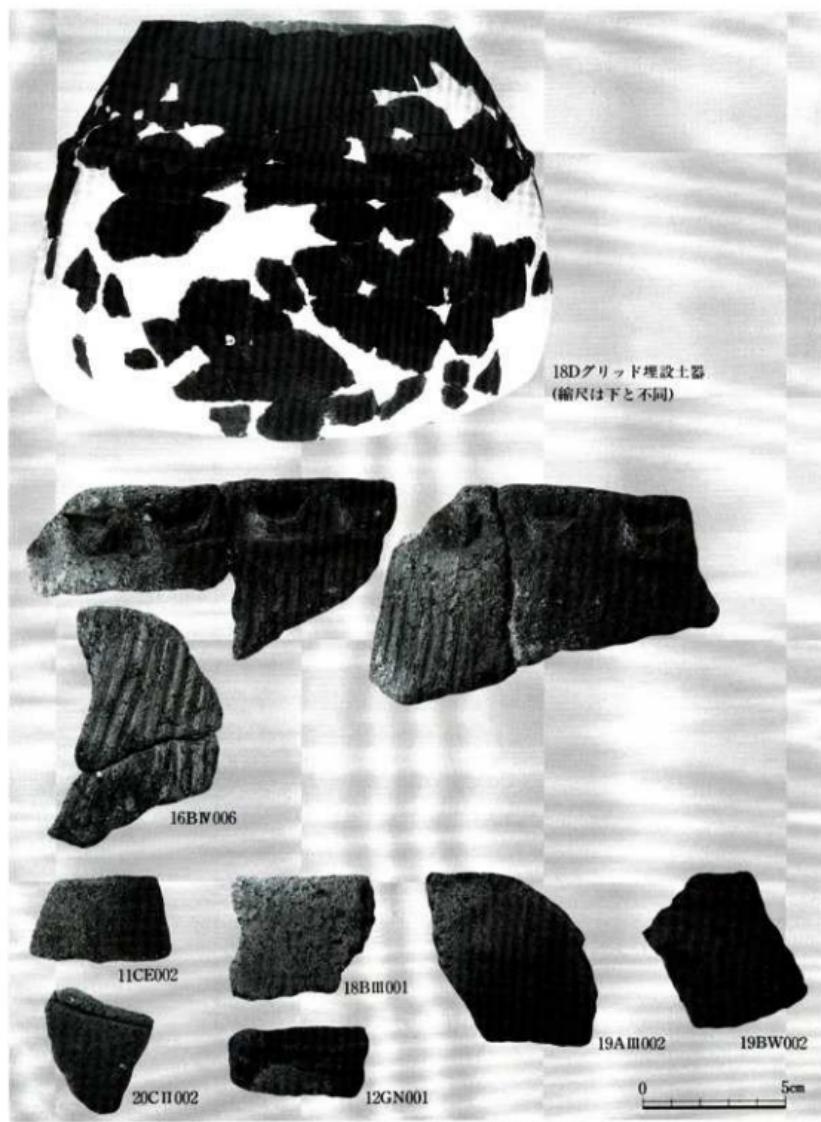
長吉遺跡 包含層出土の土器(II) 第I, II群



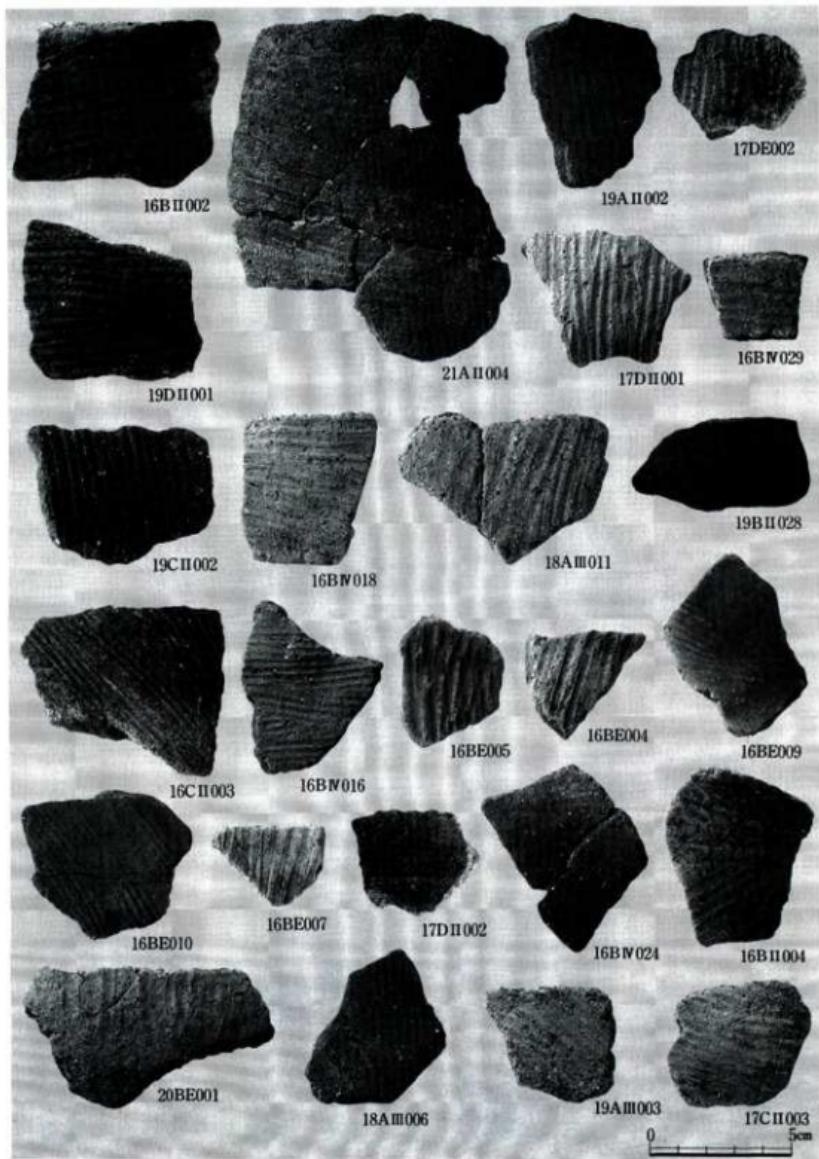
長吉遺跡 包含層出土の土器(II) 第III, IV群



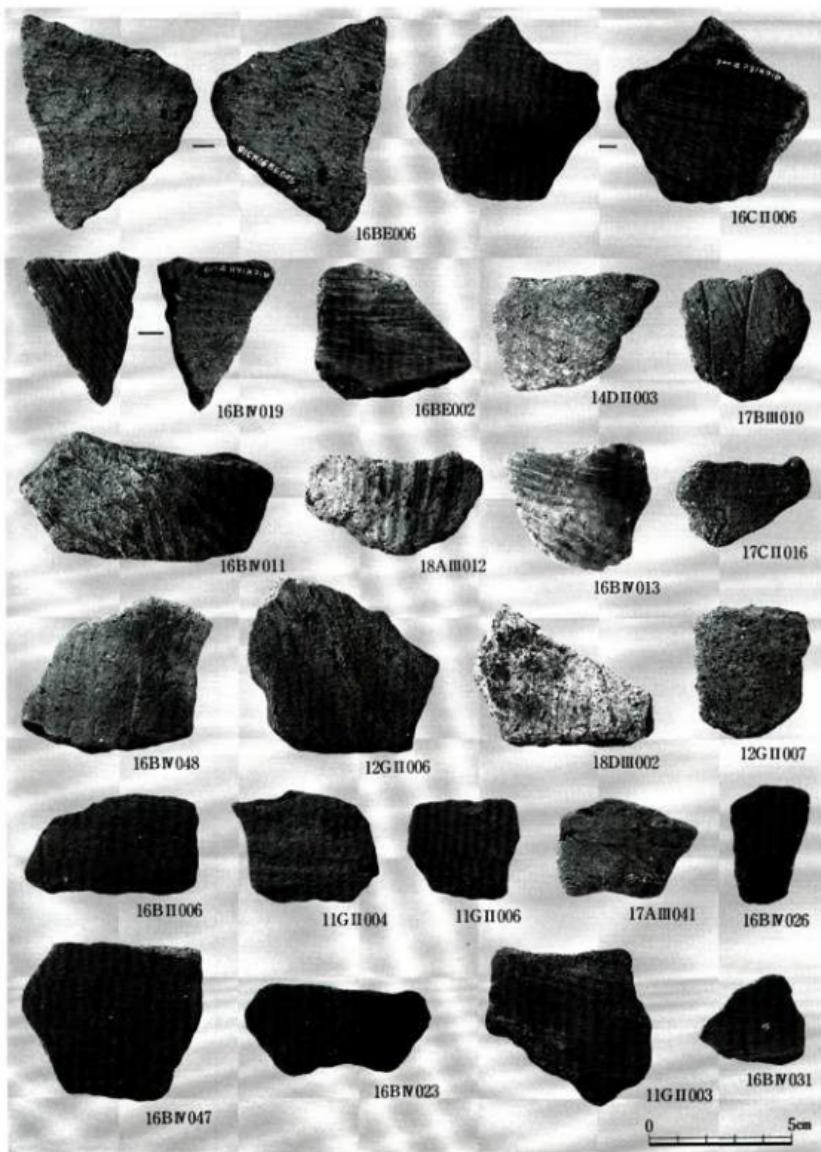
長吉遺跡 包含層出土の土器(12) 第Ⅳ群



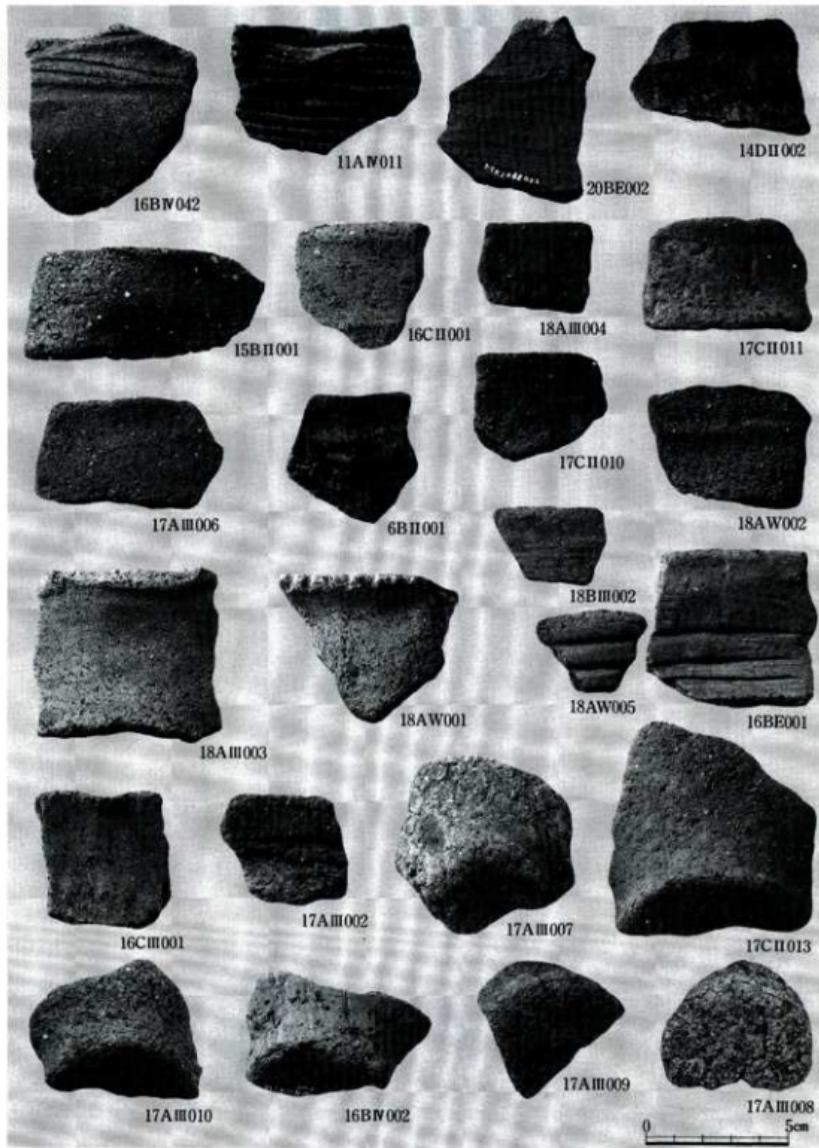
長吉遺跡 18Dグリッド埋設土器(上)と包含層出土の土器(下) 第Ⅳ群



長吉遺跡 包含層出土の土器(14) 第Ⅳ群



長吉遺跡 包含層出土の土器(II) 第IV群

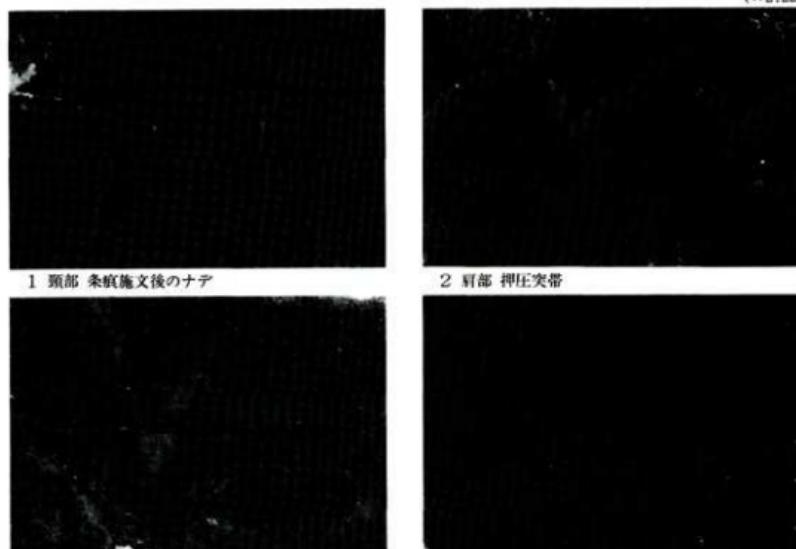


長吉遺跡 包含層出土の土器(16) 第Ⅳ群



長吉遺跡 包含層出土の土器(II) 第IV, V群と陶器

(×2.22)



長吉遺跡 18Dグリッド埋設土器 細部写真



1 凹線文と凹線間の刻目(5CII002)



2 稲曲部の貼り付け隆帯(5CII005)



3 凹線文とD字状刺突文(10DII006)



4 凹線文とD字状刺突文(10DII004)



5 稲曲部の貼り付け隆帯と刻目(10DII004)



6 裏面に見る繊維の混入状況(5CII005)



7 条痕(10DIII006,表面)



8 条痕(10DIII006,裏面)



1 回線による幾何学的文様(11E II 006)



2 半截竹管状工具による連續押し引き(10D III 014)



3 蛇行回線文(流水文)(11E II 005)



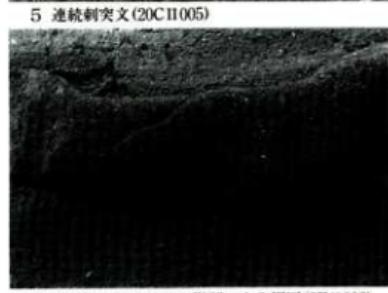
4 繩文(14D II 001)



5 連続刺突文(20C II 005)



6 爪形風の連続刺突文(12G II 002)

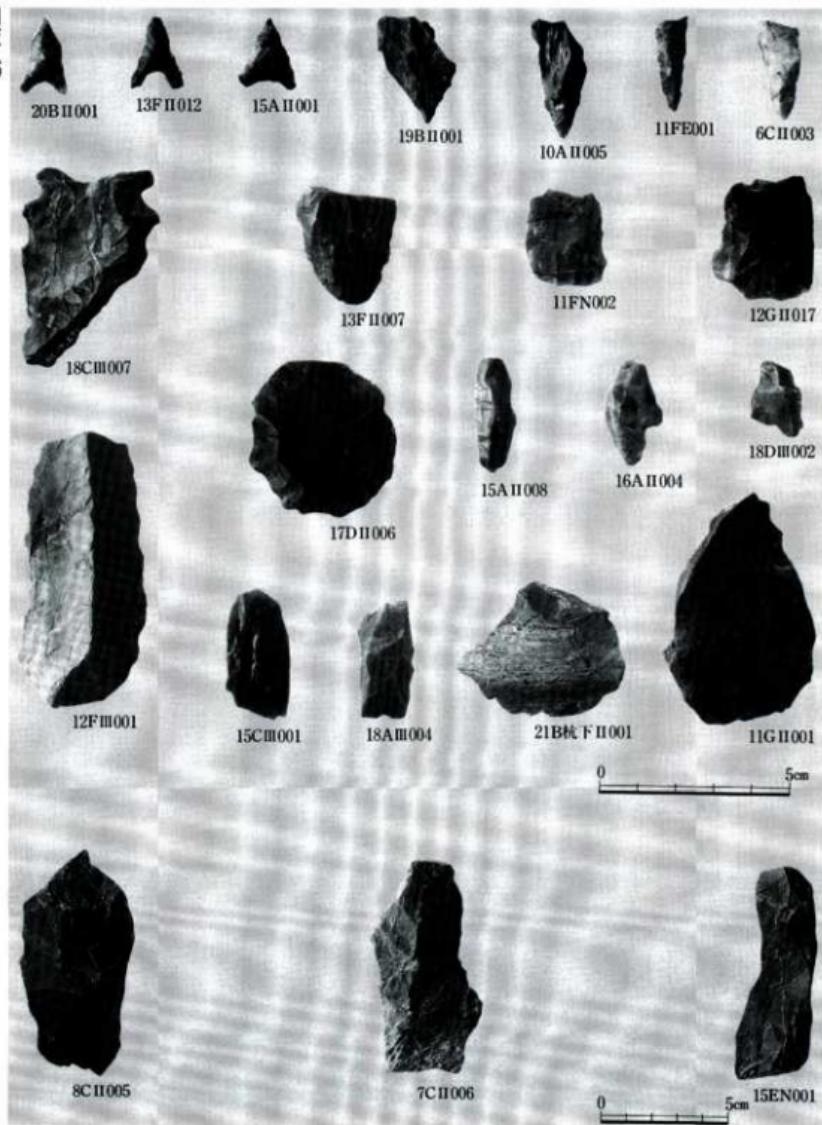


7 粘土繊の貼り付けと指頭による押圧(9F II 002)

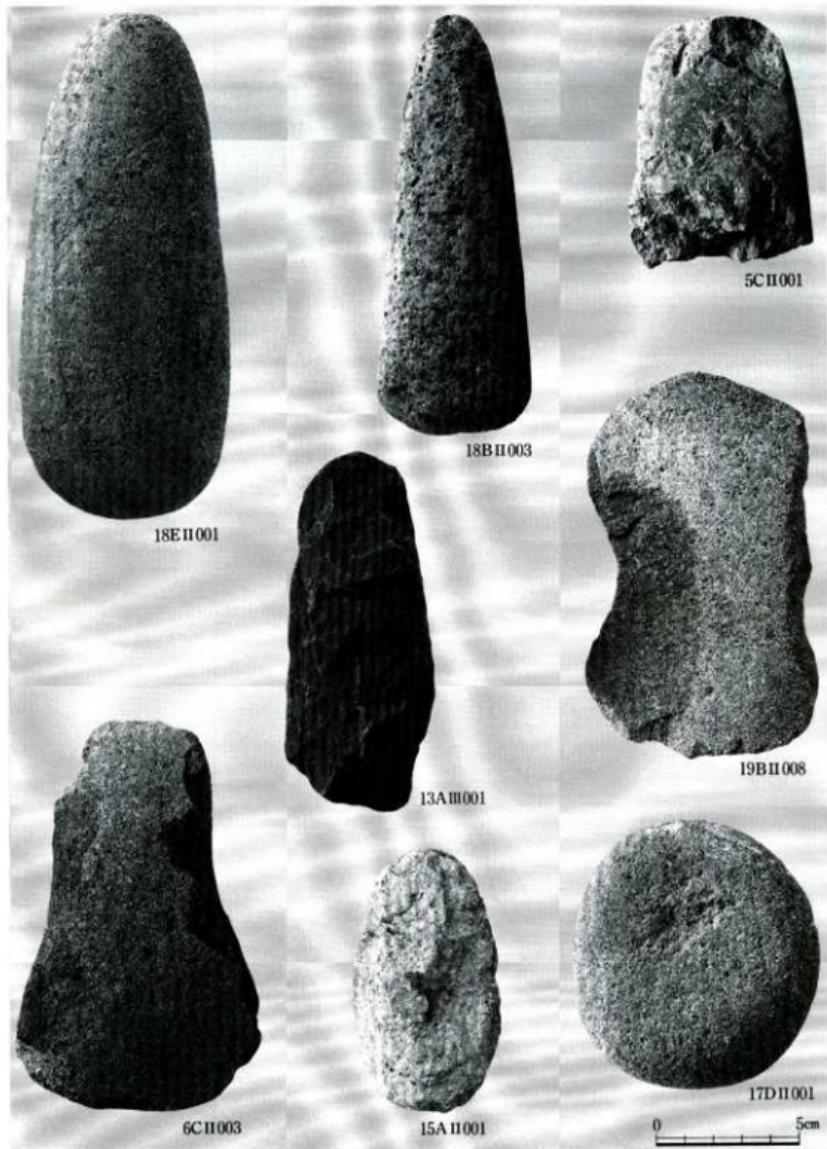


8 粘土繊の貼り付けと斜行条痕(11F II 008)

長吉遺跡 土器細部写真 第I, II群



長吉遺跡 包含層出土の石器(I)



長吉遺跡 包含層出土の石器(2)



1 普賢寺跡 発掘調査前の近景



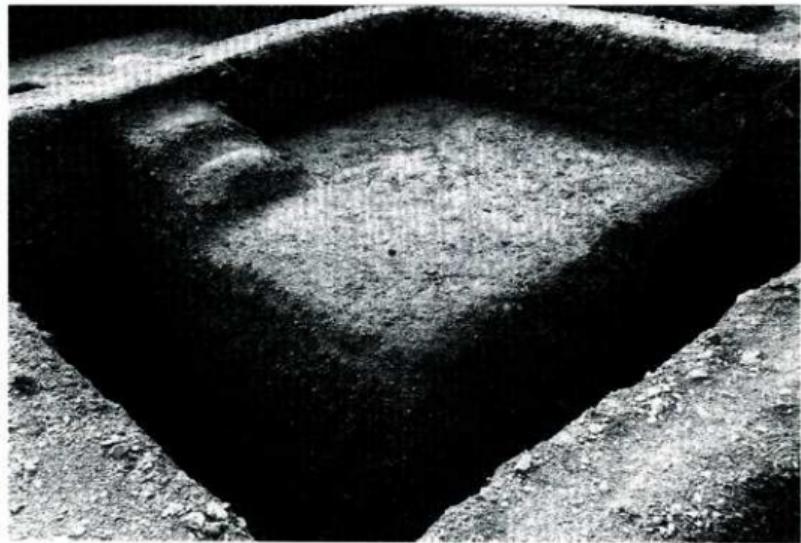
2 普賢寺跡 発掘調査前の近景



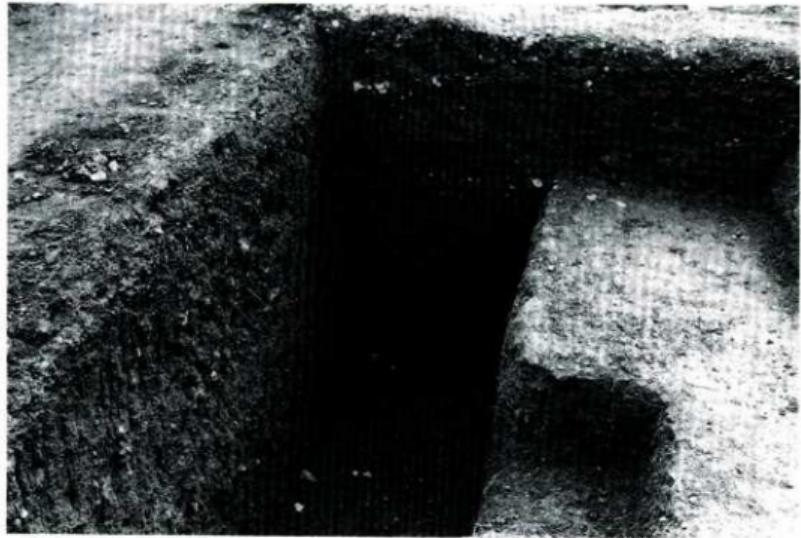
1 普賢寺跡 調査状況



2 普賢寺跡 調査状況



1 普賢寺跡 堀削状況



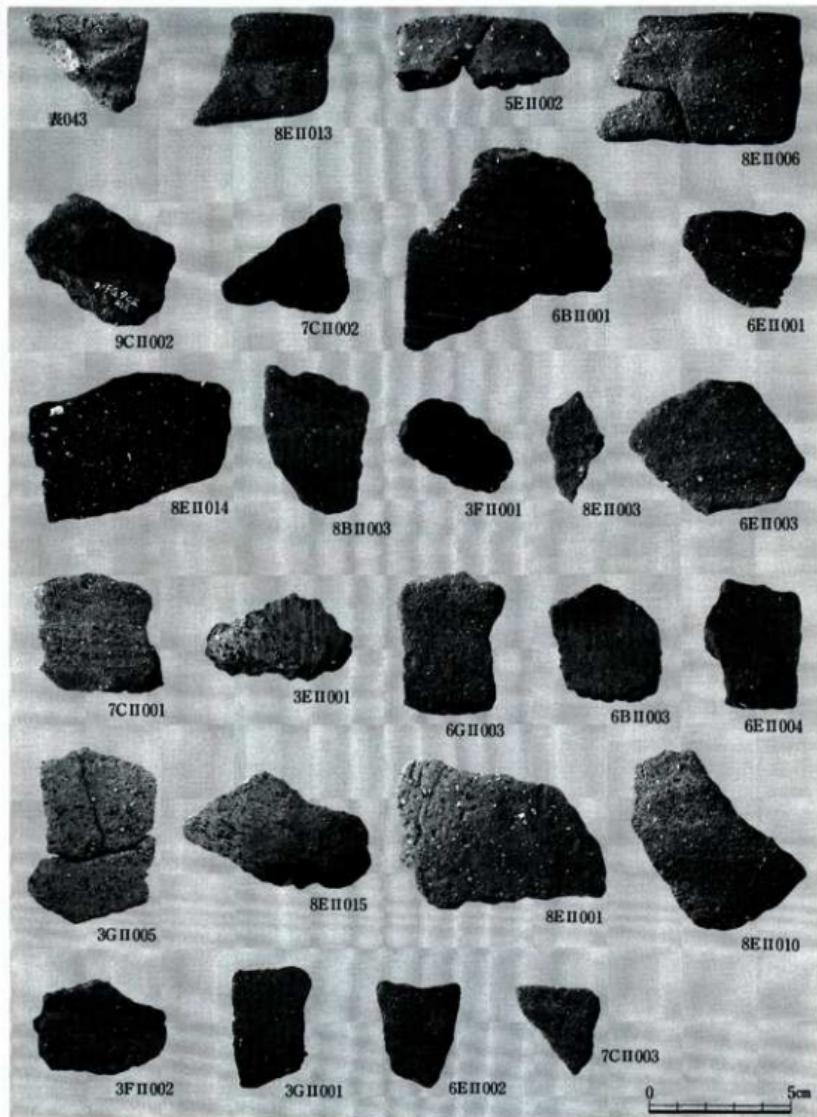
2 普賢寺跡 堀削状況



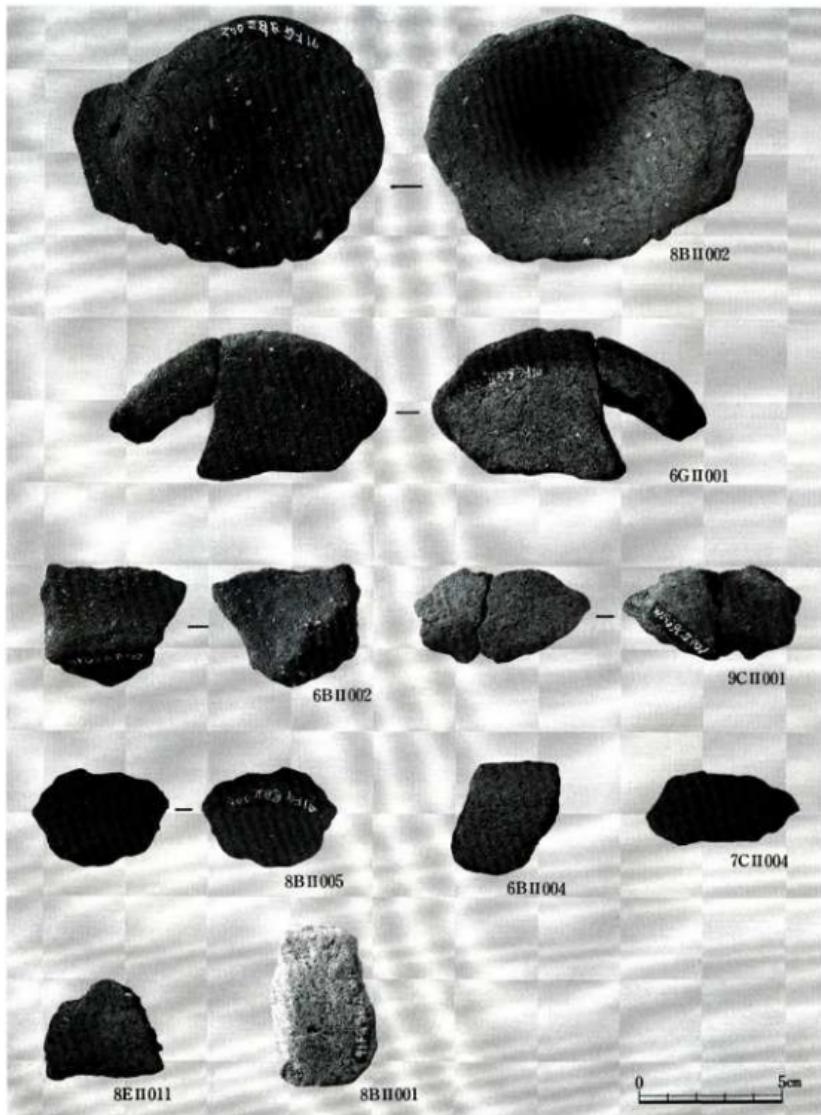
1 普賢寺跡 完掘状況



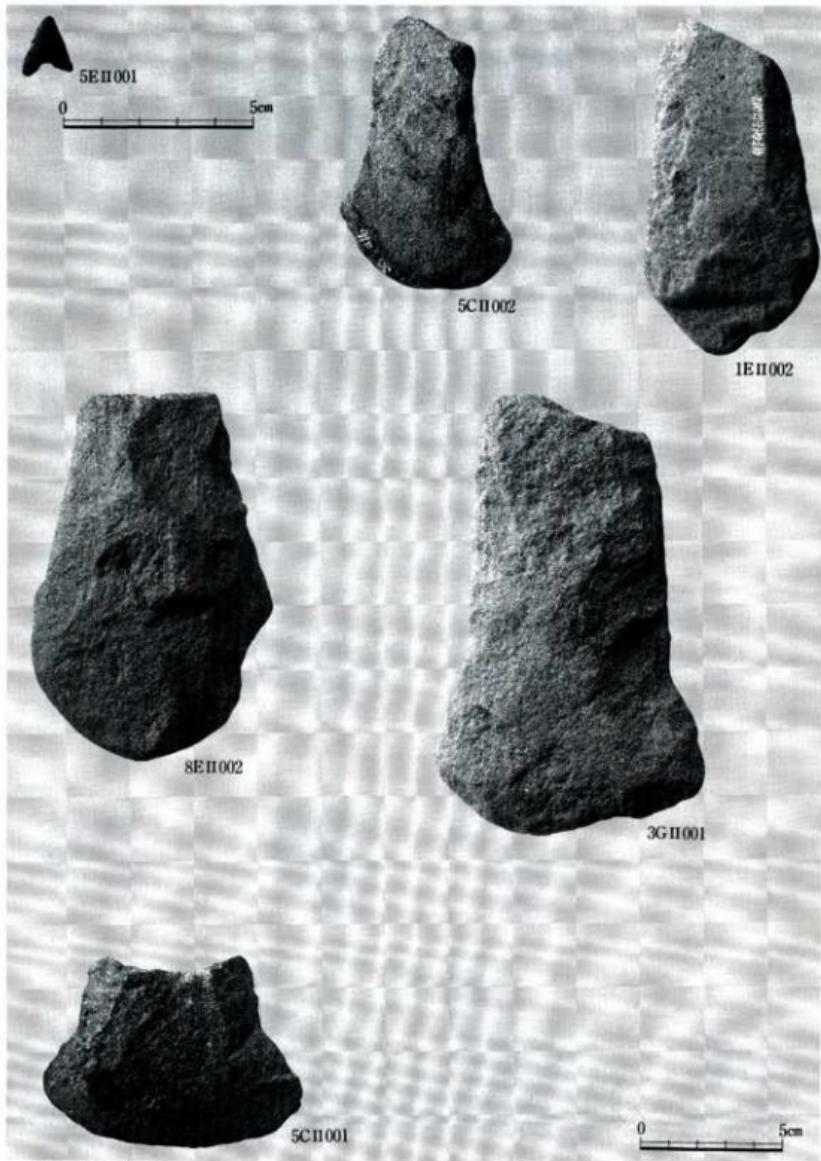
2 普賢寺跡 完掘状況



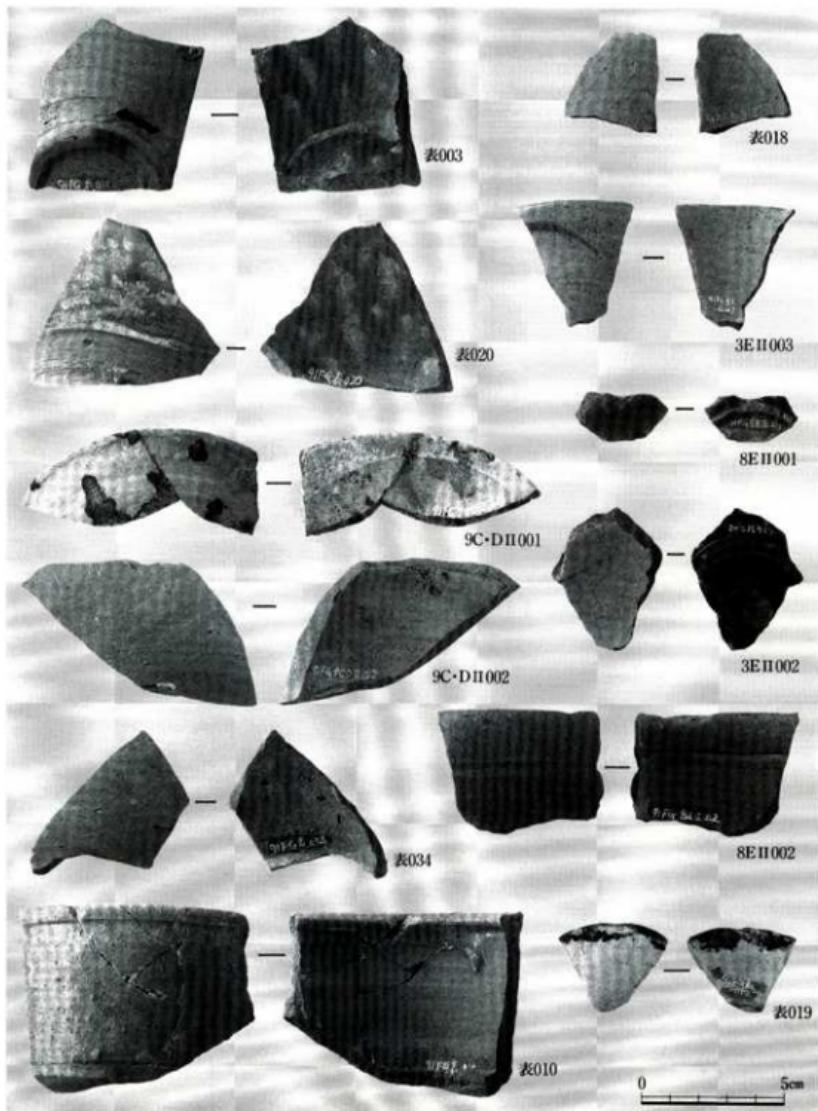
普賢寺跡 表採、包含層出土の土器(I)



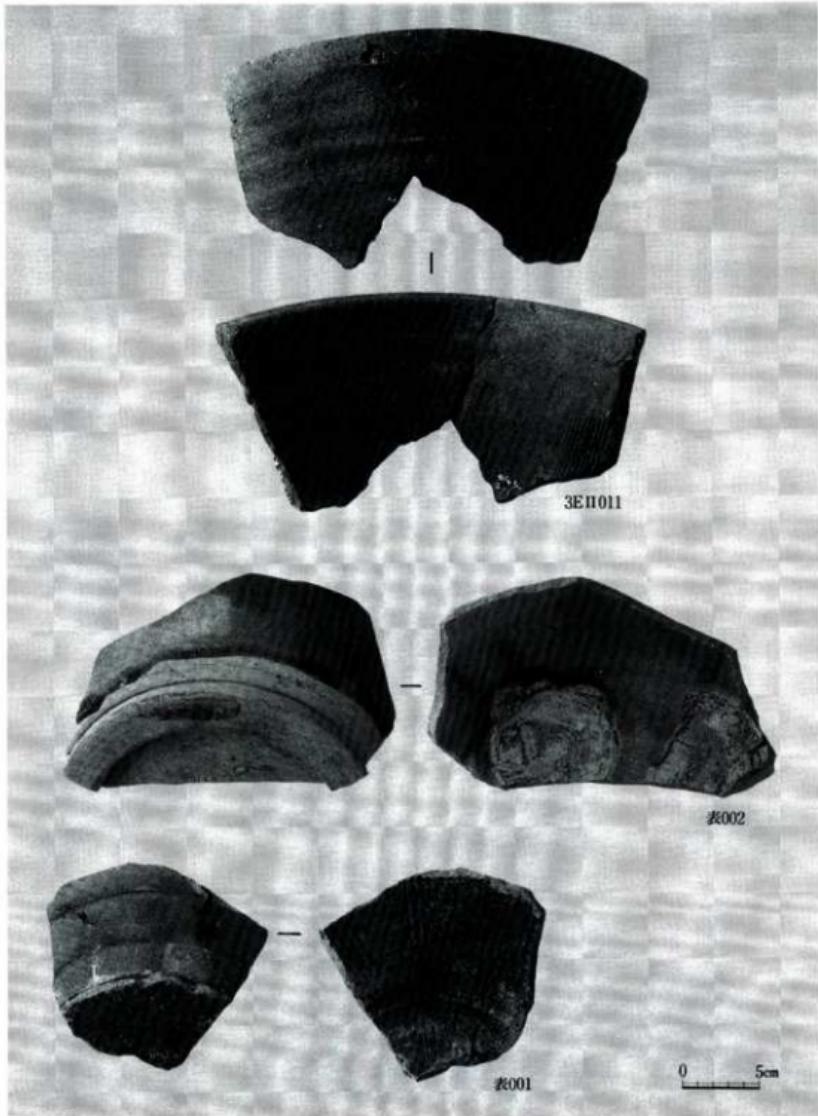
普賢寺跡 包含層出土の土器(2)



普賢寺跡 包含層出土の石器



普賢寺跡 表採、包含層出土の陶器等(I)



普賢寺跡 表採、包含層出土の陶器等(2)

文献データシート

書名	岐阜県文化財保護センター調査報告書 第12集 徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集 「長吉遺跡・普賢寺跡」	
執筆者	篠田通弘・千藤克彦・鈴木昇・小坂宗和・大參義一	
発行所	財團法人岐阜県文化財保護センター	
発行年月	1994年12月	
遺跡名	長吉遺跡	普賢寺跡
読み	ちょうきち	ふげんじ
所在地	岐阜県揖斐郡藤橋村大字塚字ホキ尾、寺平	岐阜県揖斐郡藤橋村大字開田字高
調査原因	徳山ダム建設	徳山ダム建設
種別	散布地(土器埋設遺構)	散布地
時代	縄文(早・中・晩)・中世・近世	縄文(晩)・中世・近世

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第12集
徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集

長吉遺跡・普賢寺跡

1994年12月15日 印刷
1994年12月15日 刊行

編集・発行 財團法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市司町1(岐阜総合庁舎内)
印 刷 昭 和 印 刷